
ジミ's×8

MIDONA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジミ's×8

【Nコード】

N1992S

【作者名】

MIDONA

【あらすじ】

『幼馴染』それは『日常』の象徴。

しかし、普通の高校生、萩本 守は、占い師に放った一言により、8人の幼馴染により『非日常』に巻き込まれることになる。

『幼馴染』の『幼馴染』による『幼馴染』好きのためのハーレムラブコメここにスタート。

※幼馴染好き以外の人も是非どうぞ（笑）

・他サイトにも公開しています。

・只今受験のため、2012年の3月までの長期休載中です。

プロローグ 俺の願いは、8人の幼馴染と同居することだっ！

それは、高校からの帰り道のことだった。

「で、どこに向かつてるんだ？」

はなもとまほ 萩本守は、少し前を歩いている幼馴染に声をかける。

「今、流行の占い師のところよ」

はやみ みさこ 声をかけられた幼馴染こと早見美紗子は、肩まで伸ばした髪を揺らしながらこちらを振り向いてから答えた。熱心に話しているのは、噂好きの本領発揮と言ったところだろうか。

「何でこんなときに」

正直、守としては今日は寄り道をした気分ではなかった。幼稚園のころからの幼馴染である——というよりも腐れ縁といった方が正しい——美紗子の誘いだから着いてきたものの、他の連中だったら即刻断っていたところだ。

原因は昨晚に起こったひとつの出来事にある。隣の家が火事で全焼したのだ。消防士たちの必死の消火活動により、自宅への飛び火は免れたが、昔から近所づきあいのある姉妹が煤をかぶって救助されるまでは、頭が真っ白でどうにかなってしまっただった。そんな出来事の次の日に普通にしているという方が無理である。

新学年というまだ慣れない環境での疲れもあったか、それがイライラという形で姿を表していた。

「あんたが沈んでる顔をしてるからよ。その占い師は願い事もかなえてくれるらしいから、ちょうどいいと思って。でしょ？」

器用にもこちらを向いたまま後ろ向きに歩いている美紗子が答える。

普段は自己中で特に守に対してはろくな事をしない美紗子だが、今日ばかりはこちらに気を使ってくれているようだ。つまり守がその占い師に、火事にあった姉妹にいい事が起こるようにお願いをしろ、とでも言いたいのだろう。実に、美紗子らしい言い方である。

「ありがとな」

そんな、美紗子の内心を読み取って守が礼を述べる。

この場合は内心を読む、というよりも状況判断に近い。この幼馴染でもこの状態の人間を放っておけるはずが――

「かつ、勘違いしないでよ！ 占い師にあんたが不幸な目にあうように頼んで、それが実現すれば、沈んだあんたを見て溜まったあたしのモヤモヤを晴らせるし、噂も体験できて一石二鳥だと思っただけなんだからっ！」

――あつた。

しかも、今日は一段と凄い内容だった。

美紗子は顔を赤くなるほど必死に、守を不幸に陥れる願いの全貌を話している。

性格はこんなんだが、大きな目を始めとする整った顔立ちはやや幼さが残るながらも結構可愛い方だと思っている。流れるようなきれいな黒い髪も、左側の耳の上でチョコンと赤いリボンで止められた髪が動くさまも、守としては見えていて微笑ましい。背も女子としては平均くらいだし、胸も弱点とまらないくらいには育っている。

それでいて、何故か未だに彼氏がいない。去年だけで二桁をいく数の男子に告白されているのだが、すべてその場で迷いもせず断ったらしい。今も含め一緒にいることで和んでいる自分があるので、誰とも付き合わずに自分といてくれることは嬉しいし、誰かと付き合われたら堪ったものではないが、なぜ美紗子は彼氏を作らないのだろうかというのは未だ解決することのない守の疑問だ。

こんな美紗子の様子が見ただけでも付いてきたかいがあつたので、今日は深くは考えないようにしておく。決して自分がMという訳ではなく、いつもどおりの幼馴染の様子を見れたからだ、という意味であることは言っておこう。

「あ。あれよ、あれ」

話すのをやめて前を向いた美紗子は、道の先を指差した。守が指差す先に見たものは、『占い』と書かれた布をかけた机、そしてそ

ここに座っている1人の女性だった。顔に布を被っているが、髪の長さや体格から女性だと判断できる。

「ああ。でも、噂になってるって言う割には人がいない気がするが……」

「だって、学校の中だけだし。雑誌が何度か取材に来たらしいんだけど、何故かその時にはいた事がないんだって」

「へえ……」

不思議なものもあるもんだな、などと思っているうちに話題の人物の前にたどり着く。

「あなたは昨日、隣の家が火事にあいましたね」

守たちが一言も言葉をかけていないにもかかわらず、突然告げられた。しかも内容に間違いはない。事実そうだったからだ。どうやら腕が立つという噂は本当らしい。

しかし当の守はというと、その事よりもその人物の声への違和感で頭がいっぱいになっていた。

どこかで聞いたことのあるその声。会ったことがないが、どこかで、しかも、いつも、話している気がする。火事のあとも、相談を持ちかけた相手だったと思う。しかし、どこで会ったのかは思い出せない。

「その家の人達は、家族4人全員が生き残り、今はホテルに滞在している。違いますか？」

これも事実だった。だが、そんなことはどうでもいい。

何故その声で話す？ しかも、その声で自分をあざ笑うかのように、クスクスと笑っている。

「それで、私にその方達を幸せにするようお願いに来た。そうですよね？ できますよ、私なら。何でも実現することが出来る力を持っていますから」

たしかに、そのつもりだった。だが、最後の言葉にイラっときた。自分の知ってる声で、しかも大事な声で、自信満々に話している女性。そのことが許せなかった。そして、その自信を砕いてやりたい。

その気持ちが次第に強くなっていく。

「残念だが最後のは違う」

強く言い返した、相手に負けないように。

「では何を？」

女性があごに右手の人差し指をつけ、首をかしげる。

「願いは、8人の女子と同居することだ」

何故、それが口を突いたのかは分からない。これなら実現させられない、直感的にそう思ったからかもしれない。

「どのような女子でもよろしいのですか？」

相変わらず気に障る言い方だった。

「それじゃあ、実現できないこともないからだめだ」

「あらあら、ではどのような女子を？」

「幼馴染だ」

これも、直感的に出た。

「分かりました。では、もう一度しっかりと言い直してください」

しかし、女性は自信を持った様子でそういった。

それに負けないように、守は高々に宣言した。

「俺の願いは、8人の幼馴染と同居することだっ！」

このとき、この発言が意味することを誰も予想していなかった。ただ1人を除いて。

ブログ／俺の願いは、8人の幼馴染と同居することだっ！（後書き）

MIDONAです。

何か、いろいろあって新シリーズを書いちゃいました（汗）

他2つもいろいろありました（が、執筆中ですので、近々上げられると思うので、そちらもよろしく願います）。

お立ち寄りの際には、感想をいただけると激しく喜びますので、よろしくおねがいします♪

1章／あたしも今日からこの家に住むことにしたから！

守はいつもの草原の中にいた。

「今日、占い師とあったんだ」

守は向かいにいる少女に声をかける。

「どんな人だったの？」

少女は微笑みかける。

「菜子と同じ声をした。それが、許せなくて」

あの時のことが思い出されて、自然に右手に力が入る。

「ゴメンね」

菜子と呼ばれた少女は頭を下げた。

「何で菜子があやまるんだよ」

菜子が口を開く。

「それは――」

☆

「もう朝か」

守は今日も目覚ましの音で目が覚めた。時間を確認すると朝5時。まだ眠っていたい気持ちを押さえ込み、伸びをして体を起こしてから着替えを始める。

何か夢を見た気がするが、内容を覚えていないのはいつものことなので、気にはとめない。

着替えが終わると、自室のある2階から朝食の準備のために1階へと階段を下りる。

両親と離れて暮らし始めたのは小学4年生のとき。国内のみで行っていた営業を海外にまで手を伸ばしたら、これが大ヒット。それがきっかけで両親が海外での生活を始めたが、友達と離れたくないという理由で妹の美香と日本に残った。

最初のうちは使用人が家事を受け持ってくれていたが、中学にあがるときに行方不明になった。それからは家事は守が受け持っている。

台所に着いたので、冷蔵庫の中を確認するが……あまり食材が残っていないかった。本来なら昨日買出しに行く予定だったのだが、結局行かなかったのが当たり前である。しかし卵とウィンナーが残っていたので、目玉焼きとウィンナーを焼けばなんとかかなりそうだと判断し、守は調理に取りかかった。

調理が終わり食卓に食事を運ぶと、既に着替えをすませた美香が当然のように席に着いていた。

「おはよう」

「……」

いつものことだから既に慣れたが、出来ればガン無視はやめてほしい。思春期で年の近い異性を避けたいのは当然かもしれないが、これは異常だと思う。これで周りからは人当たりがよいと評判なのだから驚いたものだ。

食事を全て並べ終わると、美香が箸入れに手を伸ばそうとした。しかし、自分の箸がないことに気づくと、こちらを睨みつけてくる。この妹には、自分で取りに行くという選択肢がないのだろうか？

「はいよ」

美香が手を伸ばしてきた所で――

「……!？」

――引っ込めてやった。

「礼は？」

「早くよこしなさいよ」

物凄い形相で睨まれた。

「分かった。礼はいいから挨拶くらいしろ」

「……いただきます……」

「はいよ」

別に虐めるつもりはないので箸を渡してやる。

守と2人きりの時はこうしないと、食事の開始挨拶すらしらないので困ったものである。

「いただきます」

守は、自分も挨拶をしてから食べ始める。

ご飯を一口頬張ってから、目玉焼きの黄身に手を伸ばすとトロツと黄色い液体が見える。

今日もうまく焼けたな、と思いながら、ウィンナー摘むと、こちらも噛んだ途端にプシュっという威勢の良い音とともに、濃厚な肉汁が流れ出てきた。使っている食材が良いというのも勿論あるだろうが、焼き方が良かったんだというのもあるだろう。うん、きっとそうだ。

《ピンポーン》

食事を始めてしばらくたったところでドアチャイムの音が鳴り響いた――のだが、だれも動く様子がない。

数秒後、痺れを切らした美香が口を開いた。

「ほら、とつとと出なさい」

「何で俺が!？」

「だって、他に誰がいるの？」

どうもこの妹様の思考には、自分が動くという選択肢はないようだ。

どうせ言い返しても無駄なので、守は気が進まないながらも玄関へ向かう。

「はい」

気の抜けるような声を出しながら玄関のドアを開ける。

「おはよう」

「はあ、おはよう」

すると、ここにいるはずのない2人の少女が立っていた。

1人は、長いストレートヘアで大人の雰囲気をもった少女、も

う1人は髪を2つの3つ編みに結った髪形をした童顔の少女という対照的な組み合わせだ。

「って、涼ねえ、杏子ちゃん、何でここに？」

「とりあえず、あがるわね」

「ちょっと、涼ねえ!？」

2人は、守の質問を無視して勝手に家に上がり込んでくる。

涼ねえこと、琴瀬涼子の性格からして止めても無駄なのは分かっているし、上がられてはまずい理由もないので止めはしない。

守が2人の後ろからついて行くと、美香のいるリビングへと入っていく。

「美香ちゃん、おはよう」

「あ、涼子さん、おはようございます」

すると、食事をしていた美香がさつきとは打って変わって社交的な態度で涼子に挨拶をする。

それにしても、本当に自分に接するときとの差は何なんだろうな……まあ、こんな様子だから周りからは評判いいわけだし、あまり文句は言えないが。

「美香ちゃん、杏子もいるよ!」

「ごめんごめん、アンコもいらっしやい」

自分を無視されたと思ったらしい、涼子の妹である杏子、通称アンコがほったを膨らませながら美香に訴える。やっぱ杏子は小さくて可愛い。これで美香と同じ高校1年生なのだから、世の中には不思議なこともあるものだ。でもまあ胸は、美香よりも杏子の方が……ゴホン。

「あ、守君、ご飯だけでもいいから朝ごはん貰いたいんだけど」
いつの間にか、席についていた涼子が口を開く。

妹様には自分が動くという選択肢が無いことは分かっているの、守は台所へ向かいながら答える。

「目玉焼きとウィンナーしかないけどいい?」

「さっすが守君、太っ腹!」

「おにーちゃん大好きっ!」

本当に、この姉妹は……。

あんなことがあった後ながら、元気な様子であることは何よりなので、守は今日ばかりは文句を言わずに料理に取り掛かった。

「で、なんで家に?」

琴瀬姉妹の分の調理が終わった後、席についてから涼子に尋ねる。やはりというかなんというか、守の食事は冷めてしまっていた。

「んとね、お父さんとお母さんが夜逃げしちゃって」

「夜逃げ、か……」

いきなり出てきた、真面目な話に守は言葉が続かなくなる。

「逃げたのは今朝だから、正しくは朝逃げだけだね」

涼子は、ポキッという威勢のいい音を立ててウインナーを食べながら答える。……いやいや、朝に逃げても夜逃げだからね? あと、それを今言う必要がある?

「やっぱ、原因はこの前の——」

「火事は引き金だけよ。どうも、家を建てるときに危ないところから借金しちゃったらしくてね。今朝、突然ホテルに借金取りが押し寄せてきちゃって、お父さんたちは逃げたんだけど私たちは別の道から逃げてきたわ」

「怖かったんだから」

涼子に続き、杏子も口を開く。話しているその様子から、どれだけ怖い思いをしていたのかが分かる。

親戚の家に行くにしても、連絡をつけるのには時間が掛かるだろうし、おそらく他に頼れるところがないからうちに来たんだろうから、どこに行くか決まるまでの少しの間だけでも、うちでゆつくりしていてもらえば——

「そういうことだから、今日からこの家に住むことにするからよろしくね」

「ちょっと待った」

さすがの守も、こればかりは突っ込んでしまった。

「そうですよ。それに、突然言われても……」

「何か困る？」

「ええと、その……そう、部屋割りも困りますし」

「こんな広い家で、2人暮らしなんだし部屋くらい普通に空いてるわよね」

「うっ……」

美香も口を挟んできたが、涼子の前にあえなく撃沈した。

「だいたい、経緯は分かったけど、何で親戚とかじゃなくてうちのの？」

「それはね、おねーちゃんがどうせならおにーちゃん家ちがいいって言ったからだよ」

「杏子ちゃん、嘘はついちゃだめよ」

「本当のことじゃん」

今度は杏子が説明に入ったのを、涼子が止める。内容は、おそろくいつもの杏子の嘘だろうし、涼子も答える気はなさそうなので正確な理由は迷宮入りのままだ。

「その辺のことは後で話し合うとして、今は――」

《ピンポン》

そこで再び、ドアチャイムの音が鳴り響いた。

まわりを確認すると、美香は相変わらず動く様子はないし、涼子や杏子に行ってもらわねにも行かないので、守は再び玄関へ向かう。

「はい」

そう言いながら玄関を開ける。

すると、そこにはいつものように幼馴染である美紗子がいた――
のでドアを閉める。

「ちょっと、何で閉めるのよ？」

ところが、ドアが完全に閉まる前に美紗子が手を差し込んでドア

をこじ開けてきた。

「何でって……」

とてもじゃないが、琴瀬姉妹が同居するだしないだと話し合っている状況を他者に見せるわけにはいかない。かといっていい言い訳も見つからず、守は語尾を濁すことになってしまった。

「どうせまた、ベッドの下に入りきらなくなったエロ本を玄関にしまおうとしてたんでしょ」

「そんなことするか」

どうして、コイツはエロ本の隠し場所なんて知っているのだろうか。

「とりあえず、中に入るわよ」

「何だよ？」

いつもは入っても玄関までなので、守は美紗子に問いかける。

「あたしの顔を見て玄関を閉めたんだから、どうせ中に何かあるんでしょ」

「だからエロ本なんて」

「何？ 本当にエロ本だったわけ？」

「違います……」

やはり、この幼馴染には隠し事は通じないらしい。

素直に守が端によけると、美紗子は靴を脱ぎリビングへと向ので

「いや、ちょっと待て。そっちは――」

腕をつかんで呼び止めたが、

「別にいいでしょ。見られてまずいものがある訳でもないし」

「割とそうでもないんだが」

結局、振りほどかれた。

美紗子がリビングへと踏み込む。

「涼子先輩!？」

「美紗子ちゃん、おはよう」

「美紗子さん、おはようございます」

「美紗子おねえちゃん、おはよう」

「ああ、おはよう」

三者三様の挨拶に戸惑いながらも、挨拶を返した美紗子がこちらに戻ってくる。

「なんで、涼子先輩がここにいるのよ？」

だから、中に入れたくなかったんだが。

「んんと、同居することに」

「はあ!？」

「じゃなくて、さっき突然押しかけられて……」

あまりの迫力に、自ら爆弾投下しそうになった守だったが、軌道を元に戻す。

「あ、私たちは気にしなくて大丈夫よ。先に学校に向かってるから後から夫婦2人で仲良く来なさい」

リビングの中まで声が聞こえていたのか、涼子が守と美紗子に声をかけた。って、

『夫婦じゃありません!』

美紗子との見事なユニゾンで涼子に返す。

この手のからかいは出来ればしなくてももらいたい。実際は違うのに、学校では、守と美紗子が付き合ってる、ということが周知の事実として扱われてるし。

「どうせなら、おねーちゃんもおにーちゃんと一緒に学校に行けばいいのに」

今度は杏子だ。

「いいのよ、杏子。学校へは好きあってる男子と女子が一緒に行くって決まりがあるから」

「それなら、なおさらでしょ? おねーちゃんも杏子もおにーちゃんのこと好きなんだから」

「何を言ってるのかしら? 杏子ちゃん」

涼子が引きつった笑みを浮かべていた。

それにしても、杏子は純粋で可愛いな。

「大丈夫だよ、涼ねえ。今の言葉の意味くらい分かってるから。ありがとう」

「ゴメン、たぶん分かってない」

涼子からは、会話の噛み合っていないだろう変事が返ってきたが、これ以上会話が長引くと登校時間に間に合わなくなるので会話は一時中断。残っていた朝食を食べるべく、本日3度目のテーブルに着いた。

その日の高校への登校時間、守と美紗子は2人で道を歩いていた。涼子の言葉通り、守と美紗子を除く3人が先に高校へ向かったためだ。

「で、本当に同居するつもり？」

隠しておくことも出来そうにないので、守は美紗子に今朝のこと全てを話した。

最初は半信半疑だった美紗子だが、後に真剣に話を聞くようになり、こうして今、今後のことについての相談に乗ってもらっているところである。

やはり、美香がいるとはいえ、未成年の異性の同居はまずい、というのが美紗子の意見だった。

「だから今悩んでるんだって」

詳しい事情は分からないし、自分は何もする気は無いといえども、守の意見も美紗子と同じものだ。しかし事情によっては仕方が無いかな、と思っている節が無くもない。

「まあ、いいわ。とりあえず、両親にも相談しときなさいよ」

「ああ」

言い方はあんなんだが、守の判断に一任してくれる、という意味の判断で間違いないだろう。

「あと、どっちに傾いても、あたしに報告すること。それじゃあ、早く学校行くわよ」

「おい、待って」

最後に余計な一言を残していくあたり、やっぱ美紗子だ。どっちにしても美紗子には結果を伝えるつもりだったので問題ないが。

突然走り出した美紗子を追って、守も学校へと走り出した。

守が自分の教室である、23HRホームルームに入ると、いつも通りの見慣れた光景が広がっていた。

のだが、着いてから数分と経たないうちに、教室はあるひとつの話題で持ちきりになっていた。

それ自体は、特に気にすることではない——本来なら。

「おい、本当か？ 女子と同居するって話」

ただし、その話題の内容が自分に関わることだと話は別になる。

どうも、美紗子が学校に來たとたんに、仲のいい友達に今朝の事件を話したらしい。

女子たちからは、まだ様子見といった感じで守に真偽を確かめにくる様子はまだなさそうなのだが、そうなるのも時間の問題だろう。今日の前で質問してきているのは仲のよい男子2人だからいいものの、これが女子だったらどうなるのだろうか。周りを沢山の女子に囲まれて、質問攻めにされる。これが、どんなにきついかな……あれ？ それって考えようによってはハーレムじゃね？ モテ期到来、ビバ、リア充！？

「おい、守。戻って来い」

「!？」

声をかけられて、現実逃避をから戻った守は、覚悟を決めてから聞き返した。

「んで、なんだっけ？」

「だから、今流れてる噂が本当かどうかってことだよ」

最初に話しかけてきた男子、山口大樹やまぐち だいきからの二度目の質問が來た。
「まあな」

「うお、すげーじゃんそれ！」

今度は、鈴木浩太すずき こうたが、興奮した様子で口を開いた。

「どこがだよ。考えてもみろ。大変なことはあっても、いいことなんてひとつも——」

「何を言ってるんだ。女子との同居生活っていったら、全ての男子高校生の夢じゃないか！ 間接キスあり、ラッキースケベあり、そして、最後にはベツトで……うお……、やっぱいいことばっかじゃないかー！」

「ないだろ、そんな展開。最後のをやった日には退学になりかねんし。てかおまえ、三次元の女子には興味なかったんじゃないっけ？」
「ああそうだ。だが、ギャルゲーでしか起こりえないシチュエーションを体験してみたいと思う気持ちの何が悪い！」
全てだ、という解答はあえて返さない。

浩太は三次元に興味がないと公言している。しかし、その理由が自宅が神社で、女子と付き合うことが許されないから、ということらしい。宗教上の規律を守ってるのはえらいと思うが、その結果が二次元ってのがな……。

「何？ あんた、もう同居するって決めたの？」

突然聞こえてきた声の方を見ると、一通り噂を流し終わったらしい美紗子が、腰に手を当てたお馴染みのポーズで立っていた。

「だから、まだ検討中だって言ってるだろ」

この幼馴染が、からかってくるのはいつものことなので、守はムキにならず出来るだけ平然と答える。

「ふーん。じゃあ、何で山口君の質問を肯定したのよ？」

「だって、今朝押しかけてきたのは事実だし——」

そこまで言ったところで、守は違和感を覚えた。あれ、確か、大樹の言った言葉は……

「ちょっと待て。押しかけては来たが、まだ同居するとは……」
「というか、この話題の発端って……」

「おい、美紗子！何で、嘘を流してるんだよ」

「あたしは、同居するかもしれないって言っただけよ」

「じゃあ、何で——」

——嘘が流れてるんだよ、と言おうとしたところで、守の頭にひとつの考えが浮かんだ。

考え、というより少し考えればわかる。おそらく、人から人へ移るときに噂が拡大解釈されたせいだろう。いつものことなので、ほぼ間違いないと思う。

しかし、自分がその対象になると厄介なことこの上ない。改めて女子の恐ろしさを痛感させられる。

「そろそろ時間だし席に戻るから」

そんなことを言い、美紗子が自分の席へ向かっていくので時計を見ると、すでにSHRショートホームルームが始まる時間だった。

「俺にも幸せを分けるよ!」

「達者でな」

大樹と浩太がそれぞれ言葉を放って席に戻る。

だから、幸せとは間逆で……てか、死ぬこと確定!?

まったく当てにならない友達の背中を見送りながら、守は沈んだ気持ちでチャイムを聞くことになった。

そして、その日の昼休みには、噂は学校中に知れ渡ることとなった。

「ただいま」

「おかえり」

「おかえり、おにーちゃん」

家に帰ると、涼子と杏子が当然のように出迎えてくれた。妹からの返事がないのはいつものことなので気にしない。

そのまま、手を洗いに水道へ向かおうとしたところで——

「おにーちゃん、私たちがこの家に住むのを許してくれてありがとう」

杏子がとんでもない言葉を口にした。

「へ!？」

守は杏子の言葉に対し状況が理解できず、素っ頓狂な返事をしてしまった。

少なくとも、自分はそんなことを話した覚えはない。そして、この家のことについての決定権は守にある、さすがの美香もそれくらいは理解しているはずだ。他に考えられる可能性は……

そこまで考えたところで、一つの考えに思い当たる――

「だって、学校でそういう話が流れてきてたわよ」

そして、それが正しいのを涼子の言葉で思い知らされた。

「それは、少し間違ってる――」

今ここで否定しないとえらいことになるそうなので否定しようとする、

「だって、守君が肯定したって……」

「……」

やはり今朝のあれらしい。確かに、一度は肯定したし、その後も否定していない。昼休みに女子に囲まれたときも、ボロが出ないように基本黙り通していた。

つまり、守には否定のしようがないわけで……。

「そういうことだからよろしくね」

いつの間にか、同居の決定する羽目になっていた。

本人が了承してないのに、そういうことだからって……。

「そういえば、まだ親父に許可とってないし」

名案だ、とばかりに思いついたことを言ってみた――のだが、

「お父さんも、泊めてもいいってさ」

美香の言葉に、あえなく撃沈した。

なんで、この妹はこういう時だけ口を挟んでくるのだろうか。

こうして、守の意思とは関係なく、琴瀬姉妹の同居が決定することとなった。

一旦着替えなどをして、部屋割りや一緒に過ごす上での取り決めなどを話し合った後、約束にもなっていたので守は美紗子に結果を伝えるために電話をすることにした。

「つてことで、結局、うちに一緒に住むことになったから」

半ば予想できる反応はいいものではないので、最後の方が下げ調子な上、ボソツとした話し方になってしまった。

『は！？ 何で、そういう結論に達するのよ？』

やはり、予想通りの反応が返ってきた。

たしか、結論は守に一任してくれることになっていたはずだし、そもそも、同居の1番の原因を作ったのは美紗子だし。

しかしその後も色々文句をつけてくる美紗子の様子からすると、おそらくそんなこと気づいてないんだろうな、ということが分かる。

守が言い返せずに、適当に相槌を打っていると、

『分かったわ。ちょっと待ってなさい！』

……待ってなさい？

「おい、どういうことだよ！」

『だから、とりあえず待ってなさい！』

何が、とりあえずなのか分からないが、再び聞き返す前に一方的に電話を切られた。

美紗子が相手だとよくあることなので、気にしなくていいだろう、という結論を出した。

守は、一度ため息をついてから、受話器を元に戻し、夕食を作るために台所へと向かった。

朝ごはんは適当に済ませてしまったので、夕食はしっかり作ろうと守は意気込んでいた。

琴瀬姉妹は一応客人なので、家事をやらせるわけにはいかない。美香が動く気がないのは分かっているので、話し合いの結果、当然

のようにほとんどの家事を守がする流れになった。

家事を受け持つこと自体は、そんなに苦ではないものの、人数が普段の倍になるとさすがに色々大変になってくる。

今日の夕食はから揚げの予定だ。学校帰りに、スーパーで買ってきた鶏肉を下ごしらえしているところだが、量が普段の倍はあるので単純に考えて時間も倍はかかる。涼子あたりに手伝いを頼んでもいいのだが、あまり気が進まなかった。

もてなすはずの相手に手伝ってもらうことへの抵抗もたしかにある。だがそれ以上に、涼子の料理は――まずくはないんだが……いや、むしろおいしい方だと思うが、作り方が独特というか、何でそんな調理方法で作れるのか分からない、ハッキリ言って変の領域を乗り越した作り方をするので正直手伝いにならないからだ。

美香は美香だし、杏子は見た目の通り小学生に手伝ってもらっているのとさして変わらないので、いない方が楽と言っても過言ではない。

ふと幼馴染の美紗子の顔が頭に浮かんだが、ここにいないし、わざわざ呼ぶわけにもいかないのでどうしようもない。

そんな思考を頭の中でめぐらして自分ひとりでやるしかない心に決めて、鶏肉に小麦粉をまぶし始める。

半分ぐらいが終わり、一息つこうと体を伸ばしていたところで……

《ピンポン》

突然、ドアチャイムが鳴り響いた。

琴瀬姉妹に行かせるわけにもいかないし、美香は動かないだろう。そもそも他の三人は2階にいて守は1階にいたので距離的に考えても、守が出るべきなので、手を洗った後玄関に向かう。

「はい」

時間的にも、どうせ宅配便か何かなのですぐに終わるだろうと思いい、いつものように声を出しながら玄関を開ける。

するとそこには、予想通り大きな荷物を持った、しかし、予想外の人物が立っていた。

その人物は、先ほどここにいて欲しいと願った相手で……つまり、幼馴染の美紗子がそこにいた。

「どうしたんだよ、こんな時間に」

守は、ドアノブに手を置いたまま美紗子に問いかける。

自己中ながらも面倒見のいい幼馴染だが、わざわざ夕食の手伝いに来たわけでもあるまい。というか、来て欲しいと思っていた時に来るってどんなにタイミングいいんだよ。

「……」

「まあ、いいからとりあえず上がれよ」

守は、何か言いたそうに顔を赤くしている美紗子を、とりあえず家に上げるように端によける。

どうせ、親と喧嘩して逃げ込んできたか何かだろう。頻繁にあるわけではないが、さして珍しいことでもない。

しかし、美紗子は動こうとせず、先ほどと同じように赤くした顔を伏せ気味にしている。

「おい、美紗子？」

どうしたものかと、守が美紗子に問いかける。すると、何かを決意するかのように、意志のこもった瞳を守に向けて、美紗子は一息に言い放った。

「あたしも今日からこの家に住むことにしたから！」

突然すぎる美紗子の宣言に、守は言葉の意味を理解できずにいた。

2章 萩本君の家にお世話になることになってると思うんですが、聞いていますか

「分かったからとりあえず上がれ」

ようやく思考が追いついた守は、とりあえず美紗子を家に上げることにした。

美紗子がこんなことを言い出した理由として思い当たるのは2つ。1つ目は、親と喧嘩して自宅に帰りたくないから。2つ目は、異性と同居という突然のことで困っている守の手伝いと監視という理由だ。

もし、後者だとしたら、自分も異性で萩本家に泊まったら問題になる、なんてことは考えてないんだろうな、おそらく。この年になってもお互いの家に泊まることは珍しくないのです、当たり前といえは当たり前か。

しかし、ノースリーブに股下まででしかない丈の短パンという、見てる方が寒くなりそうな部屋着姿であるあたり、前者の可能性のほうが高いか。

「何しろじろ見てんのよ、気持ち悪い」

気づかぬうちに、美紗子を、それも素足を見てしまっていたようで、そんなことを言われてしまった。そこまで素肌をさらしてて、見るなというほうが無理な気がするが、そんなことを言えばここで口論になってしまうのは分かりきっているので、文句はつけない。

「いいから、とりあえず上がれ」

「分かったわよ」

美紗子が玄関で靴を脱ぎ、洗面所の方へ向かっていくのを見てから、玄関を閉め再び台所へ向かった。

「ふう……」

鶏肉に小麦粉をまぶし終え、揚げられるところまできていた。

鍋の大きさから考えて、一度に揚げられそうなのは6個くらいが限界のようだ。4人分ともなると、やはり時間がかかりそうだ。美紗子も夕食が必要かもしれないが、材料が余っていないので、1人分を減らすしかないだろう。

必要なことを確認し終えたので、守は鶏肉の乗ったトレイを持って油の入った鍋の前に立つ。

できるだけ油が飛ばないように気をつけながら、静かに鶏肉を油に入れる。ジューという音と共に、鶏肉の色が変わり始める。あとは、薄く色が着き始めるまで放置すればいい。肉の色の変化に気をつけながらトレイを机の上におく。

「ん、よし」と

一通り肉を油の海に落とし入れたところで、リビングの方から美紗子の声が聞こえてきた。声の様子からエプロンをつけているようなので、おそらく手伝ってくれるつもりだろう。

やっぱ、持つものは気の利く幼馴染だな、などと思っていると、

「守、今日の夕飯は何？」

そんなことを聞きながら、美紗子が台所に入ってきた。

「……」

その姿を見た守は、驚きと興奮のあまり言葉が出なかった。

美紗子がエプロン姿で、台所に入って来たところまではよかった。新しいものだろうか。着ているエプロンは、少し大きめながらも、フリルとレースがついている。普段の美紗子の服装とは違うし、とても可愛らしくて似合っていると思う。この幼馴染もこういう女子らしい服が似合うんだな、と改めて実感させられる。

しかしそうは思いながらも、守の視線は他の部分に釘付けになっていた。言葉が出なかった真の原因は、その格好だ。

守の目の前に姿を現した美紗子の姿、着ているエプロンからは柔らかなような傷の無いきれいな手足が覗いている。それは付け根から先まで全てが見ていた。

それは、つまるところ、覗いている手足には何も着ていないとい

うことで……。

それが意味するところというのは……。

……これはあの有名な、は……、裸エプロン……!?

美紗子の姿に見慣れている守でも、さすがにこれはヤバかった。だって、顔は充分きれいで、クラスでの人気ナンバー1^{ワシ}といっても過言ではないほどの幼馴染が、服を着ずにエプロンしか身にまわっていない姿で登場してきたんだ、しかも、自分のために。これで、理性を保ってられる方がおかしいと思う。

見えている手足は、改めてみるとやっぱり綺麗で、ここまで傷が無いのはもう奇跡といえるほどの代物で、いつも見ているはずなのに、どうしても見入ってしまう。顔も綺麗だし、顔を赤くしてモジモジしている様子が、またたまらない。こんな恥ずかしい思いをしながらもやってくれているというのがまた愛おしく見える。

もう、いつそのこと、ここで今すぐにでも抱きしめたい。今日は同じ屋根の下で眠るわけだし、このままゴールインでも……普段なら絶対殴られるが、ここまでしているなら本人も了承しているということだろう。

普段は気にしていないが、髪から香るシャンプーの香りもいつも以上に気になって、理性がとうとう抑えられなくなりそうだ。

それにしてもこのシャンプーの香りは何だろうか、ほんのり甘くて、すんだ香りは。それに、新しく何かが焦^こげているような香りもしてきた。

どこにこんな焦げたような香りのシャンプーが売っているんだろうか……ん、焦げて?

「守、唐揚げ!」

「!?!」

美紗子の声で、守は現実呼び戻された。唐揚げを揚げっぱなしだったことを思い出し、鍋の前へ急ぐ。中を覗くと、多少焦げっぽい色になっていた。

やってしまったものは仕方が無いので、菜箸とキッチンペーパー

を乗せた皿を手を持ち、すぐに唐揚げを油からすくいあげる。油からあげてみると、思っていたよりも焦げてしまっていた。

「もう、料理中にボーっとしてるからこうなるのよ」

ボーっとしてしまったのは誰のせいだか、美紗子は分かっているらしい。ひとしきりそんなこと言った後、唐揚げの方へ向かった。とはいえ、自分が動揺してしまったのもまた事実。それゆえ守は何も言い返せず、なんとなく美紗子を眺めていた。そうしている間にも、さっきの興奮がどうしても思い出されてしまい――

「あっつ！」

突然、美紗子の声が響いた。

その声で、再び現実に戻された守は、一瞬で状況を理解した。

「馬鹿」

美紗子の手をつかんで水道の下に持っていった後、蛇口をひねった。

「……火傷はしてないみたいだな」

しばらく冷水を当てた後に患部をみる。少し赤くなっているながらもそれだけで、火傷にはなっていないみたいだ。

その事実を確認して、守は安堵の息をついた。こんな綺麗な手に傷がついたらたまったものではない。

「ちよっと、早く離しなさいよ」

気づかぬうちに必要以上に美紗子の手をつかんでいたらしく、顔を真っ赤にして振りほどかれた。

「お、悪い。でも、何で揚げたての唐揚げを触ろうとしたんだよ？」

「焦げてたから、食べられるかどうか味見しようと思ったのよ」

謝ってから疑問をぶつけると、美紗子は顔を多少赤らめながらも、腰に手を当てたいいつものポーズで堂々と答えてくる。さっき唐揚げに触れた方の手を腰に当てているので、やっぱり火傷にはなっていないみたいだ。

ていうか、どんな理由をつけようと、それは立派なつまみ食いって行為だからな。

守は内心でため息をつきながらも、出来るだけ美紗子の気に触らない言葉を選びながら後を続ける。

「そりゃどうも。でも、揚げたての唐揚げを素手で触ったら危ないってことぐらい、ちよっと考えりゃ分かるだろ」

「知らないわよそんなの。元はといえば、よだれ垂らしながらボケッとしてて、唐揚げ焦がしたあんたが悪いんでしょ」

相変わらずの横暴な理論のすり替えだった。それにしても、そんなひどい顔をしていただろうか？ 確かにボケッとしてた自分が悪いのも一理あるが、間違いなく美紗子の方が悪いはずだ。その：裸エプロンで目の前に出られて、平然としているというほうが無理に決まっている。今も目の前には……とりあえず考えないようにしよう。

こうなった美紗子には、理論が通じないことは分かっている。その上、自分が下心満載だったことをさらけ出すのも気が引ける。どうしようかと悩んでいたところ、ふと本当によだれが垂れていなかったか不安になって口元に手を持っていく。

「バツカじゃないの、本気にしちゃって」

「……!？」

——謀られた。

美紗子の言うとおり、口の周りにはよだれなどついていなかった。今考えればついてれば自分で分かるはずだ。わざわざ試した自分が馬鹿馬鹿しく思えてくる。

「第一、あの格好で出てこられて見とれるな、って方が無理に決まってるだろ」

しかしこの言葉が発端となり、美紗子への文句が口を突いた。

それを聞いた美紗子が、一瞬はつとしたような顔になる。その後、再び顔を赤くしてうつむかせながら口を開いた。

「あのそれって、この新しいエプロンがそんなに似合って——」

「さすがに、服くらい着てこいよ」

やっぱ恥ずかしいもんなんだな、と思い再度、幼馴染を見ると――

―やっぱりいつもと違ってとても可愛く思えて、今にも理性が飛びそうになる。

守が美紗子のことを見つめているうちに、守の言葉を飲み込んだらしい美紗子が、ややすすきりしない顔をして首をかしげながら、エプロンの裾を手で持ち上げる。

「お、おい」

守が制止しようとするも、美紗子の手が止まる様子がない。目をそらそうと努力するが誘惑が付きまとい、そらすことができない。誘惑に比例するように恐怖もだんだんと大きくなっていく。

美紗子のエプロンが上げられていくにつれ、だんだんと美紗子の太ももが露わになっていき――

「服くらい着てるわよ、ほら」

「……」

エプロンを腰までめくり上げた美紗子の姿を見て、守は絶句した。エプロンの奥、そこには確かに『服』があったのだ。それは、うちに来たときに着ていたノースリーブと短パン。

つまり、美紗子は服を着ていなかったわけではなく、着ていた服とエプロンの大きさの関係で、エプロンからは、素肌のみしか見えなくなっていた、ということらしい。

そりゃそうだよな、この幼馴染が裸エプロンなんてありえなさ過ぎる。一瞬でも、こいつに発情していた自分が馬鹿馬鹿しい。よかった、あのときに飛びつかなくて。そんなことしていたら今頃どうなっていたことか。

守が独りで納得していると、美紗子も抱いていた疑問が消えたように、さっきとは違った感じで顔を赤くしていた。

「ま、まさかあんた……」

美紗子の声を聞いて、守はそちらを見る。

「あた、あたしが……、は、はだ……、してると思って」
すると、美紗子が無言をつぶやいている。

なんで、左手を思いっきり握っているのだろうか。あと、もう小

麦粉は必要ないぞ。

そうは言いながらも、この後の美紗子の行動は守には予想がついている。守は両手のひらを相手に向けて必死に振って、最後の抵抗を試みる。

「さて、美紗子。とりあえず、その小麦粉の袋を机に置いた後に、ゆっくり話し合わないか？」

守は、一歩ずつ、ゆっくりと、美紗子との距離を開けていく。

「誰が、あんたの為にそんなことするか、このド変態！！」

「げふっ！」

『いただきまーす』

全員で、手を合わせて挨拶をしてから、夕食を食べ始めた。涼子や美紗子がいるためか、美香も素直に挨拶をした。

「あんたにしては、上手く揚がってるじゃない」

「……」

挨拶の後、真っ先に唐揚げに手を伸ばした美紗子が、うれしい感想を聞かせてくれた。だが、守は黙り込んでいた。いくら自分の勘違いだったとはいえ、小麦粉を投げるのはひどいと思う。というか、美紗子によくあんな不安定なものを、顔面にヒットさせたよな。あのコントロールと速度があれば、野球部のエースぐらい簡単に取れるんじゃないだろうか。目指せ甲子園！

「あれ、おにーちゃんの服、さっきと違うよね？ 料理中に汚れちゃったの？」

「う、うん、まあね」

杏子の指摘どおり、守は先ほどとは別の服を着ている。理由は、小麦粉を頭から被ったから、というので間違いない。しかし守が不機嫌な原因はそれではなかった。体についた大抵の汚れは、シャワーを浴びて服を着替えれば何とかなるものだが、床についた汚れはそう簡単にはいかない。守に当たった小麦粉の袋は、守を小麦粉

まみれにした後、その残りで床を真っ白にしてみました。考えてみれば当たり前のことだが、改めて小麦粉の怖さを思い知らされることになった。

その後、守がシャワーを浴びて台所に戻ると、美紗子が既に掃除をしてくれていた。さすがにまずいと思ったのだろう。守もそれに加わって全部片付けた後、守が唐揚げ、美紗子がサラダと分担して作業することとなった。そのおかげで、ハプニングがありながらも予定通りの時間に夕食を始められた。それ自体は美紗子に感謝すべきことだとは思うが、遅れた原因の発端も同一人物だったので、感謝の気持ちは述べていない。

「そういや美紗子。何でうちに来たんだ？」

しばらく夕食を食べ進めるうちに、守は忘れていた質問を思い出したので聞いてみることにした。

「悪い？」

「いや、夕食の準備も手伝ってもらったし、来てくれたこと自体はありがたいんだが……」

この幼馴染には、時々このように話が通じないことがある。守はそれを分かっているし、対処法も分かっているのに、特に苦労することは無い。何故かは未だに分からないが。

「で、何でなんだ？」

「そ、それは……その………」

守が、自分の黒めの唐揚げに手を伸ばしながら再びたずねると、美紗子が顔を赤くして言いよどんでいた。

実際食べてみると、やっぱり苦い。唐揚げを焦がしたのは守なので、焦げた唐揚げは守が全て引き受けて、他の成功した唐揚げを女子に振り分けた。それゆえ、自分だけ6個で美紗子が4個、他が5個という不平等な分け方になってしまったのだが、まあ、問題ないだろう。美紗子がいまだに一個欲しいようならあげるつもりでいるし、言っていないことは本人も了承してるんだろう。でも、やっぱり他の上手く出来たやつも1個ぐらい食べたいよな。

「美紗子おねーちゃんは、おにーちゃんを助けるために来たんだよね？」

一向に次の言葉が続きそうのない美紗子に、杏子が笑顔で問いかける。

美紗子。こんなちっちゃな子に助けられてるようじゃだめだぞ。

って、年は1つしか変わらないのか。

「違うわよ。守が涼子先輩や杏子ちゃんに手を出さないかどうかの監視のためよ」

「おい、俺はそんなこと——」

——するわけないだろ、と続けようとしたところで、先ほどのことを思い出し言葉を飲み込んだ。

もちろん涼子たちに手を出すつもりはないが、ここで反論して先ほどの勘違いの内容をここで暴露されたらたまったもんじゃない。周りから——特に美香辺りから——どんな視線で見られるか分かったものじゃないし。

「守君なら大丈夫だと思うわよ」

守が1人で葛藤していると、涼子から救いの手が差し伸べられた。さすが涼ねえ、などと守が感心しているうちにも涼子は言葉を続ける。

「普段から美香ちゃんと一緒に暮らしてるんだし。それに、一緒の家で寝たら、あなたも同じ危険にさらされるの気づいてる？」

「そ、それは……」

淡々と話す涼子に、さすがの美紗子も腰が引け気味になっている。涼子とは隣家同士で付き合いも長いし、しっかり守の事を信用してくれているようだ。出来ればそのまま美紗子を倒してもらえるとありがたい。

「まあ、美紗子ちゃんとしては夜に襲われたらそれも本望か」

「先輩！」

守が涼子のことを応援していたのもつかの間、突然涼子は声のトーンを代え、冗談を言った。美紗子も、上手くそれに乗せられるよ

うに席を立ち上がった。

「本当はそうなんですよ？」

「あー、おねーちゃん大胆ー！」

「そういうことなら、2人の寝室だけ離れたところにしておきますので、安心して夜をすごしてください」

「……」

涼子の追い討ちや杏子の発言、さらには美香の参戦という予想外の事態が起こったせいか、美紗子は反論できないようだった。

対する守は、口を挟まずにこのやり取りを見ていた。

美紗子がうちに来た本当の理由は分からないが、これが理由でないことぐらいは、長年の付き合いからして分かっているからだ。この流れでいくと本当に離れた部屋で美紗子と相部屋にされかねないが、自分が手を出さなければ特に問題は無いわけだし。

そんな落ち着いた気持ちで、守は最後の唐揚げをかじる。

「そういえば、あたしの唐揚げ1個少なかったんだけど」

どうやら逃げ場なし、と判断したらしい美紗子に突然話を振られ、残った唐揚げを箸でつまんだまま応答する。

「俺の食べかけだけど、これでよければ食うか？」

箸でつまんでいた、食べかけの唐揚げを美紗子の皿の上においてやる。

昔から、というより今でも水筒を飲み回したりすることはあるの
で、美紗子なら気にしないだろうし、大丈夫だろう。

「食べかけなんて汚いもの、人に食べさせようとするんじゃないわ
よ」

しかし、守の予想に反して、美紗子からは断る返事が返ってきた。
「いらぬなら俺が食うけど、どうするんだ？」

「食べるわよ」

守がもう一度聞き返すと、予想道理の反応が返ってきた。

何で、この幼馴染は素直に返事が出来ないのだろうか。

守が、そんなことを思っているうちに、美紗子が唐揚げに箸を伸

ばす。

「美紗子おねーちゃん、おにーちゃんの食べかけがいやなら、杏子のと交換してあげるよ」

すると、そこで杏子がそんな提案をした。

「いいわよ杏子。美紗子ちゃんも。焦げてるのはあんまり体がよくないし。一番年上の私が食べるから、2人は上手く出来たやつを食べなさい」

「いいえ、大丈夫です！ 守の食べかけは、幼馴染としてあたしが処理しますから」

「大丈夫だよ、おねーちゃん。杏子はあと半分しかいないし」

「だめよ、まだ若いうちに体に悪いもの食べちゃ。だから、それは私が食べるわ」

涼子も加わり、守の食べかけの唐揚げの取り合いが始まった。

押しつけ合いなら分かるが、何で取り合いが始まるのだろうか。

そんな、焦げたやつ別に上手くもない、というより、むしろ不味いし。

《チーン》

守が、不思議な顔で3人のやり取りを見ていたところ、不意に電子レンジの音が聞こえてきたので、その方向を見る。すると、いつの間にか席を離れていた美香が、珍しく自分で何かをレンジから取り出していた。

電子レンジの音に見向きもせず、取り合いを続けている3人の下に美香がつくと、先ほどチンしたものを美紗子には2個、涼子と杏子には1個ずつ配り始める。

何かと思い、守が分けられたものを見ると、それは冷凍食品の唐揚げだった。

さすが美香、確かにこうすれば争いの種も無くなるだろう。

「全部で4個しか残ってなかったものでこれで我慢してください。そういうことでこれは、私が食べますので」

美香は、サラッとそんなことを言った後、皿の上に置きっぱなし

になっていた、焦げた半分の唐揚げを口に運んだ。

『美香ちゃん!』

何故か、美紗子、涼子、杏子の3人が美香のほうへ身を乗り出す。
って、あれ? 俺の分の追加の唐揚げは?

「どうするのよ、守!」

「どうするの、守君!」

「杏子だよ、お兄ちゃん!」

「……」

夕食後、守は決断を迫られていた。

事の発端は、入浴後だった。

夕食の片付けは、琴瀬姉妹がかって出してくれたので任せて、守は
自室に宿題を片付けに向かった。

その間に他は入浴を済ませていたようだったので、守は最後の湯
をもらうことにした。

普段とは違い、琴瀬姉妹が入った後だったので色々と妄想が膨ら
んだりしていたが、それは口外すると色々不味かったので、内心に
とどめておいた。言う相手がいない、というのもあるが。

その後、体を拭いて寝巻きを着てから、麦茶を飲みにもリビングへ
向かうと、女子たちが輪になって話をしていた。

中に入ってみると、議題は『誰と誰が同じ布団で寝るか』という
ものだった。

理由は簡単。

普通、普段使用している布団以外は使えるようにしておかない。

それは萩本家においても例外ではなかった。

琴瀬姉妹の分は朝から分かっていたので、学校から帰って来てか
ら、用意しておいたが、他の普段使っていない布団は、離れの倉庫
にしまっている。時間的に外も暗いので、今から取りに行くわけに

もいかず、美紗子の分の布団が足りないのである。普段は、美紗子用に一枚は、常にひけるようにしてあるのだが、面倒くさかったためそれを琴瀬姉妹用のうちの一枚にしてしまったため、やっぱり足りなかった。

それゆえ、出てきた問題が、誰と誰が同じ布団で寝るか、というものであった。

普通に考えて、1人だけ男子である守が会議に出る必要は無いのだが、守が1人でソファに寝る、などといった結論に達する可能性を否定できないので、眠い目をこすりながら参加していた。

守がボーっとしているうちにも、議論が行われている。

とりあえず意見を簡単に、まとめて見ることにする。

守が、夜に誰かの布団に潜り込見かねないので、見張りのために幼馴染である自分が一緒に寝る、というのが美紗子の案。

美紗子と同じ理由で、年上である自分が責任を持って面倒を見るために一緒に寝る、というのが涼子の案。

1人だと不安で眠れないので守と一緒に寝たい、というのが杏子の案、というより希望。

美香は、守以外の人もいるのに、珍しく意見を出していなかった。こうしてみると、自分の信用されて無さが哀れになって、実に泣けてくる。あと、杏子は普段はどうやって寝てるんだろうね。

議論が進んでいくうちに、女子だけでは決まらない、ということになり、最終決定は守に任せるということになった。

何で、普段は決定権が無いのに、こういういらなきだけ回ってくるんだろうか。人生とは実に不思議なものである。

その結果、

「どうするのよ、守！」

「どうするの、守君！」

「杏子だよ、おにーちゃん！」

「……」

と、4人から詰め寄られることとなった。

しかし、冷静に考えると、とても難しい判断だ。

とりあえず、杏子の希望は出来れば通してあげたい節があるが、世間体などを考えると却下。

美香は、2人で同じ布団なんていい想像が出来ない。いや、卑しい意味ではなくてね。

残る、涼子と美紗子だと、美紗子の方が心許せるし、性格的に少々難があるが一番無難そうである。そう考えると、美紗子を選ぶのが妥当な気がするが、やっぱり、異性と一緒に寝たいと言うのも気が引ける。言わされている身であっても。

『どうするの?』

そう、思考している間にも、再び回答を求められた。

やっぱり、美紗子しかないだろうか。でも、まだ美香だったら兄妹だし選んでも変な目で見られない気もするし。でも、美香と2人きりなのは……

『どうするの?』

「えっと、兄弟なんだしやっぱ……」

三度迫られて、自然に思考がもれてしまった。

それを聞いて、驚いたのか美香が目を大きく見開いた。

やっぱり、美香しかないのか。仲が悪くても兄弟なんだし……。

ん、兄弟?

おお、ベストな回答があったではないか。

守は、導き出した、一番妥当であるだろう回答を続ける。

「姉妹きょうだいなんだし、涼ねえと杏子が一緒に寝るのがいいと思うな」

周りを見ると、4人があっけにとられたような顔をしていた。

よし、OKだ。誰からも反論が来ない。

しばらくすると、それぞれが立ち上がって、

「もう、信じられない」

「守君、その答えはタブーよ」

「お兄ちゃんの分からず屋」

「……」

何故か、それぞれ文句を言い残し、散って行った。
あれ、何か間違ったこと言った？

「もう、あのバカは」

美紗子は、暗くなった個室の天井を見ながら声を漏らした。

部屋はいつも自分が泊まったときに、使わせてもらっているものだし、そもそも、寝る環境が変わってもあまり気にしないたちなので、場所の関係で眠れないわけではない。

しかし、あまり寝付く気にはなれなかったので、各自寝室に移った後、布団の上に座ったまましばらくそのままにしていた。

おそらく、眠る気になれないのは、守に対するイライラだ何となくだが分かっていた。

「何で、OKしちゃうのよ」

美紗子は、独り言を言いながら今日一日のことを思い出してみる。いつものように朝、守の家に行くと、突然、押し寄せたらしい涼子と杏子がいて、理由は何であれ、あの幼馴染は同居するのを許可してしまった。

その話を電話で聞いた直後、衝動的に自分も守の家へ向かっていった。理由は分からない。

食事中に杏子が行っていたとおり、守の、主に家事の、手伝いというのもある。しかし、守ならばおそらく、4人分の家事ぐらい簡単にこなすだろうし、わざわざ自分が手伝う必要もないはずだ。

すると、やはり守が琴瀬姉妹に手を出さないか心配だったのだろうか。いや、守のことなんてどうでもいい。琴瀬姉妹が、手を出されないかが心配だったのだ。

寝室分けのときの、守の返答を聞いたときに安心してた自分がいたし、きっとそうなんだろう。必死に、女子と寝ないための方法を探していたところからすると、やはり守は大丈夫そうだ。今考えると、幼馴染を信じきれていなかった自分が恥ずかしく思える。

それに……、あるとき、結果はあれがベストだと分かっているのに、がっかりしていた自分がいた。どうなって欲しかったのか、と自問してみるが、答えは見つからない。琴瀬姉妹や、美香を選んで欲しくなかったことからすると……、やはり……

「そんなことあるわけじゃない。それにあの時だって……」

あの時——、調理を手伝うために台所へ入ったとき。せっかく新しいエプロンを着てみたのに、それに気づいてくれなかった。

この前一緒に買い物へ行ったとき……

美紗子は服を選ぶとき、普段着は実用性を第一に、デザイン性を二の次に考えてしまっている。余所行きの服は、友達の目などもあるので、デザイン重視で選んでいるが。

しかし、エプロンを見ていたときに、

「たまには、こういうデザイン重視の可愛いやつも着てみたらどうだ？」

などと、言うものだから試しに買ってみた。

実際着てみると、普段は絶対にならないフリルとかがついていて、とても自分に似合っているとは思えなかった。しかし、勧めてくれた守なら、きっと似合っていると言ってくれると思って、相当恥ずかしかったが、何度も逃げそうになったが、勇気を振り絞って守の前に出たのに……

その結果が、

「裸エプロンだなんて……」

やはり、守は美紗子の着ている服なんて興味ないのだろうか。やっぱり、守としては美紗子が女の子らしい服を着ていても関係ないのだろうか。

「でも……」

裸エプロンと勘違いして赤くなってたということは、少なくとも自分を女として見てくれている、ということである。まあ、それは

自分にとっても嬉しいことである。

いや待て、何で嬉しいのだろうか。たしかに守は、優しくて気が利くし、外見だって悪くないし、話しやすい仲だし……

違う。守とは単なる幼馴染なだけで、決してそういう仲ではない。ましてや、自分が守の事を好きだなんて……

「もう。全部守が悪いのよ」

何が悪いのかは分からないのだが、美紗子は、そう結論付けて布団に倒れこんだ。

「で。どうだったよ、同居初日は？」

琴瀬姉妹と、美紗子との同居が決まった翌日、守はいつものように教室で、浩太と大樹、そして美紗子に囲まれていた。

「どうって何がだよ？」

相変わらずバカな質問をしてくる浩太に、守は机に肘をつきながら答える。

「だから、ラッキースケベとかあったのかって聞いているんだよ」

「あるわけないだろ。常識的に考えろ」

浩太の質問は、やっぱり頭の痛くなるようなものだった。

同居初日の正直な守の感想は、疲れた、の一言に尽きる。ラッキースケベなんて……調理中の美紗子の件を除けば皆無だ。

「ちえ、つまんねーの。で、正妻としては、この状況で自分も同棲をしなくていいのか？」

守が、机に突っ伏すと、浩太は美紗子の方に矛先を向けた。

今の発言で分かると思うが、もちろん美紗子の同居の件は誰にも伝えていない。まあ、伝えた時点で色々終わるので、当たり前だ。

「こいつとはただの幼馴染。それに、こいつの家で寝泊りするなんてそんな馬鹿げたことするわけじゃない」

「そうだぞ。純粋な美紗子さんがそんなことするわけないだろ」
やや慌てながら答える美紗子に、大樹が援護を入れる。

本人は否定しているが、呼び方から分かるように、大樹は美紗子に恋心を抱いているらしい。こんな女の何が良いんだろうか。まあ、顔だけはいいと思うが。大樹もイケメンでモテる方だし、美紗子と見た目としてはお似合いな気がするが。

ショートホームルーム
「SHRを始めるので席についてください」

教室のドアの開いた音と共に、守たちの担任である山田佳奈子やまだ かなこの声が響く。

佳奈子が教卓の前につくあたりには、散らばっていたクラスメイトも席についていた。

「今日はイギリスからの留学生を紹介します」

守が机に突っ伏していると、佳奈子がそんなことを言い出した。

イギリス、というと守の親が住んでいる国である。あとは、昔仲がよかった一条院奈緒いちじょういんなおが引っ越していった国でもある。

とはいえ、まさか奈緒が留学してくるわけもないので、自分には関係ないと思い、守は顔を上げずにいた。そうしているうちにも、「それじゃあ、入ってきてください」

佳奈子が声をかけると、再び教室のドアが開く音が響き、足音と共に教室に入ってくる。

「イギリスから来た、一条院尚いちじょういんなおだ。慣れないこともあるって迷惑をかけることも多いと思うが、よろしく頼む」

前の方から聞こえてくる、透き通った声に聞き覚えのある名前を聞き守は顔を上げた。

すると、そこには長く黒い髪をポニーテールでまとめた男子生徒が立っていた。顔は中性的な感じながらも、全体的に体のラインがスラっとしてて、とても爽やかでかっこいいイメージだ。名前からしても、日本人で間違いないだろう。

守は、自分の勘違いだと分かり再び顔を伏せようとしたところで、「一条院君は、萩本君の家に住むことになります。皆さん仲良くしてあげてください」

「先生、今なんて？」

聞き捨てならない言葉を聞いた気がしたので、守は佳奈子に聞き返した。

「皆さん仲良くしてあげてください、と」

「いえ、その前です」

不思議そうに答える佳奈子に、守は落ち着いて突っ込みを入れる。だが、そんなところを聞き返すと思うのだろうか。

「萩本君の家にお世話になることになってると思うんですが、聞いていませんか？」

佳奈子は、本日2度目となる爆弾発言を、平然と口にした。

3章　ほら、マー君。そのまま唇を奪っちゃえ！

『悪い悪い、伝えてなかったっけな』

右手に持っている携帯電話からは、久しぶりに聞く父親の声が聞こえていた。

声の調子はイライラしている守とは正反対で、ぜんぜん反省しているように聞こえない。

「あのな、家族が1人増えるだけで――」

――どれだけ大変だと思ってるんだ、と続けそうになったが、言葉を読み込んだ。視界の隅に、尚の姿が入ったからだ。

気分的には父親を怒鳴りつけて少しでも鬱憤^{うっぷん}を晴らしたかったが、尚とは今後同じ家で生活することになるし、本人は何も知らずに来たわけだから、変に気を使わせてお互いやりにくくなるのは出来るだけ避けたいので、ここは小声にとどめておく。

『涼子ちゃんや杏子ちゃん、それに美紗子ちゃんもいるんだから、1人くらい増えたって変わらないだろ』

しかし、相手はというと、こちらの心情は察そうともしないようで、相変わらず気を逆なでするような返答が返ってきた。

とはいえ父親の言っていることも事実だし、これ以上反論しては自分が抑えられなくなりそうだ。携帯が壊れそうなほど持っている右手に力を込めて黙っていると、さらに続きが来た。

『あと、仕送りも増やしてやるし。ついでに、進級したのに小遣いアップしてやってなかったからな、来月から小遣いも増えるぞ！』

「はあ」

あまりにも当たり前なことを交渉材料に使ってくる父親に、抵抗する気力すらなくなり、適当に返事をしておく。あと、小遣いの件はこれとは無関係だからな。

『そういうことだから、うまくやれよ。じゃあな』

「ああ」

明らかに、こちらの苦勞を分かっていない父親への怒りを込めて通話を切るボタンを押すと、携帯をポケットにしまい、後ろへと向く。すると、電話が終わるのを待っていていた浩太と大樹が立っていたので、電話の内容を要約して伝えた。

その後、「えっと、職員室でもう一度確かめてみますね」と言い残し、佳奈子が職員室へと行ってしまったので、そのままS H Rがショートホームルーム終了となった。

そうになると、当たり前のようにクラス中から、話しかけてみるよ的な視線が守に対して向けられたので、耐え切れなくなり親に即電話。それが、今終わったところだ。

今日の1時限目が体育であるため、女子は既に更衣室へと向かったらしく、教室内には男子しかない。しかし、授業開始まではあと10分ほどあるので殆どの男子は着替えをせず話などをしている。尚の方を見ると、1人で机に座ったままだった。好奇心なのか、純粋な優しさなのかは分からないが、クラスメイトからは相変わらず話しかけてみるオーラが守に向けられていたので、守は、やるしかないか、と心に決め尚の方へ向かう途中、

「なあ、イギリスって何語だっけ？」

一緒について着てくれている、浩太と大樹に必要なことを確認する。

冷静なときに考えれば直ぐ答えの出そうなことだったが、緊張もあってか答えが思い浮かばなかった。親の暮らしている国の言葉ぐらい……と思うかもしれないが、守が旅行に行ったときは通訳をつけるし、親との会話はもちろん日本語なので、しかたがないと思う。

「イギリス語じゃね？」

横を歩いている浩太から、答えが返ってきた。

こいつ、勉強は出来ないのによくこんなことは知ってるな、と感心して浩太の方を見ると、守と同じく緊張しているのか、まっすぐ歩いているだけなのに蛇行していた。

「イギリス語って、挨拶なんていうんだっけ？」

「……何だっけ？」

イギリス語なんて知らないし挨拶できても会話が続かないかな、などとながら浩太に聞き返すと、大樹の方に視線を向けやがった。

「馬鹿、イギリスは英語だ」

大樹が、呆れてものが言えない、という顔でため息をつきながら突っ込んでくれた。

そういわれるとそうだ。英語の『英』って、英国の『英』だし。

いくら緊張していたとはいえ、浩太なんか聞いた自分が馬鹿だったと、激しく反省する。あと、そこで腹を抱えているヤツ（クラスメイトほぼ全員）、だったら自分が話しかけてみる。

「で、英語の挨拶って何だっけ？」

さらに疑問点が浮かび上がったので今度は、しっかりと大樹のほうを見て質問する。さすがに、同じ失敗を2度はしない。

「Helloでいいだろ、普通に」

「馬鹿かお前は、今のはさすがにオレでも分かったぞ」

うん、さすがに聞いた瞬間に、いかに馬鹿な質問をしているか分かった。こんなこと、今時小学生でも知ってるぞ。それにしても、浩太まで知っていたとは驚きだ。

守が、恥ずかしさで顔が赤くなっていなにか心配しながらそっと周りを見ると、耐え切れなくなって声を上げて笑い出すヤツまで出てきた。しかし、本当にこの緊張を体験してみればいいと思う。そうすれば、きっと笑えないから。

守は、腹を抱えて呼吸困難になりかけているクラスメイトに怒りを覚えつつも、尚の前に着いたので、2・3回深呼吸してから、覚悟を決めて口を開いた。

「はっ、ハロー、ミスターナオ・イチジョウイン。ナイストミートユウ」

「日本語で大丈夫だ。というか、普通に日本語で自己紹介したんだろう。あと、Mr.^{ミスター}のあとに、フルネームは変だ。苗字だけにするか、Mr.をとるかどちらかにしろ」

守がつたない英語で必死に話しかけたものつかの間、尚は哀れみを含めた視線で守を見ると同時に、よく聞きなれた言語で話しかけられた。しかも、英語に対する訂正つきで。

しばらくしてから、ようやく何の言語かを理解した守は改めて口を開いた。

「一条院君、始めまして。萩本守だ」

先ほどの驚きから一気に緊張がほぐれたようで、普通に話しかけられたことに満足していると、尚の方も背筋を伸ばして改まった様子で話し始めた。

「萩本君、上手く話を通じていなかったみたいで、突然押しかける形になって悪かった。あと、僕のことは『尚』と下の名前で呼んでくれないか？」

尚は、何故か最後の方で顔を伏せがちに少し顔を赤らめていた。

そんなに日本人と話せたことが嬉しいのだろうか。まあ、ただ緊張していただけかもしれないが。

こうやって見ると、同姓である自分から見てもやっぱり尚はかっこいい。しかし男子としてはやや高めな声や中性的な顔のせいもあってか、貴公子という言葉が一番当てはまる気がする。大樹とは間逆のイメージだからどちらが格好いいかは比べられないが、女装とかがしたら似合いそうな気がする。本人には絶対いえないけど。

「分かったよ、尚。それじゃあ、俺のことも『守』でいい」

守が、失礼な想像をしてしまったことをばれないようにやや早口で返すと、浩太と大樹もそれに続く形で自己紹介を始めた。

「オレは、鈴木浩太。守の命の恩人ってヤツだ。よろしくな」

「俺は、山口大樹。一応、学級委員をやってるから困ったことがあるれば何なりと言ってくれ」

「ありがとう、守、浩太、それに大樹」

尚が、それぞれの名前を確認するように、1人ひとり指差しながらゆっくりと名前を呼んでいく。

あと浩太、お前に命を救われた覚えは無い。

守はその様子を、律儀なヤツだな、などと思いながら見ていると通常のSHR終了の時間、つまり1時限目の5分前を知らせるチャームが鳴った。

「次、体育だからとっとと着替えちゃえよ」

「ありがとう、そうする」

尚も頷いてくれたので、守たちはそれぞれ自分の机へと向かい着替えを始める。

着替え終わったので服をたたみ、尚の方を見ると……机の上に体操着を広げそれを見つめたまま何もせずとその場に立っていた。よく見ると、顔が青くなってきたている気がする。

「尚、大丈夫か」

「……」

守は、心配して駆け寄ったのだが、相当調子が悪いのか、守に気づいた様子もない。

「おい、尚」

「!？」

肩に手を乗せるとようやく気づいたようで、一瞬体を震わせた後、こちらへ顔を向ける。

「なんだ、守か」

守が着たことで落ち着いたのか、さっきよりも若干顔色がよくなった気がするが、やはり調子が悪そうなのには変わらない。

「どうした、調子悪いのか？ それ」

「きゃっ——いきなり何するんだ」

守がおでこを尚のおでこにつけると、尚はびっくりしたのか取り乱した様子で守と距離を置いた。

守はそれを、こいつもこんな表情するんだな、などと思いながら見ていた。それに驚いたせいかわ目が大きくくいているのがとても可愛い。声の上擦って女子みたいな声になったし。

からかうときとかに使えそうだな、とは思いますが男子同士とはいえ、人によっては本気で嫌がるのでやめた方がいいだろう。

「どうする？熱は無いみたいだが、保健室行くか？」

先ほどの様子を見ると、そんなに重病ではなさそうだが、体育は見学の方が良さそう。緊張もあるだろうし、下手にこじらせても大変だし。

縦に首を振るだろうと思い尚を見ると、

「いや、これくらいで体育を見学するわけにはいかない」

尚の反応は、守の予想とは違うものだった。

「分かった、それじゃあ早く着替えろよ」

まだ相手のこともよく知らないし、こちらが思ってるほどはないかも知れないので、守は本人の意見を尊重することに決め、尚に着替えを促す。

すると、尚は数秒のあいだ体操着とにらめっこした後、

「やっぱ、保健室で休むことにする」

何故か考えを変えたようでそんなことを言い出した。

その意見には、こちらとしても反対は無いので、守は尚を保健室まで連れて行った後、体育の授業へと向かった。

同世代の女子との同居生活となると、自分が何もする気がなくてもやはり問題が発生するのは世の常だ。

その1つが起ったのは、尚との同居が決まった日の夕方だった。夕食の片付けを終えた後、守は事前に取り込んであった洗濯物をたたんでいた。

普段は15分ほど終わる仕事も、5人分となると、やはりかかる時間も多くなる。量的には、2.5倍しかないはずなのに、それ以上に増えている気がするから世の中って不思議なものである。

そんなことを考えながら作業していた守だったが、改めて目の前をみると沢山あった洗濯物も半分ぐらいは片付いていた。

残り半分も頑張るぞ、と気合を入れなおし、たたみ終わった美紗子のTシャツを美紗子の服の山に置く。昨日、このノースリーブの

Tシャツのせいでひどい目にあっただが、思い出してもいやな気持ちか、あのときの美紗子の姿しか思い出されないものでやめておく。さっさと終わらせてしまおうと、洗濯物に手を伸ばす。

リビングにある大型テレビには、若手のお笑い芸人がコントをやっている姿が移っていた。

そして、それが終わったところで、自分が今持っている衣服へと視線を戻し……

「……」

守は、自分が今もっているものに対する驚きで息を呑んだ。

そこにあっただのは、三角の形をした白い布に小さな赤いリボンのついたものだった。持っている手からは、普通の布と変わらないはずなのに、妙に心地よい手触りが伝わってきて、あるはずのない温もりも感じられてくる。

はたから見れば、女子用の下着を顔の前に広げてそれを眺めている変態にしか見えないのは分かっているが、驚きと興奮のせいか体が動かなかった。全く——全く！——やましいことは考えてないし、早くたまたまうとは思うのだが、なかなか出来ない。決して自分が変なのではなく、思春期の男子ならきつと同じ状況に陥ると思う。というか、そうならない人がいたら見てみたい。

なんでこんな布切れがこんなにも男性本能を動かすのかは不思議だが、それを考えていると本気で理性が吹っ飛びそうなので、心を無にし体を動かそうとしていると——

「っ」

何かが後頭部に当たる感覚がした。痛みのあまり、ぶたれた所を手で押さえ横を見ると、

「なに堂々と下着なんて眺めてるのよ、このド変態」

お茶を飲み在台所へ言っていた美紗子が、隣に腰を下ろすところだった。

「それは……」

守が答えられずにうろたえている間にも、美紗子は先ほどまで守

が持っていたモノをたたんでいた。

仕方がないと思う。自分では他意はなくても、実際アレを眺めていたわけだし。それに、男の本能なんてものを美紗子に説明するなんて無理だろうし。

守が必死に自分に言い訳しているうちにも、美紗子はたたみ終えたものをたたみ終えた山の上に置き、次に取り掛かっている。このまま何もしないわけにもいかなないので、余計なことは考えないようにしながら自分も作業に戻ろうとしたとき、

「僕も手伝わせてもらって構わないか？」

突然目の前を、きれいな手が横切ったので、その方向を見ると、美紗子とは反対側に尚が座っていた。

「ああ。でも、別にやらなくてもいいぞ」

「いや、居候させてもらう身なんだか、せめてこれくらいはやらせてくれ」

「それじゃあ、たのむ」

このやり取りの間にも、尚は既に一枚をたたみ終えていた。

やっぱり、尚は礼儀正しいというか、義理堅いというか。こちらからも大したことはしてあげられないのに、しっかりお礼をしたいというのが尚らしいと思う。

こっちもそれに答えてあげるようなことをしてあげないとな、等と思っていると、再び尚が口を開いた。

「夜でよければ勉強も見てもやろうか？」

「……いいよ、そこまでは」

今ばかりは、こちらの目をしっかり見てくる尚の視線に絶えられなくなり、視線をそらした。

もうばれている美紗子が相手ならともかく、他の人に見せられるほど勉強ができるわけではない。さすがに浩太のように赤点まではいかないものの、激しくそれに近い。

すぐにでも飛びつきたくなるような提案だったが、そんな理由もあり顔を伏せて黙り込んでいると、

「あの英語の話し方じゃ、他も赤点すれすれというところだろう。大丈夫なのか？」

「……はい、お願いします」

さすがに折れた。というか、あの短いやり取りでそこまでの事が分かるのだろうか。考えてみると、話しかける前に馬鹿なトークしてたし、アレを聞かれてたなら分からなくもないか。

「……あたしには頼まなかったくせに……」

ふと隣を見ると、美紗子がそんなことをつぶやいていた。見てくれる気があるならさっさと行ってほしかった。いつも馬鹿にするだけなので、てっきり見てくれる気は無いと思っていたのだが。でも、もう尚にお願いした訳だし2人いる意味は無いし後の祭りだ。

「——おっ」

守は、最後に残った洗濯物に手を伸ばそうとして——引っ込めた。最後に残っていたのは、三角の形をした女性の下着だった。先ほどとは違って、白と青のストライプという柄からして、美紗子のものだよな……。しかし、何で二次元にしか存在し得ないと思われるものを穿^はいているんだろうか。でも、それを喜ぶのって、浩太ぐらいだろうし。まさか、美紗子が浩太を狙っている訳でもないだろうし。やっぱり、不思議である。なぜ、自分が美紗子の下着の柄を知っている理由は、何度か泊まりに来ているからで、別に覗いていたりする訳ではない。

さすがに、同じ失敗を2度はしない。とっとたたため、というメッセージをこめて、美紗子のほうを見たとき、思わぬ方向から伸びてきた手がそれを持っていた。

「あ、一条院君。それあたしの……」

「それがどうかしたか？」

尚が持つていこうとしたそれを取ろうと、美紗子が手を伸ばしたが、尚がそのまま自分のところに持つていった。

尚は、そのまま何も気にすることなく、普通にたたみ終えたあと、軽く伸びをして自室のほうへ行く。

何で、そんな平然とそんな破壊力をもったモノを平然とたためるのだろうか。しかも、持ち主を前にして。

いや、でもあの様子からすると、単に自分が意識しすぎていたのかもしれない。所詮、布なわけだし。今考えると、女子の前で下着を手にして黙るってどんだけだよ。改めて考えると、すごく恥ずかしい。これから、何度も起こりうる可能性のあることなわけだし、次は気をつけよう、と守は心に決めた。

一応、確認のために美紗子を見ると、下を向きながら何かを呟いていた。

「ありがとな、美紗子」

「……いいもん……」

一応、礼を言ったが、明らかに通じていないだろう変事が返ってきたので、守は気にせずその場を離れた。

「あ、一条院君。それあたしの……」

美紗子が残った洗濯物をみると、自分の下着を尚が持っていたところだった。

一般的な女子として、自分が身に着けているもの、とくに下着を異性にたたまれるのは抵抗がある。守のように、なれた相手でもそうなのだから、今日が初対面の男子となればなおさらである。

それゆえ自分でたたもうと手を伸ばしたのだが、先に尚に持たれてしまった。

「それがどうしたか？」

尚は、そんな美紗子の心情を察していないようで、ただ純粋にそんな質問をしてきた。

その間にも、尚の手で自分の下着が何の躊躇ちゅうちゅうちょもなくたたまれていく。

「……」

その様子を見ている美紗子は、正直、複雑な思いだった。

もちろん、先ほどの守のようにじろじろと眺められて嬉しいわけがない。先ほどは杏子のものであったから良かったものの、自分のものだったら本気で蹴りかかっていたかもしれない。というか、絶対やっていた。

しかし、今のように平然とたたまれる方がいいのか、といわれるとそうでもない。自分の前で自分のものとすればなおさらだ。

守の様子を見ている限り、男子には好きな女子や、きれいな女子の下着を見たいというのは自然と起こる感情らしい。

しかも、先ほど尚がたたんだのは、しまぼんだ。小学校のとき、浩太が「しまぼんを見て、喜ばない男子はいるわけがない！」と言っていて、守もそれに同意していたので試しに買ってみた。もちろん履き心地は他のものと変わらなかったが、個人的にデザインも気に入ったので、それ以来はき続けている。

しかし、尚はそれを平然とたたんでいた。それは、つまり尚が自分を女性として意識していないことを意味している。たしかに尚はカッコいいと思うが、別に尚が好きなのではないし、とりわけ好みというわけでもない。そうであっても、自分が女性として見られていないのはショックだ。

去年も何人かの男子に告白されたし、髪型なども可愛く見せるように努力はしている。服装も、実用性を重視しているとはいえ、デザインを捨てているわけではない。なのに、尚からは女性として見られていなかった。

さらに、それを幼馴染である守の前でやられたのが、気に入らなかった。守のことも、話しやすいだけで好きなわけではない。しかし、何か付け入る隙を見せるとそこをついてくるので、出来るだけ守るに弱みを見せたくない。

「ありがとな、美紗子」

守の方を見ると、幸運にもそのことには気づいていないようだなにかこちらに話しかけているようだ。

「……いいもん……」

尚に女性として見られてなくても。少なくとも、守は手に取ることをためらったようだし、きっと尚が女性に興味がないのだろう。

美紗子が悩んでいる間にも、守はどこかへ行ってしまった。

美紗子がショックから立ち直ったのはそれからしばらく時間がたつてからだった。

「ふう、あったあった」

夕食後、守はベッドの頭側においてある本棚から、ほこりの被ったものを取り出していた。

近くにあったティッシュ箱から、ティッシュを1枚とり、ほこりをふき取る。すると、昔とあまり変わらない姿のそれがあらわれた。守が、懐かしい思いでそれを見ていると、部屋のドアがノックされる。

「守、入っていいか？」

続いて、声が聞こえてくる。時計を見ると、午後7時になったところだった。

時間的に考えて、尚が昼間の約束どおり、勉強を見に来てくれたんだろう。

「ああ」

ドアのぶに手をかけてドアを開けると、予想どおり部屋着姿の尚が立っていた。

しかし、何で自分と着ている服のレベルは変わらないのに、尚が着るとこんなに格好よく見えるんだろうか。明らかに不公平だと思う。今さら言っても仕方がないが、出来ることなら自分もこんな綺麗な顔で生まれてきたかった。

「それじゃあ、始め……何だ、あれは」

中に入るなり、勉強机に向かおうとした尚だが、ベッドに置いてあったものに興味を示したようで、ベッド方へ行き、それを手に取った。

「おお、アルバムか。もしよかったら、見てみてもいいか？」

「ああ。こっちに座れよ」

もともと尚に見せる予定で出したものだったので、自分もベッドへと行き、腰を下ろしたあと、尚を隣に座るように促す。

「それじゃあ、失礼する」

硬い挨拶をした尚がベットに座ったので、アルバムを受け取り表紙をめくる。

1ページ目には小学3年生のときのクラス写真がはってあった。

「これが、小3のときの守か？」

「まあな」

尚が指差した先を見ると、まだ幼いころの守の姿があった。

見せるために出したのは自分だが、実際に見せてみると何となく恥ずかしいところがある。

「お、こっちが早見か？」

「ああ」

今度は、美紗子を指差しながら訊ねてきた。

実は、美紗子とは幼稚園の年少の時から高校2年生である今まで毎年同じクラスという偉業を達成している。なので、どの年のアルバムを見ても必ずクラス写真には美紗子が写っている。

改めてみると、小3のときの美紗子も十分可愛かった。

たいていの女子は、どこかにピークがあり、それ以外のときは割と目立たなかったりするものだと思う。しかし、美紗子はその時々にあった可愛さというか、一切背伸びをしないルックスで、昔からよく可愛いといわれていた。

「次に行ってもいいか？」

「……っ、おう」

少し昔のことを思い出していると、尚が声をかけてきた。守が返事をする、尚がページを進めていく。

「それにしても、早見とのツーショットばかりだな」

「そうか？」

一応言葉を濁しながら返答してみたが、尚の言うとおり、貼つてある写真の半分以上が美紗子とのツーショットであった。他の子と遊んでいなかったわけではないが、家族ぐるみでどこかへ出かけるときは、たいてい美紗子の家と一緒にだったのが一番の原因……だと思ふ。

まあ、小学3年の時のやつなので、一緒に風呂に入っていたり、着替えしてる写真がないだけまだマシな方だと思いたい。あと、1年前のやつだったら多分アウトだった。

「ちょっと待ってくれ」

何ページかめくつていくうち、目的の写真を見つけたので、尚にストップをかける。

「どうしたんだ？」

「この写真なんだが……」

守は、1枚の写真を指差した。その写真は、夏祭りに行ったときのもので、浴衣やじんべえ姿の3人の子供が写っていた。

それは、守と美紗子、あとウェーブのかかった長髪の顔立ちのハッキリした少女だ。

「これは……」

その写真を見たたん、何故か尚が顔を赤くして口を押さえた。

しかし、何を見たと言うのだろうか。綿菓子やヨーヨーなどを持つてあどけない笑顔で話しているのを写しただけの写真なのに。これが、二股をかけていた彼女同士が鉢合わせしてしまったシーンなどなら、今の反応も分からなくはないが、そういうわけではない。それに、どう見てもそうは見えないともう。

「……ゴホン。で、これがどうしたんだ？」

わざとらしくせきをした尚が、平常時に戻ってから、こちらを向いて訊ねてきた。

「この女の子、見たことないか？」

それに答えるように、美紗子でない方の少女を指差しながら訊ねる。

さすがに、9年も前の写真じゃ分からないかな、と思いながら尚を見ると、記憶を探っていたのか、しばらくしてから口を開いた。

「すまない、見たことないと思う。しかし、どうしてその子？」

「この子の名前、お前と一緒にいちじゅういんのお一条院奈緒っていうんだ。漢字は違うけど」

それ以外にも理由はあった。奈緒は、小学4年の途中で転校してしまったのだが、その転校先はイギリス、しかもロンドンだ。守たちの両親と同じ場所であり、尚の実家がある場所でもある。一条院家といえど、今や世界の誰もが知っている企業だし、その令嬢となれば知っているかな、とも思ったが無理だったらしい。ロンドンといっても広いだろうし。実際この新目市にじめに住んでいる人を全員知っているか、と訊かれたら答えは間違いなくNOだ。

もし知っていたら奈緒の様子とかを聞きたかったが、かなわぬ願いだだったので、とっととしまっててしまおうとしたところ――

「その子は、どういう子だったんだ？」

意外なことに尚が食いついてきた。

名前が同じ、というところに興味を持ったのか、尚が奈緒のような綺麗と言われるタイプが好みなのかは分からないが、尚がイギリスに戻ったときに知り合ったりして、どんな感じになったかを知らせてくれたりしたら良いな、と想像を膨らませながら説明を始める。

「改めて説明しようとするの難しいが……、写真を見れば分かると思うが美紗子とはまた違った感じで綺麗で男子からモテてたかな」

「そうだったのか。それで性格とかはどうだったんだ？」

尚が、微笑みながら続きを求めてくる。

もともと、中性的な顔立ちと言うことがあって、こうやって笑っている尚は格好いいというよりも、可愛い印象の方が強くなる。やっぱり1度は女装させるべきだと思う。本人には、絶対言えないが。「性格は……、凄い元気で活発だったな。あと、勇気もあって暗いところとかに入るときも引っ張ってもらって助かったな」

「それから？」

「あとは、家柄もあってか、リーダーシップもあったな。クラスのみんなも文句を言わずに着いて来てたし」

あのころは美紗子の次に仲のよかった相手と言うこともあってか他にも色々なこと思い浮かんだ。

「よし、それじゃあ勉強始めるか」

しかし、それを1つ1つ話していくとどれだけ時間がかかるかわからないので、話を変えるためにアルバムを閉じて立ち上がる。「そうだな」

尚も、守に続いてベットから立ち上がると伸びをしていた。それを終えたあと、こちらに手を伸ばしてきた。

「それは、僕が片付けておこう。その間に、勉強の準備をしてくれ」

「それじゃあ、頼んだ」

嬉しい提案だったので、尚にアルバムを渡してしまう場所を教える。すると、早速尚がベットの上に立ち、アルバムをしまおうとする。

その後、勉強机のほうへ向く。

しかし、後ろから変な物音がしたので再びベッドの方を向いた。すると、尚がしまうのを失敗したのか、本棚にあった本がこぼれてくるところだった。

守は瞬時に状況判断を終えると、ほぼ本能的に尚を守るように尚の上にかぶさった。

しばらく、背中に硬いものが当たり続ける感触がしたあと、落ちて着いたようなので目を開ける。

すると、目の前に顔を赤くした尚の顔があった。

「まて、物事には順序と言うものがあってだな……」

「いや、何を言って……!?!?」

状況を整理してみると非常にまずい状況だった。

いくら尚をかばうためだったとはいえ、尚を強引にベットに押し倒す形になってしまった。しかも、お互いの顔は息が触れ合うくら

いの近さにある。

相手が男子だからまだいいが、女子が相手だったらいろんな意味でアウトだ。

そんなことを考えながら尚を見ると、顔を赤くしながら慌てている様子がとても可愛い。相手は男子なのは分かっているが、こんな可愛い相手ならこのまま強引に――、っていうのも無しではないような……って、確実にマズいだろう。

「ほら、マー君。そのまま唇を奪っちゃえ！」

（あー、ついに幻聴まで聞こえてきたよ。だから、このままやっ
ていいわけ――って……え？）

守が違和感に気づき、声のした窓を見る。

「さっちゃん!？」

そこには予想どおり、髪をベリーショートに切った女子が非常に興奮した様子で座っていた。

4章 くまさかあんた、そんなことを思いながらあたし達のアイスを食べてたわは

『それではよろしくお願いしますね』

「わかりました」

守は、妙にハイテンションな看護婦の返事に半ばため息をつきながら受話器を置いた。

そのまま振り返り、みんなが集まっているリビングへと向かった。突然尋ねてきた、というより、半ば不法侵入してきた少女である早知さちのことについて話し合うため、早知を含めた同居者全員がリビングに集まっていた。

その様子はどういうと、どこの葬式かというほど静まり返っていた。尚はともかくとして、美紗子や美香には一切理由を話していないためだ。といっても、自分も状況がわからなかったもので、どこをどう話しているのか分からなかった。

電話中に、尚の声がリビングから聞こえてきたので、多少の事は話してくれていたのかもしれないが……。

しかし、なんだろう。この妙に冷たい視線×2は。

さて、どこから話そうか、などと考えながら腰を下ろすと、冷たい視線を向けてくる一人である美紗子がゆっくりと口を開いた。

「まさか、いきなり発情して男子に襲い掛かるなんて見損なったわ」
「……」

美紗子に続き、美香が無言でさらに冷たさが増した視線を送ってくる。

「ちょっと待て。おい尚、どういうふうにした？」

明らかに、情報の誤差が生じているようなので、おそらく原因であるだろう尚に視線を向ける。

「僕は、あったことをありのままに話したただけだが」

「……あとね、さっちゃんも見たことを加えてあげたんだよ。……ダメだったかな？」

尚に聞いただけなのに、早知からも言葉が返ってきた。

可愛く言ってもだめだからな、と突っ込みたいが、これが早知の普段の状態なので突っ込めない。これでいて、スイッチが入ったときはああなるのだから怖いものだ。

とりあえず、原因は早知のようだ……多分。尚に原因が無いとも言切れないのが怖い。

「俺は尚を落ちてくる本から庇っただけだ」

「男なんだから、言い訳なんかしない。もう、今すぐ幼馴染を挽回したいわ」

既に、美紗子の信頼を失っているようで、全く信用されていなかった。

ちなみに、そこで使うのは挽回じゃなくて、返上だからな。どう頑張っても、幼馴染を返上するのは無理だし。

「美紗子ちゃんは後で夜這いでもすればいいでしょ。で、電話の結果はどうだったの？」

「そんなことしませんから」

相変わらず一言余計な事を加える涼子に、美紗子がわざわざ反応する。

一瞬、美紗子が夜這いしてくる姿を不覚にも想像しようとしてしまったが……うん、どうやっても浮かばない。それどころか、ムリに想像すると、一方的に虐待されてる姿しか思い浮かばなかった。

嫌な想像をわざわざ続ける必要も無いので、想像を振り切ってから電話での内容の説明を始める。

「ええと……結局、同居する事になった」

「なんで、あんたはこうも易々と。それに、この子誰よ？」

「本気で言ってるのか？」

「そうだよね……さっちゃんのことなんて覚えてないよね……」

一応は訊いてみたが、美紗子の様子からすると本当に覚えていないらしい。早知が萩本家にいるときに美紗子が鉢合わせたことはないから、単純に考えて9年以上会っていないってことだし、仕方が

無いのかもしれない。しかし、時がたつのは早いな、あの時はあんなに意気統合してたのに。

「僕は覚えているぞ」

「そりゃあな、初めて会ったのが数分前だし」

「……まあな」

尚が口を挟んできたので、無意識に突っ込んでいた。突っ込まれた尚を見ると、一瞬啞然とした顔になり、その後いつもの状態に戻った。

それにしても、尚がこんな間の抜けた発言をするのは以外だ。……って、もしかすると早知を元氣付けようとしていたのかもだ。尚、すまない。

「お兄ちゃん、早知さんと美紗子お姉ちゃんはどこで会ったの」

「……ああ、病院だけど。美紗子、そこまで言われても思い出せないか？」

心の中で必死に尚に向けて謝罪していたところ、杏子の声で現実引き戻された。

「ええと……って、もしかしてさっちゃん!？」

「そうだよ。もう、みっちゃん。忘れるなんてひどいよ……」

「ごめんごめん」

美紗子はやうやく思い出したらしい。

もしかしても何も、さっきから自分が何度もさっちゃん、って呼んでたと思うのだが。しかし、美紗子が思い出したとたん、2人は打ち解けられたようで早速近況報告などをしていた。

「で、おにーちゃん。何で病院で？」

「ええと……」

状況についていけない杏子が再び訊ねてきたので、あまりハッキリとしない記憶を手繰り寄せながら答える。すると、同じく状況が分からない涼子も聞き入っていた。

守と早知、そして美紗子が出会ったのは、小学1年生の初冬だった。守が木登り中に誤って落下したときに足を骨折、そして入院と

なったときに同室になったのが早知だ。同室にいた同年代の子供が早知しかいなかったこともあり、すぐに打ち解けた。また、度々見舞いに来た美紗子もそこに加わるようになったというわけだ。

守が退院するときに、手紙を書きたい、と言われたので住所を教えた。それを頼りにしたのか、それ以降何度か病院を抜け出しては萩本家に遊びに来ている。早知が入院している理由が心臓の病気（^{うち}）とはいっても、死にいたるものではないようだ）らしく、どこか遠くに行かれるよりは、と病院側もそれを見てみぬふりをしている。そのたびに病院と電話をしているので、早知の担当の看護師さんとはすっかり仲良くなってしまった。

遊びに来ている、といっても、夜は薬の投与が必要とかで、今までは来ても昼だったのだが……。

「そうだったんだ」

「で、今日はこんな時間に抜け出して大丈夫なの？」

「それは――」

一通り話し終わつたると、うなずいている杏子とは違い、やはり涼子からは予想される質問が返ってきたので、守が答えようとしたところ――

「待ちなさいよ」

早知と話をしていた美紗子が、何か気になるところがあったのか、話に入ってきた。

「それって、大人のいない家に同年代の異性を上げてたってことよね」

「ああ、そうだけど。それがどうかしたか？」

「私達もよく遊ばせてもらってたし、それは別に普通のことじゃない？」

特に悪いようにも思えないのでそのまま聞き返したが、涼子も同意見らしいし、自分の感覚が変だったわけでははないらしい。

というよりも、それが問題だったら一番まずいのは美紗子だからな。うちに上がってる回数ダントツトップだろうし、この前まで泊

まった事があったのは美紗子だけだし。

美紗子の言いたいことがわからず、涼子と顔を見合わせていると、何かに思い至ったらしく涼子が美紗子に向き直った。

「もしかして、自分だけ特別扱いされてると思ってたんでしょ」

「ち、違いますよ」

凶星だったらしく、美紗子は顔を赤くしながら必死に否定していた。

「守、それで大丈夫なのか」

「ああ。病状がこのごろ良い方向に向かっているらしくて、萩本家で自宅療養だって」

自分でも、いつてることが変なのは分かっている。だが、これ以上詮索されると、余計な話を出さなければなくなるので、できるだけサラッと流した、つもりだったのだが……

「普通、自宅療養って文字通り、自宅でするもんじゃないの？」

違和感を感じたらしい美紗子に突っ込まれた。やっぱ無理だよな、今のをスルーしろって。周りを見ると、尚や涼子もうなずいてるし。

話しても良いか？ という意味合いをこめて早知の方を見ると、

本人は意図が分からなかったようで不思議そうに首をかしげていた。

まあ、早知の性格からしてあまり引け目には思わないだろうし、と考え詳しい理由を話す。

早知の家は、早知が入院している新目市立総合病院からはかなり離れているらしい。また、仕事の都合、親の性格などが相まって、早知の元を訪れることはほぼ無いと言っていい。また、父親が病氣を持って生まれてきた早知を、恥としか思っていないらしく、偶然にも一度会ったときの早知に対する接し方は酷いものだった。

一度はしっかりと、文字通りの自宅療養を行っただけ。しかし、そんな家庭環境では効果があるはずも無く、体調を崩して再び入院生活に戻ったそうだ。

とはいえ、病氣の状態は改善に向かっていることは変わりなく、夜の薬投与が無かったので、今日のこの時間に病院を抜け出したら

しい。

それで、いつも通りこちらが病院に連絡を入れたところ、通い慣れている萩本家なら自宅療養の場所としては効果的なのではないか、という担当医の提案で同居が決まった、というわけだ。あの後、早知の親に連絡を入れ許可が出れば、との事だったが、父親の性格からして反対することは考えにくいので、同居はほぼ決定と言って間違いない。

大体、そんな内容を話した。

内容が内容だったので、しばらくは静まり返っていたが、その沈黙を破ったのは美紗子だった。

「だいたい状況は分かったけど、あんたは何でこうも簡単にOKしちゃうのよ？」

やはり、美紗子としては納得がいかないらしかった。

「お前は、さっちゃんが一生退院できなくても良いって言うのか？」

「さすがお兄ちゃん、優しい！」

早知の友達としては引けないところなので、真剣な目で美紗子を見る。杏子にかけてくれた言葉は嬉しかったが、今はとりあえず触れないでおく。

「それは……。それに、居候の人数が増えたらあんたも大変でしょ」
たしかに、美紗子の主張は正しい。それは今も身に沁みて感じている。だが……

「だったら、お前が出ていけよ。お前だけ、うちに住まないといけない理由は無いんだか……げふっ」

「もう、勝手にすればいいじゃない」

美紗子は、何やら文句を言いながらリビングを出て行った。

守はそれを、殴られた箇所を押さえながら見送る。いきなり理由も無く殴るのはひどいと思う。それに、このごろ美紗子の理不尽な暴力が多い気がするの……うん、気のせいじゃないよな。

だいぶ痛みが治まってきたので周りを見ると、涼子と尚が口を押さえて笑っていた。何で笑ってるのかは分からないが、そんなこと

をしているのなら、少しはこちらの心配もしてほしい。

なにはともあれ、こうして無事(?)に早知の同居が決まったのであった。

「……南條早知なんじょうさちです。学校に通うのは初めてなので、わからないことも多いと思いますが、助けてくれると嬉しいです……」

早知の同居が決まった翌日のこと。教室の前では、今にも消え入りそうな声で早知が自己紹介をしていた。

その姿は、頑張って話している、と言う表現が一番当てはまりそうだった。

本人も言っている通り、今までは長い時間病院から離れられなかったため、今までは通信制の高校に所属していたらしい。その為、生まれて始めて着たらしい制服は、まだ着せられているといった感じだった。清潔感溢れるショートカットや、杏子にも負けない外見年齢の低さ、守ってあげたくなる容姿や雰囲気は、相変わらず普通に見れば癒し効果抜群だ……普通に見れば。

そう、病院での生活が長かったためか、色々な知識が変に偏っている。どういう風に偏っているかは……昨夜の登場シーンで察していただきたい。付け加えると、その知識が発揮される時には、性格が180度変わったりする。それは本人が自覚しているわけではなく、自然となってしまうらしい。

内心で応援しながら早知を見ると、早知は一旦悩んだ後、言葉が続けた。

「あと、マー君……あ、守君の家に住ませてもらってます。よろしくお願いします」

いらない爆弾発言しやがったよ。言わないように言っておかなかった自分にも非が無くはないけど。

早知がお辞儀をして、自分の席へと向かう。場所も自分と近い所なので、何かあればすぐに助けに入れそうだ。

担任の佳奈子は、早知が席に着いたのを確認してから、口を開いた。

「それでは、一時間目の準備を始めてください」

佳奈子の言葉を最後に休み時間へと入る。

すると、待ってました、と言わんばかりの勢いで浩太がやってきた。

「お前は、どれだけの女子同居すれば気が済むんだよ」

「別に、俺が望んでしてるわけじゃないし」

「だったらオレに変わりやがれ」

相変わらず、浩太がこちらの苦勞をわからずに突っかかってきた。これ以上浩太の相手をしてると疲れそうなので、ふと早知のほうに目を向ける。早知は何人かの女子に囲まれていて、おどおどしてはいたが上手くやっているようだった。

「おい守、何かハーレムを作る方法があるなら教えてく……げふ」

「その辺にしとけよ。守も困ってるだろ」

面倒くさいので、浩太の話を右から左へと受け流していたところ、大樹が助けに入ってきてくれた。その横には尚の姿もある。

しかし、殴られたにもかかわらず、まだ懲りていないらしい浩太は、さらに迫ってくる。

「守、何かコツがあるんだろ」

「ねーよ、そんなもん」

「ない……よな。」

ここまで立て続けに同居者が増えると、先日の占い師の件が原因ではないかと疑いたくなる……が、あの時に言ったのは、幼馴染との同居であって、その条件に当てはまるのは美紗子しかないから大丈夫……なはずだ。第一、他に幼馴染なんていないし……いや、浩太も一応は幼馴染だが、こいつと同居なんてありえない……よな。ここで、下手に感づかれても困るので、とりあえず話をそらそうと試みた。

「第一、尚がいるんだからハーレムじゃないだろう」

……のだが、明らかに失敗した。

「……そう、だよな」

傍観していた尚が、突然話しかけられたことに驚いたのか、妙にはっきりしない答え方をする。

「尚よ、オレはわかってるぞ。お前が実は男装した女子で、守と結婚するために留学してきた事ぐらい」

「そんなことあるわけ——」

——ないよな、と続けようとして思わず言葉を吞んでしまった。

尚を見ると、顔がだんだんと青くなっていつてきていて、口をパクさせていた。さらに、額からは妙に汗が出てる。

これは、さすがにまずいと思い、尚を保健室に連れて行こうと席を立て、

「おい、な——」

「あんたたち、ちょっといい？」

突然、美紗子が会話に入ってきた。

「おお、ついに本妻がハーレムに立候補か？」

「……ゴホン。ええと、来週の水曜日のことなんだけど——」

美紗子が一瞬黙った後、咳払いをして話を続ける。

「って、否定しろよ。……まあ、同居してるのは事実だけど。」

「ってことなんだけど、都合の悪い人いる？」

「俺は大丈夫だぞ」

「あ、オレも」

「俺も大丈夫です」

「僕もだ」

尚の調子もよくなったようで、普通に答えていた。

美紗子が話した内容は、尚と早知の歓迎会についてだった。先ほど、早知の周りを取り巻いていた女子から話が始まり、クラス全体でひらいてくれることになったらしい。自分のためではないが、自分の友達、そして家族のためにこういうことをしてくれることは、とてもほほえましく感じる。

「それじゃあ、多分水曜日になるから、しっかり予定を空けときなさいよ」

「了解」

美紗子はそれだけ言い残し、女子の輪のほうに戻っていった。

その日の放課後、先日は美紗子と二人で通った道を、尚と早知を含めた4人で歩いていた。

「しかし、何で今更あの占い師のところなんだよ？」

「もう一度、お願いするためよ」

美佐子が答えながら、手に持ったアイスをスプーンで取って口に運ぶ。

今日は、いつもに比べて暑かったので、通り道にあったワゴンで買ったものだ。味は、守と尚がソーダ、美紗子がミックスベリー、早知がバニラだ。

「みっちゃん、何かお願いしたいことあるの？」

「前に頼んだことが起こってないみたいだから、もう一度お願いしに――って守、なにしてるのよ」

「ん……ミックスベリーも割といけるな」

もうすぐ無くなりそうになっていたので、美紗子のアイスをつついてみたところ、ものすごい形相で睨まれた。この頃の美紗子は、今までは普通にやっていたことに対して、もう妙に敏感になっている節がある。

ついでにいうと、美紗子の願いは守に不幸が訪れること、という内容だったが、それは十分に起こっていたりする。しかし、内容が同居人数が増えたことで起こったことばかりなので、ここでは口にしないが。

「ほら」

「何よ!？」

まあ、何も忠告せず取った自分も悪いので、お返しとして自分

のアイスを一口とって差し出す。

「ソーダもうまいぞ。食ってみろよ」

美紗子がなかなか食べようとしないので、再度スプーンを美紗子の方へと突き出すと、やっと美紗子がそれを口に入れた。

「……!?!」

思った以上においしかったのか、美紗子は先ほどまでの表情とは一転しとても幸せそうな顔をしていた。

あげてよかったな、とこっちも幸せな気分になっていると、横から体をつつかれた。

「さっちゃん、どうしたんだ？」

「みっちゃんだけずるい……さっちゃんも食べたいな」

早知が、上目遣いでお願ひしてきた。

「ほら」

「ありがとう、マー君」

……にしても、これは反則的過ぎて、あげないわけにはいかなかった。まあ、こんなことされなくてもあげるけど。

目の前では、早知がアイスをおいしそうに味わっていた。

「はい、さっちゃんのもあげるね」

「おう、ありが——」

向けられたスプーンに口を持っていこうとしたところ、突然引っ込められた。驚いて早知の顔を見ると、なにやら悩んでいるようだった。

「はい、あーん」

「あ、あーん」

食べてみると、バニラながらも牛乳の味が強めで自分好みの味だった。

しかし、早知にさせられてついつい言ってしまったが、実際やってみると恥ずかしい物があった。やりだした早知まで顔を赤くしているの、余計に恥ずかしい思いが強くなってくる。

美紗子の冷たい視線を感じながらも動けずにいると、今度は尚か

ら声をかけられた。

「守……その……」

「どうした？」

声をかけてきた当人のほうを見ると、何かをいいたそうにしていた。しばらく待っていると、決意を固めたのか尚が口を開いた。

「よかったら、僕にも守のアイスをくれないか？」

「そんなことか……って、俺のと同じ味だよな？」

分かっていたことのはずなのに、尚は意表を疲れたような顔をしていた。

多分、話の中に入りたかったただけなんだよな。

特に交換する必要もないので、そのまま次を口に運ぼうとしたところで、

「マー君、そこはあえて交換するんだよ」

「何でだよ!？」

早知が以上に高いテンションで話しかけてきた。

「ここは、男同士のあつい間接キスを」

「男女間でならともかく、なんで男同士で——」

守は、大きな威圧感を感じたので、最後の言葉を飲み込み、そちらに首を向ける。

「まさかあんた、そんなことを思いながらあたし達のアイスを食べてたわけ？」

「いや……」

余りにすごい美紗子の怒りに、全然そんな気はないのにうまく反論できない。

助けを求めて尚のほうを向くと……なんだ、その期待するような目は。

守が必死にこの場から抜け出す方法を考えていると、突然救いの声がかかった。

「ねえ、いないんだけど……」

声のしたほうをみると、美紗子が道の先を指差していた。

守もその先を見ると、

「この辺であってたよな」

周りの家や電信柱の様子を確認してみるがこの辺りで間違いないはずだ。

確認のために美紗子を見ると、その考えを肯定するように首を縦にふった。

「ってことは、やっぱりいないのね……」

その後しばらくの間、周囲を散策してみたが、占い師は見つからなかったので、素直に帰宅の途についた。

その日の夕方、美紗子はその日の宿題が早めに片付いたので、美香と琴瀬姉妹と共にテレビゲームをしていた。ソフトは、いろいろな人気ゲームのキャラクター達を使用できる、横スクロール方の対戦ゲームだ。

「美紗子おねーちゃん強い」

「次は負けませんから」

「望むところよ」

昔からよくゲームをしている自分が勝つのは分かっていたので、自分を一人にして3対1のチーム戦で戦っていたのだが、それでもここまで5ゲームやって美紗子の全勝という成績だった。

「美紗子ちゃん強いんだから少しぐらいはハンデつけてよ」

「それじゃあ……」

美紗子は、手に持ったワイヤレスコントローラーのボタンを押して、自分の苦手なキャラの所にカーソルを持っていく。

守がいれば、自分と別々のチームにすれば自分が手を抜く必要が無くなるのだが、宿題が終わっていないので、仕方がない。問題数は少なかったが、とき方を知らないとなかなか解けない問題なので、しばらくは降りてきそうにない。尚とはまだ手合わせしたことはないが、ゲーム慣れはしているらしいので、いれば少しは変わるのか

な、などと思っていると、風呂場のほうから声が聞こえてきた。

「誰かいるか？」

「何？」

失礼します、と断ってから、立ち上がって風呂場のほうへと向かい、脱衣所の前で立ち止まった。

「どうしたの？」

「早見か。悪いが石鹸が無くなってしまったから、取ってもらえると嬉しいんだが」

「ええと……一条院君だよね？」

思わず聞き返してしまった。状況的に考えても、浴場にいるのは尚以外にありえなかったが、それでも聞いてしまうほどに美紗子は動揺していた。

別に、尚の入浴姿を見たいとは思っている訳ではない。ただ純粹に、動揺していた。

萩本家は無駄に広い。それは脱衣所においても例外ではない。棚というのは部屋の隅に設置されるものである。それ故、石鹸類の置いてある棚と浴室への距離は、普通では考えられないほど離れている。それ故、取りに行くための作業や手間を考えて、尚は他の人に頼もうと思ったのだろう。

別に、手伝いをするのが嫌なわけではない。しかし、内容が内容だ。男子が入浴中の脱衣所から石鹸をとって届ける。普通にこなしても、下着や入浴姿を見ることがになりかねない。

これが、幼馴染の守だったらまだ構わないが……色々やりなれているという意味で。

何かあったところを、幼馴染に見られたらたまらないが、理由もなく尚の頼みを断るわけにも行かないので、どうしたものかと悩んでいると……

「一条院君、ちょっと待ってて」

思考の末、名案……というより当たり前の思考にいたったので、尚に声をかけた後、今までの思考内容の恥ずかしさを隠すように、

早足で階段の方へと向かった。

「守、まーもーるー!」

30分ほど悩んだ末、やっと一問目の答えの輪郭が見えてきたところで、何度も呼ばれる自分の名前に見事に思考が上書きされた。

さすがに頭にきたので、自分の部屋のドアを力任せに勢いよくあけた後、1階に向かって叫んだ。

「美紗子、どうしたんだよ?」

「ちよっと、そんな風に開けたらドアが壊れるでしょ」

下からは、お前はどこの母親だよ、と突っ込みたくなる美紗子の声が返ってきた。というか、だったら呼ぶな。

「おい、用が無いなら戻るぞ」

美紗子は、普段ならこういう意味の無い嫌がらせをするようなやつじゃないが、なんかストレス溜まってたんだなきつと。

守は美紗子の嫌がらせだと判断し、部屋に戻りながらさっき見えたかけた輪郭を思い出そうとしていると、

「いいから、ちよっと来なさい」

結局、嫌がらせではなかったようなので、再び方向を変え、急いで階段を下りる。

「どうしたんだよ?」

「遅い!」

階段を下りた先で待っていた美紗子に尋ねると、第一声で罵倒を浴びさせられた後、用件を説明された。

自分から呼んでおいていきなり切れるってどうよ、と思いながら聞いていると、尚が入浴中に石鹸が切れてしまったらしいから取ってあげて欲しい、ということだった。

「そんなの、お前が取ってやればいいだろ」

明らかに理不尽な理由と問題を解いている途中に呼ばれたので、ついつい高圧的な言い方になってしまった。

「バカ、あたしに持ってけって言うわけ？」

「……悪い、わかった」

たしかに、それはまずい。

美紗子にやらせるわけにはいけないので、さすがに引き受けることにした。そんなに時間かかるものでもないし。

さっきの輪郭は既に跡形もなく頭から消えてしまっていたが、早めに考え直せば思い出すだろう、と思い、さっさと終わらせるために風呂場へ行くと、美紗子はリビングの方へと行ってしまった。

そのまま脱衣所に入り、奥のほうにある石鹸類が置いてある棚をあさり始める。

「ええと……お、これだよな」

棚から石鹸を取り出すと、浴場の方へと向かう。

浴場の前に立つと、模様のついたガラスの向こうで、尚が背中を向けて髪を洗っている様子がぼんやりと見えた。

「……入って、いいんだよな」

尚の髪が男子はおろか、一般的な女子よりも長いのと、生来の女性的な体つきのせいもあってか、なんとなく同姓とは思えない感じがしたため、自分に確認してしまった。

「おい、尚。入るぞ」

普通に考えれば問題あるはずがないので、声をかけながらドアを開ける。

「尚、石鹸を……」

ドアを開けたとたんに見えた尚の美しさに、思わず息を呑んでしまった。

濡れているためか、髪にはウェーブがかかっている。しなやかな体つきも服が無い分しっかりと見えて妙に意識してしまう。腰のくびれは手で囲めそうなほど細いの、腰は大きくて、下手すると美紗子よりも女らしい体格では無いだろうか。

「あ……」

こちらに気づいて振り返った尚と目が合って、お互い時間が止ま

ったように静止した。その間にも、シャワーから出ている水は、静かに音を立ててタイルへと届く。

こちらに向けられた尚の顔は、やっぱり綺麗で本当は女性ではないかと思ってしまうほどだ。さらに、大きく膨らんだ胸がその考えをさらに強めて……胸？

「ま、守……」

やっと状況を理解したらしい尚が、みるみる顔を赤くしていく。

さらに、握った左こぶしを震わせながら、右手で近くにあった木製の桶をつかんで、

「え……、ちょ、ま……」

「こ……この、痴漢！」

透き通った高い叫び声と共に、尚の手から放たれた桶は、まっすぐに守の顔へと向かっていった。

5章 守様と美香様の専属メイド岩井芽衣、4年間の修行を終えてただいま到美

「ん……ここは……」

守は頭の後ろに感じる心地よい暖かさを感じながら、目を覚ました。ぼんやりとした視界を、何度か瞬きしてハッキリさせる。

「え……涼ねえ？」

「あ、守君。大丈夫？」

目の前の光景が確認できるようになると、そこには心配そうに覗き込んでいる涼子の顔があった。

「うん、まあ」

まだ少しふらつく体を起こしながら答える。特に痛みを感じるところはないので、大丈夫だろう。

その間にも、完全に起動しきっていない頭で今の状況を整理しようとする。すると、少しずつではあったが、状況はつかめてきた。

「俺、どのくらい伸びてた？」

「5分くらいよ」

「ありがとう」

よかった、そんなに時間は経っていないようだ。

あの後、尚に投げられた桶が顔にぶつかって気絶したんだよな、多分。その後、涼子が看病をしてくれていたんだろう。あれ？ っ
てことはもしかして、さっきまで後頭部に感じていた暖かさは涼子の膝枕ということに……

「おねーちゃん、タオルしぼれー」

声のしたほうを見ると、手にタオルを持った杏子がいた。目が合ったとたん、杏子がタオルを床に落としてしまった。

「おにーちゃん！」

「杏子!？」

しばらく、無言のまま見詰め合っていると、突然飛びついてきて、そのまま、胸に顔をうずめて泣き出した。

「……おにーちゃん、ぐすつ、死んじゃったのかと思って、心配したんだよ」

「心配してくれて、ありがとうな」

こちらからも、軽く抱きしめながらゆっくりと頭をなでてやる。泣くほど心配をしてくれたのは嬉しいが……勝手に人を殺さないでくれ。

「もう、大丈夫だから」

「本当に？」

「本当だよ」

しばらくして、泣き止んだ杏子を自分の胸からそっと放す。すると杏子は、本人なりに無事を確認した後、涼子の横へと移動した。

「さて」

わざと大きめに声を出して気合を入れる。これから、現実と戦うための下準備だ。

心に覚悟を決め、背中から突き刺さる冷たい視線×3＋αの方へゆっくりと振り返る。

「で、お前らはなんだよ」

「ついに覗きに走るなんて……見損なったわ」

「……」

「しばらく会わないうちに落ちましたわね、守」

「ハアハア……」

すると、予想通り不審者を見る目で自分を見る美紗子と美香、それに長髪の少女と、何故か激しく興奮している早知と目が合った。

心配される所以はあっても、攻められる所以は無いと思う……というか、なんかデジャヴ。

守は、机の上に腕と足を組みながらこちらを見下ろしている長髪の少女を見た後、美紗子と美香の方へ向いて弁明を試みる。

「あ、あれは、明らかに不可抗力だろ。女子だなんて知らなかったんだし」

「関係ないでしょ、そんなの」

「……」

だが、やはり聞く耳を持つてもらえなかった。

おい美紗子、第一やらせたのはお前だろ。

殆ど希望を持てなかったが、一応弁明を続けようとしたところで、「ちよつと、守。人の入浴姿を覗いておいて、不可抗力で済ませようと言いますの?」

「悪かったよ」

机の上の少女から攻められたので、一応謝っておく。こいつは悪くないわけだし……いや、そうでもないかも。

「守、何であたくしを見つめていますの?」

色々考えているうちに少女を見つめる形になってしまったようで、少女は組んだ腕で無意識に大きな胸を押し上げながら、こちらに話しかけてきた。

「なあ……とりあえず聞いていいか?」

「どうしましたの?」

「お前——」

とりあえず、疑問点は本人に聞いてみるのがいいだろうと思い、

1番重要なことを単刀直入に聞いてみることにした。

「その大きな胸、どうやって隠してたんだ?」

『最初に聞くのがそれ!?!』

素直に、1番不可解な点を聞いてみたのだが、何故か琴瀬姉妹に突っ込まれてしまった。

だって不思議に思わないか、あのグラビアアイドル並みの胸をまな板に見せる方法。普通にさらし巻いただけだと、隠しきれそうにないし。

少女からの答えを待っていると、別の方向からさっき以上の威圧を感じたので、恐る恐るそちらに顔を向けると、

「やっぱあんた、巨乳のほうが好みだったのね……」

「……」

「いや、そんなこと——」

ないぞ、と続けようとしたところで、あまりの迫力に言葉を呑んでしまった。

というか、何でこんなことで攻められるんだろう。第一、自分としては少女^{こいつ}みたいに整ってるならともかく、普通は形が崩れるから、大きさは美紗子^{みさこ}みたいに平均的なくらいが好みなんだがな……。

しかし、そんなことを美紗子に言ったところで、殴られること確定なので釈明の言葉は心の中でとどめておく。

「で、お前、奈緒でいいんだよね？」

「それ以外に誰に見えると言いますの？」

「他のヤツには見えないけど……」

やはり、自分の直感は正しかったようだ。

綺麗になったな、と思いながら久しぶりに会った幼馴染^{いちじょういん}、一条院奈緒^{なお}を眺めてみる。昔から整っていた顔立ちは、成長したことにより大人っぽくなっていて、綺麗の一言に尽きる。その顔ゆえ、男装しても違和感がなかったのだろうが、女子の格好をしている今の方がしっくりきていた。

組んだ腕が持ち上げる胸はE、F……ともかく、女子高生としては信じられないほどの大きさで、キュツとしまったくびれ、それに反して大きな腰はそこのモデルよりもよっぽどスタイルがいいと思う。

しっかりと手入れされたウェーブのかかった長い髪からは、風呂上りの女子特有のシャンプーの香りが漂ってきて、さらに評価がよい方に向かう。

しかし……

「昔と全然変わってないな……」

机の上に座ったりしているあたり、お転婆なところは相変わらずらしい。でも、昔はこんな変な話し方してなかったし、内面的にはたちが悪くなった、と言った方がいいか――

「――イタッ」

「あたくしのどこが変わってないと言いますの？」

いつの間にか床に下りていた奈緒が、自分に回し蹴りを食らわせて、仁王立ちの姿勢へと落ち着く。

「早く理由を言いなさい。内容によっては実力行使もやむを得ませんわ」

そして、堂々と言い放った。やむをえないも何も、既に実力行使しましたよね？

奈緒の性格からして、そんな理論的なことは通じないことは分かっているの、素直に内容を話すことにした。

「いや、相変わらずお転婆なところだよ。お前は、育ちもいいし、見た目も綺麗なんだから、そういう行儀の悪いことするなって昔よく言っただろ」

「綺麗……見た目は綺麗………」

そんなこと知りませんわ、などといいながらまた回し蹴りをお見舞いしてくるんじゃないか、と思って防御の構えを取ったが、予想には反して奈緒は何かつぶやきながら自分の世界に入っていた。

安心してため息をつこうとしたところ、三度別みたびの方向から今までにない威圧感を感じて、そちらを向く。

「やっぱあんた、巨乳のほうが……」

「……」

「……何でそうなるんだよ」

相変わらず、美紗子の怒り出す理由はつかめなかった。

さすがに疲れてため息混じりに答えると、突然3回の手拍子が聞こえてきた。

「みんな、こっち向いて」

少し怒り気味の涼子の声につられて、全員が涼子の方へと目を向ける。

さすがは最年長の涼子、この騒ぎを何とかしてくれそうだ。

守が期待の目を込めて見ていると、涼子は全員が注目したのを確認してから話し出した。

「みんな個人的に言いたいことがあるとは思うけど、それはとりあ

えず後にして。いい？」

涼子の呼びかけに全員が頷く。

「それで奈緒ちゃん」

涼子は全員の意志を確認した後、奈緒の方を向き、

「とりあえず説明してもらえる？」

「分かりましたわ」

奈緒が返事をすると同時に、全員の視線が奈緒へと集中した。すると、奈緒が間をおいてから口を開く。

「説明いたしましょう——どうやってこの胸を隠していたかを」

『そっち!？』

「その方法というのは——」

全員一斉に突っ込んだにも関わらず、奈緒は晒さらしの巻き方を、時折ときおりジェスチャーを交えながら説明していく。

杏子と早知は真剣に聞き入っていたが、守は美紗子や涼子と小言をはさみながらなんとなく聞いていた。

「——ということですよ。分かりました？」

「あ、ああ……」

全然理解してないし、正直理解する気もないが、ここでそれを正直に言っていると、さらに長々と説明を続けられそうなので止めておく。

全員が肯定の反応をしたためか満足そうな表情をした奈緒を見て、ふと頭に思い浮かんだことが口から漏れてしまった。

「お前、よくそんな巻き方思いついたな」

「当然ですわ。3億もの資金をかけて英国イギリス一の研究所に開発させたんですもの」

うわ、きたよ金持ちの無駄遣い。うちの親もよくやるけど……その最たる物がこの家だし。別居するときに、寂しいだろうからってこの家を建てていつてくれたのだが……正直、広すぎて逆に寂しい。「そんなことはどうでもいいから、何で男装してまでうちに来たのかを説明してくれ」

「どうでもいいとは何ですか？ 自分で聞いておいて」

うん、自分でもすごい失礼だと思う。

でも奈緒だからいいや、と思っていると、守の予想通り奈緒は切り替えて理由を話し出した。

「あたくし、日本の大学に進学しようと考えておりますの。そして、その大学への海外からの入学条件に、日本に過去3年以内に、1年以上留学したことがあること、とありますの」

「で、何で男装を？」

留学しに来た理由は納得できたが、それだとわざわざ性別を偽る必要はまったく無いので、改めて質問する。

「あなた、このあたくしに貧相な一般市民の家に滞在しろと言いますの？」

「たしかにな」

今ので大体わかったので、頷いて返す。

奈緒は、大企業の令嬢として生まれたにしては珍しく、色々な感覚は一般人と変わりないが、富裕層の生活に慣れてしまっているせいか、狭い家出の生活や高級食材を使っていない料理を食べる生活などを、1年間も続けるのは無理なのだろう。たぶん、うちでもギリギリ位だし。

そこで、萩本家に目をつけたが、留学生は同性の家に滞在するのが基本なので、性別を偽って留学してきたのだろう。

一通り納得がいったが、そこで新たな疑問点が浮かんだったので聞いてみる。

「お前、大学には女子として通うんだよな？」

「ええ」

やはり奈緒の反応を見る限り分かっていない様なので、そのまま後を続ける。

「だったら、男子として留学するのは意味無いんじゃないか」

「……そんなの、一条院家の財力を持てれば、さしたる問題ではありませんわ」

一瞬悩んだあたり、絶対考えて無かったよな。しかも、それが通

用するんなら、別に留学をしなくても何とかなるのではないだろうか。

「というのが、表向きの理由でして……」

「表向きって……じゃあ、本当の理由は何なんだよ」

周りが多少呆れ顔になっている中、奈緒がこぼした呟きが聞こえた。その中に、聞き流してはいけない言葉があったので、再度奈緒に問いかける。

すると、奈緒は大きく息を吸い、

「そんなの、守があたくしのことを許嫁^{いいなすけ}として認めないからに決まっていますわ」

「は!？」

守はあまりにも唐突な内容の発言を聞いて、間の抜けた声を出してしまう。

「俺は許嫁なんて話、聞いてないぞ」

「そんなことがあるはずが――」

「あの……」

訳が分からないうちに言い争いに発展しかけたところを、突然聞こえた美香の声に止められた。

「美香、どうしたんですの？」

「結婚の話を断ってるのって、お兄ちゃんじゃなくて、親なんですけど……」

「はい!？」

あまりにも予想していなかった答えだったためか、今度は奈緒が素っ頓狂な返事をした。

にしても、なぜ美香が本人である自分も聞いてない許嫁^{うんぬん}云々の話を知っているんだろうか。

それ自体はあとで父親あたりに直接問いただせばいいことなので、守は話がややこしくならないうちに自分から話を切り出した。

「でも、何で俺なんかを許嫁に？」

どうしてもそこだけは、合点がいかなかった。企業の大きさに

考えて、萩本家は一条院家の足下にも及ばないので、わざわざ向こうから婚約を申し込んでくる理由がない。

そうなると思う理由は1つ、奈緒が自分に好意を持ってくれているというものだ。

性格に多少難があるが、しばらく離れていたとはいえ幼馴染であるので、色々やりやすいと思う。また、見た目は全く文句ないし、家柄的に考えても萩本家としては理想的すぎる。

だったら、即婚約の約束はできなくても、普通に付き合い始めて、お互いが納得いけばそのまま結婚してもいいんじゃないかな、などと思っていると、

「先に言っておきますけど、別に守に好意を持っているわけではありませんわよ」

……だよな。普通に考えてそんなことあり得ないし。

一瞬でも期待してしまった自分を恥ずかしく思いながら、結局解決していない疑問をぶつける。

「じゃあ何で俺を？」

仕方がないな、とでも言いたそうな顔でこちらを見たあと、奈緒は右手をこちらに向けて、人差し指を立てた。

「1つ目、富裕層の男性は話の通じない者ばかり。2つ目、一条院家の娘として、この歳にもなれば将来の婚約者を決めなければならぬ。守、この2つは分かりますわね？」

「まあ」

数字に合わせて中指を立てながら、徹底したの説明口調で奈緒が解説を始めた。

1つ目に関しては、文句なしに同意できる。金に不自由なく豪勢な物に囲まれて育つせいか、富裕層の人間は一般人とかけ離れた感覚や思考を持った者が多い。ごく少数だがまともな人もいなくはないが、その人数は家柄が良くなれば良くなるほど少なくなっていく。

2つ目に関しては、各家ごとに異なるので何ともいえないが、奈緒の言い方からしてそうなのだろう。まあ、一条院家の娘ともあれ

ば、お見合いの話なんかも多いだろうし。その風除けの意味もあるんだと思う。

その2つを合わせて考えると、奈緒は早々に許嫁を決めないといけない。しかし、一条院家に相応しい家柄の相手に奈緒が納得出来る相手がいない、ということだろう。

そこまでは合点がいったが、それと自分がどう関係あるのだろうか。

答えが解らないので、今までの奈緒の発言にヒントは無いかと、今までの会話を思い出して、

「まさかとは思うが……」

出来れば外れてほしい、自分でも妙に納得のいく答えを思いついたので、恐る恐る聞いてみた。

「そうですわ。そこで、あたくしは許嫁として、仕方なく守を選んだんですわ」

やっぱり正解だった。

「さあ、守。美人で勇敢で活発で、なおかつリーダーシップ抜群な女性の婚約予定者になれるのですから、迷わず契約書にサインするんですわ」

「なあ、奈緒。美人で勇敢で活発で、なおかつリーダーシップ抜群な女性って誰だ？」

たぶん自分のことを言っているのだろうが、内容と本人像が一致しない。美人なのはともかくとして、他はな……。

そんなことを奈緒に言うやつがいたら是非会ってみたいな、と思っていると、殆ど時間がかからず奈緒が自分の手を大きな胸に当てながら答えを話した。

「あたくしのことですわ。第一、あなたがそう言ったんでしょ」
「そういえばそうだった。たしかに昨日、尚にそう言った。にしても、何で言った内容を全て覚えてるんだろうか、こいつは。」

しかし、あれはあくまで他人に話すための表現であって……

「お転婆でガサツで、人に有無を言わせないほど自己中で、ルック

スしか取り得のないやつが許嫁になんかなってたまるか」

我ながら言い過ぎた気がするが、奈緒が相手なら大丈夫だろう。これくらい言わないと、押し切られそうだし。

奈緒のことは嫌いではないが、今すぐここで婚約者を決めろとか嫌すぎる。時間をかけて納得した後ならともかく。自分としては、出来れば美紗子のような一般人と結婚したいし。

しばらくすると、守の予想通り、奈緒が顔を真っ赤にして迫ってきた。

「話し合いは、契約書にサインした後ですわ」

「それじゃあ手遅れになるよな！」

ついに、自分の意見が無視され始めた。

さすがに1人での応戦が厳しくなったので、助けを求めて周りを見ると、どこからか持って来たらしいノートパソコンをいじっている早知と目があった。

助けてくれ、と視線で訴えると、そのメッセージを受け取ってくれたのか、顔を上げた早知が口を開いた。

「マー君には、既に許嫁がいるから難しいと思うよ」

「本当ですよ!？」

よかった。奈緒の様子を見る限り、諦めてくれたようだ。

それにしても、まさか自分に許嫁がいたとは。世の中知らないことばかりだな……って、許嫁!？」

守がようやく早知の言葉の意味を理解した所で、早知が言葉を続ける。

「ええと、名前は、はや……むぐ……むぐう……むぐぐ……」

「早知さん、人の家の機密情報を勝手にハッキングしてバラさないでくださいね」

早知が話している途中に、美香が早知を押さえにかかった。

「……」

「……」

守は、名前の出だしを聞いてある人物の顔が頭に浮かんだので、

その人物を見る。

すると、目があったので、お互い視線で無関係なことを確認して頷いた。

しかし、美紗子ではないとなると、誰なんだろうか。『はや』で始まる名字というと、早川、林、はたまた他の早見さんかもしれない。どちらにしても心当たりは無いので、自分の知らない人のようだ。

父親に問い詰める質問リストに項目を追加し、パソコンの方を見ると、琴瀬姉妹が覗き込んでいた。

「お似合いだとは思っていたけど……」

「おにーちゃん、仲良くしなきゃダメだよ」

2人がニヤニヤしながら意味深なことを呟いていた。

見たことない人とお似合いとか言われても……

「誰なんですか？」

「美紗子さん、見ちゃダメ！」

続いて美紗子が覗き込みもとしたところで、早知を解放した美香がノーパソを勢いよく閉めた。

「美香、あたくしのパソコンが壊れたらどうしますの？」

隣から聞こえる罵声によると、あのノーパソは奈緒の物だったらしい。

「さっちゃん、人のパソコンを勝手に使わないようにして欲しいものですわ」

「尚君、性転換手術してまでマー君を落とそうとする心意気、ボクは感動したよ」

美香から解放された早知が、奈緒に話しかける。

内容から察するに、早知は尚が守を落とすために女性になった、と勘違いしたらしい。

奈緒と早知は昔に顔を合わせたことがあるが、早知の方は覚えてないだろう。奈緒は不衛生だ、とか言って、病院に来たのは入院早々の1回だけだし。早知にとっては、たくさんいた見舞い客のうち

の1人に過ぎなかっただろう。覚えていたからといって、早知が正しく認識したかどうかは分からないが……腐女子だから。

「さっちゃん、あたくしはれっきとした女ですわよ」

「照れ隠ししなくても大丈夫だよ。応援してるから！」

早知には話が伝わらないことを察したらしい奈緒は、パソコンが壊れてないことを確認したあと、時計を見てからこちらに視線を移した。

「守、色々ありましたけど、さっさと勉強を始めますわよ」

「お、おう」

あまりにも突然話をふられたので、ハッキリとしない返事になってしまう。

時計を見ると大分遅い時間になってしまっていた。明日の朝もあるし早めに始めないと、と思いリビングを出ようとしたところで「ちょっと待ちなさいよ」

突然美紗子に呼び止められたので、歩みを止めて振り返る。

「美紗子、どうしましたの？」

守が呼び止められた理由を聞こうとしたところ、奈緒に先手をとられた。

「あ、あんたたち、男女2人っきりで勉強する気？」

「その予定ですけど、何かありませんか？」

振り絞ったような美紗子の質問に、奈緒がサラッと答える。すると美紗子は、何も言い返せずに固まってしまった。

たしかに奈緒の正体が分かって勝手が少し変わるが、状況は昨日と変わらないし問題ないだろう。

「守、行きますわよ」

「おう」

奈緒に呼ばれ、再びリビングを後にする。

「いいわよ。家事とかあるし、あたしの方が一緒にいる時間は長んだから」

その後、美紗子がボソッとつぶやいた言葉に気付いた者はいなか

った。

守は今日も草原の中にいた。

「菜子、前に話した占い師のこと覚えてるか？」

「覚えてるよ」

自分の隣に座った少女は屈託のない笑顔を浮かべながら答えた。

「その人にしたお願いが叶いそうになったるんだ」

「それは嬉しいことじゃないの？」

いや、と首を横に振って答える。

「幼馴染8人と同居っていうー」

守は、お願いした内容、状況を簡単に説明した。

それは、たしかに自分がお願いしたものだが、自分にとってあまり好ましいものではない。

「そうなんだ。それで、今日は何があったの？」

「留学生の尚が、実は幼馴染の奈緒だったんだ。これで、同居する幼馴染が二人目だよ」

今日の出来事を思い出して、ため息をつきながら答えた。

「ねえ、守」

少女は改めて守るに向き直った。

「――同居してる幼馴染って、本当に2人だけ？」

「もう、朝か」

珍しく目覚ましがなる前に目が覚めてしまった。首をひねり窓の外を見ると、空は完全に夜が明けておらず星も見えていた。

「うわ、まだこんな時間かよ……」

時間を確認すると、早朝の4時30分。予定していた時刻よりも30分も早く起きてしまった。

しかし、これで2度寝すると朝食の支度が間に合わなくなる可能

性があるので、まだ鳴っていない目覚ましのタイマーを止めてベッドから起き上がる。

いつもよりも眠気の残る体を起こすために大きく伸びをして、相変わらず覚えていない夢の内容を考えていると、

（同居してる幼馴染って、本当に2人だけ？）

「……へ？」

突然脳裏に声が響いたので、すぐに周りを確認したが誰もいなかった。

おそらく、脳が覚醒しきってないがために起こった幻聴だろう、と思いつき替ようと、上着の第1ボタンに手をかける。

しかし、何故か先ほどの言葉が引かかって、着替える気になれなかった。

「同居してる幼馴染、か……」

守は小さく呟いて、美紗子と奈緒の顔を思い浮かべる。それにしても、あの2人以外にも幼馴染が雑じっている、とでも言いたいのだろうか。

とりあえず幼馴染の定義をはっきりさせようと、勉強机の方へと向かい、立てかけてある本の中から国語辞典を取り出して、目的の項目を探す。すると、あまり時間が経たないうちに見つかった。

【幼馴染】——名詞 幼い時に親しくした人

とりあえず、美紗子や奈緒とは幼稚園のときからの付き合いなので、間違いなく幼馴染と言える。

他に、同居してる幼馴染は……実は屋根裏にもう1人幼馴染が暮らしていた、などということが無いとは言い切れないが、常識的に考えにくい。

そうすると逆方向から攻めていった方が早いだろう、と思い現在同居している顔ぶれを思い浮かべる。

美紗子と奈緒を除くと、隣の家に住んでいた涼子と杏子、自宅療

養という形でうちに滞在している早知、あとは正式な家族だが妹の美香も一応候補に入れておく。

その顔ぶれと出会った時期を、かなり昔のことなのでうる覚えながらも、出来るだけ正確に思い出していく。

1番ハッキリしているのは妹の美香だ。父親が今の母親と結婚したときなので、自分が幼稚園の年中、美香が年少の春だったはずだ。最初は、義妹ということで距離感をつかめずにいたが、しばらくすると打ち解けられて仲良くしていた。今ではこんな関係になってしまっているが、昔は兄妹仲は良かった方だったと思う。

次に正確なのは早知。病院で初めて会ったのは、足を骨折したときなので季節は覚えていないが、学年は小1で間違いない。病院での数少ない年の近い相手、ということもありすぐに仲良くなったし、今でも充分に仲が良いといえると思う。

あとは琴瀬姉妹か。かなり曖昧な記憶になるが、たしか2人と知り合ったのは、美香と会うよりも先だったので自分が年少のときだろうか。当時は、家が隣り合わせでは無かったが、美紗子の以上に家が近かったので、ちよつとした時間によく遊んでいたと思う。

『幼馴染』の定義にある幼いころというのは、大きく見て小学校低学年くらいだろうから……

「もしかして、全員……」

いくら血がつながっていないとはいえ、戸籍上も家族である美香を含めるのはどうかと思うが、今現在同居しているメンバーは全員『幼馴染』の定義に当てはまっている、と思う。

つまり、あのとのお願いのうち、4分の3は叶ってしまっているということになる。

「この状況は、果たして喜ぶべきか、嘆くべきか……」

喜ぶ、といっても願いが叶ってきていることに対してではない。守としては、奈緒の正体が分かったときに、あと6人を迎え入れる心構えをしていたのだ。しかし、既に6人はそろっているのので、迎え入れるのはあと2人で済む。

つまり、予想される同居人数が4人も減ったことに対する喜びだ。

「……とりあえず、着替えて下に行くか」

このまま考えていても誰かが答えをくれるわけではないので、考え方が前向きなうちに他の事をすることにした。

着替えを済ませてから時計を見ると、5時の10分前。どちらにしても、やらなければいけないことなので、調理をしながら美紗子のを待とうと階段を下りる。

その後、1階のトイレに寄ってからキッチンの方へと向かうと、誰もいないはずなのに電気がついていていた。昨晚、自分が寝る前に消えていることを確認したはずなので、昨晚からの消し忘れ、という可能性は考えにくい。

そうなると思いが起きてきてつけっぱなしとかかな、と思って近づいていくと、トントントンというリズム感のある物音が聞こえてきた。

泥棒である可能性も否定できないので、壁を伝いながら出来るだけ物音を立てないようにキッチンへと近づいていく。

もう少しで中が見えるところまで来たところで、中の様子を探るべく耳に意識を集める。

すると、先ほど聞こえたトントントンという音がしばらく続いた後、ポチャンという何かが水に落ちる音が連続で聞こえる。その後、ポンというビンのキャップの開く音が聞こえてきて……

「料理……か？」

おそらく、美紗子も早めに起きてしまっただけで先に調理を始めてくれてたんだろう。いくら幼馴染だからって、同じ日に早く起きてしまうことが起こるなんて珍しいな……って、そんなこと言ったらうちにいる全員が早く起きなければならぬことになるか。

守は、先ほど学んだことを生かして考え事をしながら、台所の中へと入る。

「美紗子、おはよう……って、なんだ、芽衣^{めい}か」

すると、そこにいたのは美紗子ではなく、メイド服を着た守と美

香の専属の家政婦だった。

「守様、おはようございます。まだ朝も早いですし、朝食の支度はわたくしがやっておきますので、よかったらもう1度ベッドで睡眠をとられてください」

「ありがとうございます、そうするよ」

芽衣に任せておけば大丈夫だろう、と思い足りてない睡眠をとるために方向を変えて歩き出す。

それにしても久しぶりだな、芽衣の手料理。何を作っていたんだろうか、などと心を躍らせながらしばらく歩いた後、守は明らかな違和感を覚えてキッチンへと駆ける。

するとそこには、先ほどと同じく、4年前から行方不明となっていた同年のメイドがツインテールを揺らしながら朝食の支度をしていた。

「芽衣、なんでお前がいるんだよ!？」

今まで行方不明になっていた相手に対する心配、怒り、再会の喜び、そういった全てのものをその1言に詰め込んだ。

すると、芽衣は調理を中断し、こちらに向き直る。

そして、背筋をピンと伸ばした後、深々と頭を下げて、

「4年間も留守にして申し訳ございませんでした」

謝罪の言葉を述べた後、芽衣はゆっくりと顔を上げて、満面の笑みを作って見せた。

「守様と美香様の専属メイド岩井芽衣^{いわい めい}、4年間の修行を終えてたがいま到着しました」

その言葉が、2人しかいないキッチンに響き渡った。

6章 く俺は普通に答えればいいかを聞いたただけだ!!

「……んん。……え? 寝坊!？」

美紗子が鳴り止まない目覚ましに起こされてみると、既に5時30分をまわっていた。

「とりあえず、着替えないと」

伸びなどしている暇もなく、ベットから飛び起きた直後に着替えを始める。4時に起きる予定だったのに、1時間と30分も寝坊してしまった。朝にやる予定だった勉強は仕方ない。しかし、問題は朝食だ。

昔なら5時おきでも時間に余裕があったらしい。だが、人数が増えた今、5時から2人で取り掛かっても出来上がるのは6時前後だ。今はおそらく、守1人でやっているだろうから、間違いなく朝食の開始は遅れるし、下手をすると弁当まで手が回らない。

「よし、着替え終わり」

守に変な勘違いをされてから変更した、半袖Tシャツ半ズボンという普段着にとりあえず着替えた後、寝癖の直しもしないまま階段を駆け下りた。

「あれ、電気がついてる?」

いざ、1階に下りてみると何故カリビングの明かりがついていた。調理中はキッチンしか明かりをつけないはずだ。そうなると、既に調理が終わっているということだろうか。

ここで悩んでいるよりもこの眼で確かめた方が早いので、駆け足でリビングへと入り込んだ。

「守、遅れてゴメ……ン?」

すると、そこには既に食器を並べ始めている守の姿があって、あまりにも予想外な展開に思わず語尾が上がってしまった。

美紗子が状況の整理に勤めていると、こちらに気づいた守が、

「ああ、美紗子。おはよう」

「おはよう」

特に怒る様子も無く挨拶された。

守が食器の準備をしているにもかかわらず、台所からは何かを炒めている音が聞こえてくる。何を作ってるのだろう、と匂いに注意してみると、普段では考えられないほど豊富な種類の料理が出来上がっているのが分かった。

「守、これって……」

「美紗子、今日は大丈夫だから、その辺に座ってテレビでも見ててくれ」

「う、うん」

あまりにも理解不能な状況に、美紗子はただ返事をするしかなかった。

言われたとおりに、イスの1つに座り、髪に手櫛を入れようとしたところで、まだ寝癖を直していないことに気づく。

別に目の前の幼馴染に可愛い姿を見てもらいたい、とか思っているわけではないが、この状態を弱みとして握られると後々厄介なので、早めに直してしまいたかった。タオルを探して周囲を見渡すと、テレビの前にたたみ終わった洗濯物の山にタオルを見つけた。

それを取ってから、台所へと向かう。濡れタオルを電子レンジで温めて髪に当てると、寝癖がすぐに直るのだ。

すぐにでもぬらせるように、たたみ方を工夫しながら台所に向かって……

「え、芽衣ちゃん!？」

予想していなかった人物との遭遇に、思考が追いつかなくなり、手に持っていたタオルを落としてしまう。

美紗子が、寝癖をつけたまま立ち止まる、という他の人には絶対に見せられない格好をしているうちにも、芽衣がコンロの火をとめてこちらに向き直り、

「美紗子様、ご無沙汰しております」

「……うん、久しぶり」

丁寧な芽衣の挨拶に、美紗子は訳がわからず上の空で返事をしていた。

「で、どういふことなのよ？」

朝食の支度が残りは盛り付けるだけ、というところまで来たので、3人でテーブルを囲む運びとなった。

自分の目の前に座っている幼馴染は、既に寝癖を直し終え、服装も整えている。

「あ、俺も聞きたい」

自分も芽衣が帰ってきた詳しい経緯を聞いていなかったのも、守は隣に座っている使用人の方へと目を向ける。

考えてみると、芽衣と会ったのも幼稚園のときだし、幼馴染に含まれるだろう。

「少し長くなりますが、聞いていただいてもよろしいでしょうか？」

「ああ」

美紗子とともに頷く。

「4年前の春、守様たちのご実家にお邪魔させていただいたときのことでした」

芽衣が少し声のトーンを落として説明を始めた。

その時のことは守も覚えている。中学の入学式前の春休みのことだ。

両親が、守と芽衣の中学の入学祝いのためのパーティを開いてくれた。落ち着いた雰囲気で行いたい、という守の気持ちを汲んでくれて招待されたのは、守と美香、芽衣、それに早見一家だけだった。ということは、美紗子も覚えているはずである。

「その日は、わたくしも招待される側ということで、炊事などは一切行わず、パーティを堪能させていただいておりました」

普段イギリスの本宅に戻ったときは、芽衣はメイドという立場ゆえ、向こうの使用人に加わって仕事をしている。あの日もそうしよ

うとしていたのだが、芽衣のためのパーティでもあるので、さすがに美香や美紗子とともにとめた。最終的に芽衣も納得してくれたが……考えてみると、芽衣が招待される立場でパーティに参加したのって、あれが初めてだったのではないだろうか。

「あの時初めて、本家で客としての接待を受けたり、お客様にお出しする料理を口にしたりして、自分の拙さが目に見えるように分かりました」

そのときはよっぽど悔しかったのだろうか、芽衣はより一層声を低くして顔を俯けた。

守も料理の味や接待の仕方の批評に自身があるわけではないが、本家のレベルが異常に高いことは分かる。下手をすると、世界有数の評価を得ている一条院家にも匹敵するレベルだと思う。

それも、本宅のメイド長を勤めてくれている芽衣の母親である、麻衣^{まい}さんのおかげである。あの人の、家事や接待の腕、人をまとめることに對する有能さは、世界でもトップクラスではないのだろうか。

もちろん、その娘である芽衣も、幼稚園のときから守と美香の専属メイドとして働いてくれていることから分かるように、メイドとしては相当のものだと思う。しかし、麻衣さんの腕に及んでいないのも事実だ。

しばらくすると、芽衣が顔を上げて、胸の前で両手を握ってから口を開いた。

「そこで、わたくしは修行の旅に出ることを決意したのです」

芽衣は、堂々と発言した。

それにしても、この時代に修行の旅なんて発想をする人がいることが驚きだ。基本しつかりものの芽衣だが、どこか抜けている事も分かっているの、今更驚きはしないが。

「それで、何か収穫はあったのか？」

芽衣がそんな言葉を欲しがっているようだったので、望みの通りに話を振る。

「はい」

守の予想は当たっていたようで、芽衣は嬉しそうに口を開いた。

「特に、護衛術の分野で大きく得るものがありました」

「何で護衛術!？」

「守様のお父様に許可を取っていたとはいえ、4年間も家を空けてしまい申し訳ありませんでした。今日から、その分を取り返せるように、修行の成果を発揮してがんばりますので、不束者ですがよろしく願います」

「……よろしく頼む」

仮にも主人の言葉を、何も無かったかのようにスルーしてきた。

あと、その挨拶は明らかにおかしい。

にしても、あの父親はどこまで子供に必要な事項を話さないんだろうか。芽衣が行方不明になったとき、ほっとけばいい、と言うから怪しいとは思っていたが。

「あのさ」

「ん、どうした？」

芽衣の話が終わったところで、向かいに座っている美紗子から声がかかった。

「まさかあんた、また同居人数を増やす気？」

「増やすも何も、うちで雇ってる使用人なんだから、うちにおくのは当たり前だろ。住み込み契約だし」

「たしかにそうだけど、仮にも同年代の異性なのよ？」

美紗子の言い分も分からないでもないが、使用人に対してその理屈が通じるか、といったらまた別の話だと思う。

それを伝えてはみるが、美紗子は一切納得する様子が無く、何度も反論をぶつけてくる。

どう説得しようか、と考えていたところ、リビングの入り口から高い攻撃的な声が聞こえてきたので、一斉にそちらを向く。

「美紗子、守の主張が明らかに正しいですわよ」

そこには、いつの間立っていたのか、学ラン姿の奈緒が立って

いた。

「それじゃあ、あたしの家事とかの手伝いはどうなるのよ？」

「芽衣と俺で何とかなるし、やらなくて大丈夫だぞ」

考えてみたら客に仕事をさせるのはおかしいし、と軽く笑いながら付け足す。

そうしているうちに、奈緒に頼まれた芽衣が、奈緒の分の朝食をよそってから、食卓に並べる。

「守様、わたくしが全て1人で受け持ちますよ」

などと芽衣は言ってくれるが、6人……芽衣を含めると7人分の家事を受け持つ大変さは十分に自覚しているつもりなので、手伝ったほうがいいだろう。

「……もう、知らないわよ」

「は？」

芽衣と会話をしていると、突然美紗子が、何かを呟いた。

「後から手伝ってくれなんて言われても、絶対手伝ってやらないんだから！」

美紗子は、それだけ言い残し、階段を駆け上がっていった。

——その日1日、守は学校で美紗子と話すことはなかった。

「ちょっと、美紗子。どうしましたの？ 人を殺せるような目つきをして」

「別に。何でもないわよ」

ちようと入浴を終えた奈緒に声をかけられたが、美紗子はぶっきらぼうに答えた。

しかし、奈緒も返事を聞く気がないようで、美紗子が答える前に、台所の方へ向かっている。

「もう、なんで……」

美紗子は非常にイライラしていた。ともかくイライラしていた。イライラの理由は分からないが、原因が守であることは間違いな

い。

そう思いながら、床に座って洗濯物を畳んでいる幼馴染へと目を向ける。

「どうやったら、そんなに早く畳めるんだ？」

「慣れれば誰でもこのぐらいい出来るようになりますよ」

幼馴染は、こちらのことなど気にもかけず、芽衣と談笑しながら洗濯物を畳んでいた。

美紗子は何となくその様子を眺める。

今日1日、美紗子は家事を手伝わせてもらうことは無かった。

特に家事が好きというわけではないし、しなくていいならしないほうが嬉しい。

しかし、昨日までやっていたことがいきなり無くなったためか、何だかスッキリしなかった。

それに、芽衣に笑いかけている守を見ると、何故か胸がもやもやする、というか——簡単にいうと、イライラしてくるのだ。

もともと、カラオケに行こう、という友達の誘いを、家事のために断ったのも大きいかもしれない。自分がいなくても大丈夫だと分かったのは割と早い時間だったので遅れて参加しても良かったのだが、何となく止めておいた。

それに——あの幼馴染は学校でも話しかけてこなかったのだ。

変な噂が流れるのも避けたいので、学校では必要以上に話をしないようにしているし、1日話さない位のことは無くもない。

だが、浩太や大樹と話すのはいつものことだからいいとしても、他の女子とは普通に話しているのだ。

目立ったものとしては、芽衣に身の回りの世話をしてもらっているときに妙にデレデレしていたし、奈緒が女子だと分かった途端、以前よりも奈緒に話しかけたりするようになった。

守と話したいなど思っているわけではないし、話していても疲れるだけなので逆に嬉しいくらいだ。

しかし、自分が憂鬱な気持ちになっていることから考えると、普

段守にこぼしている愚痴ぐちの捌はけ口が無いのが原因かもしれない。

どちらにしても、悪いのは守だ。家事に関しては、芽衣は雇われている身だし、守が芽衣の同居を許可しなければよかった話だ。学校でのことは、守が美紗子に話しかけてくれば問題なかったはずだ。原因をハッキリさせたところで、気持ちの蟠わだかまりが治る訳ではないので、どうしようかと考えていると、

「美紗子、隣よろしくて？」

「好きにしたら」

声が聞こえたので横を見ると、すでに奈緒が席に座っていた。

その手には牛乳の入ったグラスがあり、髪は湿ったままで、首にはタオルが巻かれている。服装は自分同様、部屋着だった。

奈緒を見ていると気分が悪くなるだけなので、視線の先を変えようと時計を見る。

「あ、もうこんな時間」

視線を守たちの方に戻しながら呟く。

時間は午後の10時前。

守はこれから勉強をするだろうが、自分は朝型だし、そろそろ寝ようかと考え始めたところで、

「ああ……それで、そんな目をしてたんですね」

「それって何よ？」

自分の隣から、何かを含んだような声が聞こえたので振り返る。

「何でもありませんわ」

奈緒は頬杖をついてこちらに視線を送ってくる。

「あたくしはこれから守と勉強を致しますけど、美紗子は何もすることありませんものね」

「何よ？」

奈緒の言っていることは分からないが、何となくムカついたので、美紗子は睨み返した。

しかし、美紗子は相変わらず何かを含んだような視線を向けながら、牛乳に口を付けた。

「やっと終わったな」

「はい。ありがとうございました」

振り返ると、洗濯物を畳み終えた守が立ち上がり伸びをしている。美紗子も自室に向かうために立ち上がろうとしたところで、隣を人影が通った。

「守。伸びなんてしてないで、さっさと勉強を始めますわよ！」
「おう」

止まりもせず呼びかけられた奈緒の声に、守は返事をしながら奈緒の後を追う。

美紗子は改めて立ち上がろうとしたときに、ふとあることを思いついた。

体調を崩す心配が多少あるが、高校生にもなればさすがに大丈夫だろう。それに、他にはチャンスが無いはずだ。

「うん。それしかないわね」

美紗子は気合を入れてから席を立ち上がると、その考えを実行に移すべく、水分補給の後、階段へと足を踏み出した。

「この問題なんだが……」

「分かりましたわ」

部屋に入って間もなく、守は鞆の中から紙の束を取り出すと、奈緒に渡す。

奈緒はそれを受け取ると、問題を読んだ後——そのまま動かない。

「もしかしてお前、わからなかったり——」

「ははは……何を言ってるんですの？ イギリスからの留学生であるあたくしがこの程度の問題で……」

奈緒が明らかな作り笑いで、妙にぎこちなく返事をした。

絶対分かってないよな、と思いながら守が見ていると、奈緒は顔を明るくしてプリントを差し出して、

「こんな問題、解けなくてもさして問題はありせんわ」

「んなわけあるか！」

「そうよ！」

何事も無かったかのように終わらせようとした奈緒に突っ込みを入れる——と同時に、聞こえてきた賛同の声に違和感を覚え、そちらを見る。

「美紗子!？」

「ちょっと見せてみなさい」

「おう」

美紗子があまりにも一方的な態度だったため、守は美紗子に色々聞く前に、手に持ったプリントを手渡す。

「ここは、Mike studied hard so as to pass the entrance exam. が答えて、in order to を so as to pass にするだけだから——」

美紗子は一瞬考えたただけですぐに答えを導き出し、解説も付け加えてくれる。

さすが学年上位の成績だけあって、説明が分かりやすい。慣れているせいもあるかもしれないが、守が分からないところをピンポイントに説明してくれていて、1回の説明で問題なく理解することが出来た。

「——にしても、なんでイギリスに住んでたのに英語の問題が解けないのよ」

「別に、こんな問題が解けなくても英語で会話くらい出来ますわ。」

第一、日本の英語は的外れすぎなだけですの！」

1通り解説を終えた美紗子が、奈緒をバカにするように質問を投げる。奈緒もそれに対抗するように答える。

「そういうなら、あなた、海外に行って英語を話せる自身がありますの?」

「無いわよ。話せる必要ないし。それに、あんたがこの問題を分かんかった事実は変わないし」

「――ッ」

何でこの2人が一緒にいると、すぐに喧嘩に発展するのだろうか。昔からそうだったから直せと言う方が無理かもしれないが、直してくれるとありがたい。喧嘩するほど仲がいい、って言葉があるし、この喧嘩は中が悪いわけではないようだが……それでも、守としては迷惑なことはかわらない。

余談だが、奈緒曰く、英語圏ではこのような言い換え問題(?)など出題されるはずも無く、本場のイギリス人にやらせても解けない可能性は充分あるらしい。逆に美紗子の言葉通り、いくら日本で英語の成績がよくても、海外に行くと英語が使い物にならないことも珍しくない。これは、英語と英会話が別々にあるのと同じ話で、前者が英会話、後者が英語(学?)にあたるらしい。

これ以上発展して殴り合いになってもかなわないので、守は場の雰囲気を変えるべく話題を切り出した。

「そういえば、美紗子は何でこの部屋に来たんだ?」

「あたしも守の勉強を見るためよ」

「お前、早く寝なくて大丈夫なのか?」

「大丈夫よ。あたしをいくつだと思ってるの?」

奈緒は勉強が出来ることには変わらないが、正直教え方が分かりにくい。それ故、美紗子もいてくれた方がありがたいのだが……美紗子は基本的に朝型だ。つまり、朝早く起きる分には何ら問題ないのだが、夜は早く寝ないと体調を崩しやすい。小学校のころは寝不足が原因で何度も熱を出したりしている。

しかし、それも小学校のときの話。人は成長するものだし、本人が大丈夫と言っているんだから大丈夫なんだろう。

守はそう判断し、美紗子に返事を返そうとして、

「素直じゃありませんわね。夜が怖くて守に手を握っててもらわないと寝付けないなら、素直にそういえばよろしいのに」

「そんなことあるわけ無いじゃない。あんただって、熊のぬいぐるみを抱いてないと寝れないくせに」

「それはここでは関係ないでしょう!」

再び美紗子と奈緒は言い合いを始めた。

それにしても、何でこんな短時間で再び言い合いが始まるのだろうか。

このまま待っていても喧嘩が激しくなる一方なので、守は喧嘩を止めるべく再び話題を変える。

「とりあえず、生物の宿題から見てもらいたいんだが……」

守は鞆から生物のテキストを取り出しながら、わざとハッキリと大きな声をかける。

すると2人は言い合いをやめ、守を挟み込むような形で立った。

美紗子が右側、奈緒が左側だ。

わずかに感じる甘い香りが鼻腔をくすぐる中、守は問題を解き進めていく。

内容が中学の復習ということもあり、しばらくは守が自力で解ける問題だった。

最初のページが終わり、次のページへと移る。

1問目を見ると『魚類の生殖方法を答えよ』という問題だったのだ、

「ええと……」

1度頭の中で文章をまとめた後、回答をテキストに書き込む。

そのまま、2問目に目を向けると『人間の母親が子供を産むまでの過程を答えよ』と言う問題だった。

学校の教師が作った問題のためか、少し問題文が変な気がするが、回答は問題なく分かるので、先ほどと同じく文章をまとめるべく悩みながら視線を横にやると……ベットが目に入る。

あそこで子宮に入った精子が卵とくっついて……って、あれ?

その前の手順も書いた方が良さそうか……さすがにそれはまずいだろう。

しかし、子供を産むまでの過程って書いてあるし。

……だからといって、学校の問題でそんなところまで書かせるの

だろうか。

でも、生殖の仕組みでは無く、産むまでの過程って明記されてるし。あの生物教師なら「保健体育の内容も含めて」とか言いかけない。

仮にそれが間違いで、浩太あたりに見つかったら、どんな噂が学校に流れるか……。

とはいえ、ただでさえ成績が言い訳ではないので、出来るだけ正答率を上げておきたいのは事実だし……。

頭の中を整理するため、再び周りを見回して……：……またもベットが目に入る。それと一緒に、乾ききっていない入浴後の奈緒の黒髪が目に入ってきて……：……その2つが頭の中で結びつき、脳が勝手に桃色の想像を始める――前に今とは逆に視線を向ける。

すると、今度は同じく入浴後の美紗子の髪と胸が目に入って、それがさっきのベットとつながって……。

1人で考えていても思考が変な方向に飛んでいくだけなので、美紗子と奈緒に質問すべく口を開く。

「あのさ、この問題なんだけど――」

「生物の説明なら得意よ!」

「今度はしっかりと解説してみせますわ!」

話している途中で2人が身を乗り出して来た。そのときに強くなった香りのため、守は言葉を飲み込んでしまった。

しかし、何で女子ってこんなにいい香りがするんだろうか。

髪の毛を乾かしてある美紗子からは、柔らかくて暖かい香り。まだ髪が湿っている奈緒からは、シャンプーの柑橘系の香りがする。

それは、思っていた以上に男性本能を刺激するもので、今まであった嫌なことなんて何もかも忘れられそうだ。

守が乙女の香りに浸っている間にも、問題を読んでいる2人の顔が見る見るうちに赤くなっていく。

「……まさかあんた……：……これをあたしに説明しろと……：……」

「……こんなことを乙女に質問するなんて……：……」

2人がつぶやきながら守のほうを見る。

あまりよろしくない空気を感じ取った守は、2人の言葉から状況の推測に勤める。

守が質問したのは『人間の母親が子供を産むまでの過程を答えよ』と言う問題で、それを普通に受精の方法を書けばいいのかと聞こうとした。

しかし、それを途中までしか言えず、2人はその問題の答えを出すのではなく、解説しようと張り切っていたのであって……

守は1つの答えを導き出し、即座に弁明すべく口を開く。

「いや、俺が聞きたいのは、普通に答えればいいのかだけで——」

「誰があんたにこんな説明するか、このド変態!!」

「守、最低ですわ!!」

顔面に美紗子のストレート、後頭部に奈緒の回し蹴りが同時に炸裂する。

2つを同時に受けた時の痛みは、普段の片方ずつの痛みとは比べ物にならなかった。

まだ鈍い痛みが残っていたが、守はそれを振り切るように思いっきり叫んだ。

「俺は普通に答えればいいのかを聞いたただけだ!!」

「それなら——」

「——普通に書けばよろしいでしょう」

守が叫ぶと、2人は何も無かったように平然と答える。

多少ボヤつとしたピントを合わせながら、テキストに答えを書き込んだ。

しかし、このやりきれなさは何だろうか。2人の勘違いで蹴られた上に、謝罪すら無しとは。

その後も勉強会は続き……何とか宿題が終わったのは普段よりも2時間ほど遅い午前2時だった。

だが、悲劇はこれだけでは終わらず、この後何日も、守は勉強会という名の地獄に足を踏み入れなければならなかった。

「どうやったらそんな風に出来るんだ？」

隣で、チャーハンをテレビでしか見たことの無いような動きで炒めている芽衣に声をかける。

「慣れれば簡単ですよ。守様もやってみますか？」

芽衣は一旦コンロの火を止めて、こちらを向く。

「それじゃあ、お願いしていいか？」

「はい」

なかなか出来る体験ではないので挑戦の意志を示すと、芽衣は快くうなずいてくれた。

「それでは、こちらに立ってください」

「おう」

芽衣の案内に従ってコンロの前に立ち、鍋とお玉を握る。

「それでは失礼しますね」

そう言うのと、芽衣は守の持ち方に合わせるように右手、胴体、左手とかぶせていく。

すると、背中には自然と弾力のあるものがぶつかるわけで……その他にも、素肌が触れているところから温かな芽衣の体温が伝わってくる。

その温かさは、普段は使用人として接しているので忘れがちな、芽衣が同級生と言うことを強く意識させる。

時々腕に触れる髪もしっかりと手入れが良き通っていて、目の前で宙を舞うチャーハンよりも、体を感じる温もりにどうしても意識がいってしまっ——

「守様、終わりましたよ」

「あ、ああ」

いつの間にかチャーハンが完成したようで、調理が終わっても動かなかった守は、芽衣の声でわれに帰った。

「えっと、チャーハン冷めちゃうともったいないし、みんなを起こ

してくるよ」

「？ はい、お願いします」

恥ずかしくなり、その場から走り去る守に芽衣は少し間を空けてから返事をした。

階段に入り、歩調を緩めながら時計を見ると、朝の6時20分。調理終了の時間としては遅いが、普段なら美紗子は起きているはずの時間だ。

その他はいつもより少し早い、今日は奈緒（尚）、早知、芽衣の歓迎会なので（2年組だけだが……）身だしなみの手入れにも時間を使いただろうから、早めに起こしても良いだろうと思い2階へと踏み入れる。

そのまま、1番近くにある美紗子の部屋のドアを開けた。

「美紗子、朝だぞ」

「……守、おはよう……」

ベットで寝ているものだと思ひ声をかけると、予想に反して美紗子はベットに腰掛けていた。

寝起きのせいか、普段よりも顔が赤い気がする。目もトロトロとして、妙に色っぽい。話し方もゆるい感じで、あえて表現するなら……そう、酔っ払ってるような雰囲気だ。

「……守、なんか頭がねえ……」

美紗子はベットから立ち上がると、いつもより舌足らずな話し方で声を出しながら、歩いてくる。

その歩みはとも高校生のものとは思えなくて、右に左にと揺れながらの覚束ない歩行だった。

「美紗子？」

しかし、守は状況がつかめていないのと、普段では考えられない色っぽさのせいで美紗子に見とれてしまったので、その場に立ち尽くしていた。

「……守」

しばらくして守の前に到着した美紗子が、突然倒れ掛かってきた。

「おい！」

守は反射的に抱きとめる。その体は信じられないほど熱を持っていて、おでこで体温を調べてみると――40度近くはいつているような感じだった。

接してみると、息の仕方も不安定で、両足で直立が出来ないらしい。

「守……」

「どうした？」

あまりにもか細い美紗子の声を聞き取ろうと、守は耳を口元に寄せながらも、出来るだけハッキリした声で美紗子に呼びかける。

すると、美紗子が最後の力を振り絞るかのように、ゆっくりとゆっくりと、その震える唇を開いていく。

「……なんか、頭が、い……た………い……」

「美紗子？ 美紗子！？」

美紗子はそのままで言い切ると、安心したかのように守に身を任せた。

7章くあたくしに、廊下で着替えろと申しますの!?

「――というわけだ」

美紗子の様態を簡単に話した後、改めて周りを見る。いつものように守の机を取り囲んでいる浩太、大樹、奈緒（尚）が目に入る。

それにしても、今日は朝から色々大変だった。

美紗子が倒れ込んだ後、急いで芽衣を呼んで診察してもらったところ、風邪をこじらせただけ、ということだったので、とりあえず、救急箱に入っている薬を飲ませて寝かしつけた。

そして、朝食後にもう一度顔を出すと、話が出来る程度までは回復した様子だったので、自宅への帰宅か両親を呼ぶことを勧めたのだが、美紗子は何故かそれを拒んだ。

美紗子の風邪の原因は、十中八九自分の勉強に深夜まで付き合わせたことなので、守が残ろうかとも考えたのだが……そんな理由で学校を休むわけにもいかないし、それが原因で駆け落ちしたのだのど根も葉もない噂が流れても困るので、その考えは却下。病人を一人で残すことは少し不安だったが、高校生だから大丈夫だと判断し、美紗子に1人で家で休むように指示したところで、芽衣が自分が残ると言い出したのだ。

勿論そんな事をさせるわけにはいかないので、15分ほど説得したのだが……結局、説得が通じず、みんなに協力してもらい、学校まで力づくでつれて来るはめになった。

付け加えると、芽衣は護衛術などを身につけている関係か、女子にしては力が強かったため、未だに体に疲労が残っている。

当の芽衣は次の授業のために、更衣室で着替えをしているだろう。

「本当に今朝は大変だったよな、美紗子」

「馬鹿、美紗子は今日は学校に来てないだろう」

いつもの癖で美紗子の名前を出してしまったのを、何故か機嫌の悪そうに腕を組んでいる尚に突っ込まれた。

奈緒も自分と同じように芽衣を運んできたはずなのに、いつさいの疲れを見せないあたり、体力があるんだな、とついつい感心してしまう。

「相変わらずラブラブな夫婦だな」

浩太がニヤニヤした顔でおちよくって来たが、面倒くさいので無視をしておく。

「それにしても美紗子さんが風邪なんて珍しいよな」

「あ……まあな」

大樹が、いつもよりも落ち着いた声で、そんなことを口にする。少なくとも、風邪の原因を言えるような雰囲気ではなかった。

たしかに、考えてみると美紗子が風邪で学校を欠席するのは小学校のとき以来だ。それを思うと、美紗子に風邪を引かせてしまったことへの罪悪感がより強くなってきた。

「あ……と、そろそろ着替え始めないとまずくないか？」

とりあえず話題を逸らそうと、適当に口に出してから壁に掛かった時計に目を向ける。すると、運良く授業開始の5分前だった。今日の1時間目は体育のため、周りではすでに何人かの男子が着替えを始めている。

「まあ、そうだな。それじゃ」

という浩太の声を筆頭に、大樹、尚が一言づつ言い残し、それぞれ席に戻っていった。

「ふう」

数分後、守は自分が着替え終わったので、貴重品類を取り出して、一緒に行くためにいつものメンバーに声をかけようと周りを見渡した。

すると、すでに着替えを終えていた浩太と大樹と――何故か顔を真っ青にして、着替えもせずに立ち尽くす尚が目に入る。

守はその様子を見て、何をやってるのかな、と不思議に思いなが

ら近づいた。

「尚、な～お」

とりあえず声をかけてみたが、いっさい反応がない。ためしに、尚の視界に入るように右手を振ってみるが、やはり反応はない。

「おい！」

「――!?」

守がしびれを切らして肩をゆすると、ようやく尚に反応が見られた。

「お前、大丈夫か？」

「……何がだ？」

一応、様態を確かめる質問を試みたが、答える尚は本気で何のことを聞いているのか分かっていない様子だった。

あれだけの顔をしていたのに本人が自覚していないはずはないので、熱か何かかと思い、おでこ同士で熱を計ろうとすると、

「――きゃっ」

という、素の声を出して、すごいスピードで後退した。

そういえば、こいつはこういうのだめだったよな、と奈緒の留学初日のことを思い出す。

でも、何故だろうか。一番有力なのは男子と女子だから、という説だ。実際、こちらも他意はなくても女子とわかっている今は、こんな綺麗な相手と顔を近づけるのはどきどきするし。しかし、自分が風邪を引いたときには、美紗子や美香もこうやって熱を計ってくれるので変なことは無いはずだ。

いくら悩んでも答えは出そうにないし、熱を出している訳でもなさそうなので、どうしようか、と悩んでいたところ、先ほどの回想の中に答えらしき物を見つけて――

「尚、ちょっと来い！」

守は、それだけ声をかけると、机におかれた奈緒の体操着と尚の腕をつかんで廊下へと走り出した。

「ちょっと、いきなり何をしますの？」

廊下に出るなり、周りに人がいないのを確認すると、いつもの口調に戻って文句を言い出した。

他の人に聞かれないようにするためか、声を低めて声量を落としている。

「何って……」

守も奈緒に合わせた声で返答しかけて――言葉を飲み込んだ。

理由は、女子にとってあまり触れられたくない話題だろうから単刀直入に話していいのか迷ったためだが、いい言い方も思いつかない上、時間もないので、そのまま話すことにした。おそらく、奈緒相手だから大丈夫だろうし。

「お前、男子の前で着替えられなくて困ってただろ」

「――!？」

話し終えたとたん、奈緒は信じられない者を見たような目で無言で後ずさる。

よし、反応を見る限り正解のようだ。

「で――」

「それが、どうしましたの？」

そのまま話を続けようとしたのに、何故か奈緒が腕を組んで聞き返してきた。

その目が、『文句ありますの?』と訴えているようで、思わず数歩後退してしまう。

「だから……」

「ま、まさかっ――」

その視線に負けないように何とか話を切りだしたが、何を思ったのか奈緒が何かを呟いてから一瞬、口を噤み――

「あたくしに、廊下で着替えろと申しますの!？」

「んなことするか!」

奈緒の予想もしていなかった言葉に大声で突っ込んでしまった。

気づかれてないか周りを見渡すと、ちょうど階段を下りようとしていた数人の男子が、何かを囁きながらこちらを見ているのが目に入って、恥ずかしくなり早々に口を開く。

「だから……とりあえず男子トイレで着替えてこい」

まあ、女子に男子トイレで着替えさせるのは酷だが、他に方法がない。授業数の多いほかの授業ならともかく、どちらかというと少なめである体育は休むと単位を落とすことになりかねないし。

しかし、奈緒としては納得いかない提案のようで、無然とした顔をしている。

「あたくしがトイレで着替えなんて、そんなはしたないことするわけないでしょう」

「だったら教室で男子に見られてる中で着替えるか!？」

「やはりそれが目的でしたのね、この変態!」

頭に血が上ってきてついつい言ってしまった言葉に、蹴りが来るかと身構えたが、いつまで経っても飛んでこなかった。

もしかして、こいつは自分が理不尽なことだと分かって言ってるんじゃないだろうか。まあ、周りを気にして目立つことはしないようにしているだけかもしれないけど。

そろそろ時間もなくなってきた頃だろうし、とりあえずトイレに行かせようと守が口を開こうとしたところで、

「いいですよ、この前みたいに見学にすればいいだけですし」

奈緒が、何でこんなことを言わなきゃならないんだ、とでもいうような顔でつぶやいた。

それに対し、単位のことなども含め、体育は他と比べて欠席が多いとまずいことを話す。

奈緒は口を出さずそれを素直に聞き終えた後、ようやく納得した様子になった。

「それでは、仕方がないですし個室で着替えてきますわ」

「ああ」

意地でもトイレと言わないあたりが奈緒のプライドなのかな、と

思い見送ろうとしたときにある疑問が頭に浮かんだので、奈緒を呼び止める。

すると、奈緒もその声に気付いて歩みを止めて、再びこちらに向いた。

「お前って、今まで体育があった日ってどうしてたんだ？」

奈緒が留学してきてから今日まで、初日以外にも何回は体育があった。にもかかわらず、奈緒は初日を除いて全ての授業に参加していたのだ。もちろん体操着で。

守が回答を待っていると、奈緒がいつもの落ち着いた様子で胸の前で腕を組み、堂々と口を開いた。

「そんなの、うちから体操着を着てきて、着て帰れば問題のないことですわ」

奈緒の放った言葉に、守は妙に納得して首を縦に振る。考えれば簡単に思いつきそうなことなのに、何で出てこなかったんだろうか。そう考えているうちにその理由が分かったので、特に何も考えず素直に口に出す。

「お前、それって中が蒸れたり、汗臭くなったりとかしなげばふっ！」

「お黙りなさい！」

奈緒はきれいに回し蹴りを決めた後、妙に清々しい様子で男子トイレへと向かっていった。

帰りのSHRショートが終わり担任の佳奈子が教室から出て行くと、クラス委員である大樹がプリントを配ってから転校生（尚・早知・芽衣）の歓迎会についての概要を説明していた。もちろん、もう1人のクラス委員である美紗子の姿は無い。

守はその様子を、なんとなく眺めていた。

1週間前にこの企画が持ち上がったときには、幼馴染たちをクラスに馴染ませようとしてくれるクラスメイトの気持ちは嬉しかった

し、今でもそう思っている。また、自分が参加することが嫌だったわけでもなく、むしろこの日を楽しみにしていたくらいだ。

なのに何か心の中にあって、説明の内容が頭に入っていない。何とか頭に入れようと、手元にあるプリントに目を落とす。

内容はボーリングを2ゲームほどやった後、カラオケに行くという高校生の王道ルートらしい。

詳しい時間は記されていないが、帰りは早くても7時頃になるだろう。美香や涼子が帰ってくるとはいえ、今日は用事があると言っていたので、少なくとも6時ごろまで美紗子を1人しておくことになるそうだ。

でも美紗子もう高校生だし、それくらいは大丈夫だと思う。

そう思って、歓迎会のことを考えても何故か頭がもやもやしてくる。

「……様、守様、大丈夫ですか」

「……？」

突然呼びかけられた声に顔を上げると、そこには制服に身を包んだ芽衣の姿があった。

周りを見渡してみると、既に説明が終わったらしく話しながら教室から出て行く人影も見受けられた。

「そろそろ、わたくし達も出た方がよろしいかと――」

「ああ、行こう」

守は芽衣の言葉を遮るようにそう言うと、自分の鞆と芽衣の腕をつかんで、いつものメンバーが集まっている方へと走る。

特に急ぐ理由は無かったが、何かが守を急かした。

そして、合流してから階段を通して、雑談しながら下駄箱へと向かう。

その様子を、守は一步後ろから見ている。

「はあ……美紗子さんの歌、楽しみにしてたのに残念だな」

下駄箱についたとき、不意に大樹がつぶやいた。

靴を履きながら地面に向けてつぶやいたあたり、大樹としては心

の声が漏れてしまったんだろう。

相変わらず大樹は美紗子に熱心だな、と、普段ならそんなことを思っていただろう。

しかし、今は何故かその言葉は守の心に重くのしかかった。

理由は分からない……のではないだろう。客観的に見れば一目瞭然だ。美紗子が原因としか考えようがない。

それが今まで思いつかなかったのは何故だろうか。自分のことで、守自身が歓迎会を思いつき切り楽しめないと美紗子がつらい思いをするから？

いや、それは違う……と思う。確かに、美紗子は自分のことを気にかけられて、守が歓迎会を楽しめなかったらいい思いをしないだろう。でも、それは守が美紗子のことから逃れようとするための言い訳で、理由を思いつかなかった原因ではない。

それが分かってしまった限り逃げるわけには行かないな、と心に言い聞かせ、隣にいた人影を見る。すると、尚が何故かしか顰めっ面をしていた。

「尚、歓迎会に出ずに家に戻るからよろしく頼む」

「守様、どこか具合の悪いところでもございますか？」

尚に話しかけたのだが、返ってきた返事は芽衣のものだった。

「いや、そうじゃなくて……」

「どうせ、寝込んでる正妻のことが気掛かりで仕方ないんだろ」

上手く言えずにあたふたしていると、こちらの気を察して浩太が補足してくれた。言い方は相変わらずだが、こういう時は言いたいことを分かってくれるので助かる。

「それでしたら、わたくしが……」

「いや、お前は歓迎会に行け」

「しかし――」

「主役がいないと、どうしようもないだろう」

「でも……」

守は何とか芽衣を説得しようと試みるが、芽衣も相変わらず頑固

でなかなか聞き入れてくれる様子もない。

「だから、お前がいないと、金棒のない鬼というか、木から落ちない猿というか……」

「それは、その状態が普通ではないのでしょうか……ともかく、わたくしが美紗子様のところに――」

「岩井、行かせてやれ」

浩太が、芽衣の肩をつかみ呼びかけた。

「鈴木様―――気軽に触れないでください。セクハラで訴えて差し上げましょうか？」

「肩に触れただけで!？」

芽衣は笑顔で受け答えたが、明らかに目が笑ってないぞ。まあ、どさくさに紛れて素肌に触れようとした、浩太の自業自得だが。

しばらくして浩太が落ち着いた後、芽衣は真面目な表情になって、こちらに向き直った。

「守様、薬はリビングのいつもの棚に入っております。また、食材は冷蔵庫に入っておりますので。また、綺麗なタオルは――」

「芽衣、大丈夫だから。ありがとな」

このまま続けさせると、終わりが見えなさそうなので、あえて言葉が被せた。

「それじゃあ、よろしく頼む」

それだけを残し、背中を向けようとする、

「……守様。何かございましたら連絡いただければ、すぐに駆けつけますので」

「……マー君、看病頑張ってね」

「2人だけだからって、羽目を外すなよ」

「美紗子さんによろしく伝えてくれ」

各々、応援の言葉をかけてくれた。浩太は相変わらずだが……。

「ありがとう。それじゃ」

みんなの気持ちに答えるように、笑顔で返事を返してから、校門に向けて走り―――出してから数秒後、突然学ランの袖を掴まれた。

「おい、誰だ――」

転びそうになりながらも後ろを向くと、顔をうつむけた尚がたっていた。

「守……」

奈緒の出した声はいつもの様子とは違い、はっきりしない声だった。

「どうしたんだ？」

と、声をかけると、奈緒は意を決してこちらに目を向ける。

「2人だからって、変なことをしたら許しませんわよ」

「んなこと、しないって」

口調はいつもの高圧的なものだったが、その声にあまりに勢いがなくて、つい突っ込みも静かになってしまう。

「あと……」

「どうした？」

続く奈緒の言葉も、いつもの勢いが無い。

奈緒は、しばらく黙っていた後、意を決したようにこちらに目を向けてくる。

「今度、一緒に遊びに行く。それで許して差し上げますわ」

その言葉を聞き、守は奈緒の心理を理解した。

同居している、といっても、これまで忙しかったせいで、奈緒が日本に戻ってから、ゆっくり遊ぶ時間を取れていなかった。それ故、奈緒は今日を楽しみにしていたし、守も一緒に参加して欲しかったのだろう。

でも、守は歓迎会に参加するわけにはいかない。

そうになると、守の返事は自然と決まった。

「そうだな。今度、一緒にどこか遊びに行くか。もちろん美紗子も一緒に」

「……ったく、相変わらずですわね」

「は？」

奈緒は一瞬、安堵の顔を見せたかと思うと、いつものように胸の

前で腕を組んで、軽い哀れみの視線を向けてきた。

にしても、何かいけないことを言っただろうか。相変わらず、乙女心は分からないものである。

「早くお行きなさい」

「ああ」

今度の声はいつも通り、覇気のある声に戻っていたが、守はそれに驚いて、なかなか足が動かない。

「いいから早く!!」

「おう。ありがとな!」

奈緒の力強い言葉に、守は家へと駆け出した。

物静かな空間に、階段を上る音だけが響き渡る。

守は、そんな我が家に少し寂しさを覚えた。

美香と2人で暮らしていたときは、普通のことだったのに、今はそんな風には思えない。家に帰ればいつでも誰かがいるし、寝静まった時を除いて萩本家の姦しさが止むことはない。それが今の萩本家の日常だ。

その変化もここ1週間ほどで起こったことなのに、遠い昔のことに思えてくるから不思議なものである。

守が家に帰ると、事前に聞かされていたとおり、涼子や美香達はまだ帰っていないかった。そのまま中へ入ると、美紗子も起きてきていないようだった。手を洗った後、出来るだけ静かに自分の部屋に向かい、着替えなどをすませた。

その後、お茶を飲もうと台所に向かった。着いてみると、台所は今朝使用したままの状態から変わってなかった。美紗子が昼すら食べていないと判断した守は、お粥を作ることにした。

それを終えた今、守は手に持ったお粥に気を配りながら、埃の一切無い手入れの行き届いた階段上り終え、美紗子の部屋の前にたっていた。

寝返りを打つ音だろうか。部屋の中からは、布が擦れるような小さな音が聞こえてくる。

守は手に持ったお粥を床へと置き、ドアをノックしようとして右手を上げ――その手を元に戻す。寝ている美紗子を起こしてしまう可能性に気づいたためだ。もし本当に寝ていたら、作ったお粥が無駄になってしまうが、やってしまったことを後から悔いても仕方がないので、深くは考えない。

どうせ美紗子はベッドで横になっているだろうし、ノックをしなくても特に問題無いだろう、と思いドアを開け――

「……」

「……」

予想もしていなかった光景を前に、美紗子と見つめ合う形になった。

美紗子にとっても突然のことだったらしく、お互い動くことも出来ずにいる。

その部屋だけ時間が止まったような錯覚に陥るほど静かな空間に、心地よい春風が吹き込んだ。

部屋の中にいた美紗子は、恐らく着替え途中だったんだろう。その身には白と水色のストライプの下着と、同じ色のチェックのブラしか身にまとい、おらず、手は胸の前で左右を重ねてあり、その中には脱いだばかりであろうパジャマがある。

そんな殆ど生まれたばかりの姿であるが故、守の視線は自然に下の方へと流れていく。

胸はやはり程よく育っているが、服の上から見ると時よりも大きく感じられて、改めて美紗子が異性だということを強く意識させられる。

そして、胸とは正反対のくびれ。奈緒の様に胸との大胆な段差がないが、逆にそれが胸や腰と組み合わせ、程よいバランスのとれた美しさを作り出している。

腰も奈緒程ではないにしろ、ぷくっという感じに膨れている。

見えている肌は傷一つなく、とても綺麗で、各部位も女性的な暖かさを持っている。

そんな幼馴染を前にすると、やはり相手が異性であることが感じられて、その美しさと相まって、緊張と見とれてしまうので、先程よりも体が動きそうになくなる。

何秒そうして見つめ合っていただろうか。

その沈黙を打ち破るように再び吹いた春風が、さっきよりも強かったらしく、机の上にあった1枚のプリントを吹き飛ばした。

それを合図にしたかのように、美紗子の顔がリングのように真っ赤になるのを確認し――

「――%#&☆*%☆」

美紗子の聞き取れない叫びが聞こえ、守の視界が突然に真っ暗になる。

それと同時に心地よい温もりと、心安らぐ香りが顔を覆っているのを自覚したが――守は本能的に身の危険を感じ、急いで部屋を出た後、右手に持っていたドアの取っ手を握りしめ、勢いよくドアを閉める。

その直後――

「出てけ、このド変態!!」

そんな叫び声と共に、ドン、と鈍い音がドアからするのを聞いて、守は安堵の息をもらした。

その時に吸った空気から、守は自分の顔についている物の正体をふと疑問に思い、それをはぎ取ってみる。

するとそこには、ピンクを主体とした服――美紗子がさっきまで着ていたパジャマ――が握られていて、守は自分の顔が赤くなるのを感じた。

数分後、美紗子の部屋の中からあわただしく聞こえていた物音が聞こえなくなったのを確認して、守はお粥を手には握りしめた。

「美紗子、入っていいか？」

「勝手にすれば」

返事は相変わらずの返事だが、許可されたのだろうと判断し、一応「入るぞ」と声をかけてから、ドアを開ける。

中にはいると、美紗子はすでに普段着に着替え終えて、別途で横になっていた。

その美紗子と目が合ったとき、自然と頭の中に先程の美紗子の姿がリピートされてしまい――その恥ずかしさを振り払うように口を開く。

「えっと、調子はどうだ？」

「さっきので頭痛が酷くなったわ」

「……悪い」

先程の話題に触れられたことで、守の中に恥ずかしさと罪悪感が溢れ出てきて、思わず目を僅かにそらした。

本人はああ言っているが、少なくとも冗談が言えるぐらいには回復しているようだ。

そのまま立っているわけにもいかないので、座るために椅子を探すと、既にベッドの横に一つ置かれているのを見つけた。おそらく美紗子が用意してくれたものだろう。

「椅子、準備してくれてありがとうな」

「別に。あんたのためじゃないし」

守が礼を言いながら椅子に座ると、美紗子は寝返りを打って守から顔を背けた。

相変わらず素直じゃない幼馴染である。その様子を見て落ち着いている自分も自分だけだ。

それからしばらくの沈黙の後、美紗子がこちらに向き直った。

「あんた、何で帰ってきたのよ。歓迎会は？」

「早退してきた」

「何でそんなこと？」

「えっと……」

守は答えに悩んで口をつぐんだ。

特にいえない理由があるわけではないが、美紗子本人に、美紗子の看病をするために帰ってきた、なんて恥ずかしくてとても言えるような言葉じゃない。

なんとか話題を変えようと周囲を見渡すと、どこからか変な音が聞こえてくる。

「あ……」

その直後、美紗子がお腹に手を当てて顔を赤くする。

守はその様子を見て、自分の膝の上に置いた物を思い出した。

「そういや、お粥作ってきたんだけど食べるよな？　昼、食べてないみたいだし」

「うん。ありがとう」

やはり、よっぽどお腹が空いていたらしく、美紗子は珍しく素直に頷いた。

早速、食べさせてやろうと、守は一緒に持ってきた散蓮華ちりれんげで土鍋からお粥を掬う。

「ほら、早く口開けろ」

「いいわよ、それくらい自分でっ——」

手を伸ばそうとした美紗子だったが、手を引っ込めて自分の頭を抑えた。頭痛がしたのだろう。

守は軽く溜め息をつきながらも、散蓮華の下に手を添ながら、

「こういう時くらい俺を頼れって。ほら、その……あ、あーん」

「……あーん」

お粥を口に含むと、美紗子の顔が綻んだ。

守もそれを見て和んでいたが、自然にやってしまった先程のやり取りを思い出して、急に恥ずかしくなり美紗子から軽く目をそらす。それは、美紗子も同じだったようで、美紗子も顔を赤くしていく。

「ま、まあ、あんたにしては上手く出来てるんじゃないの」

「あ、ありがとう」

そんなやりとりを境に、再び会話が途切れた。

2人で暫く^{しほ}そうしていたが、段々と気まずい雰囲気になってきて、それを何とかしようと、守は散蓮華でお粥を掬って無言で美紗子の口へと運ぶ。直後、美紗子はそれを無言で口に入れる。

その後、守がお粥を掬って——と、そんなやり取りを繰り返しているうちに、器の中身が綺麗に無くなった。

「まあ、その……ごちそうさま」

「……おう。どうだ、足りたか？」

「うん。まあ」

しかし、未だに気まずい雰囲気は続いたままで、そんな短いやり取りの後、再び沈黙が訪れた。

そんな空気が続きそうになっていたが、守はそれを断ち切るように改めて美紗子に向き直った。それに対し、美紗子が目を逸らそうとしたが、その瞳をしっかりと覗き込むことでしつかりと視線を合わせさせる。

何秒間、それまでとは違う緊張した空気が流れたのを確認し、守は今日1日抱えていた疑問、というより文句をゆつくりと美紗子にぶつける。

「お前、何でこんなになるまで頑張ったんだよ。もう高校生なんだから、こうなる前に気づいてただろ？」

もちろん、夜の勉強会のことだ。手伝ってもらってる身である上、こんなになるまで気付かなかった自分が言えることではないが、普段の美紗子ならここまで無理はしないはずだ。立場や相手の状態を考えればもっと優しく問わなければならぬのに、強く美紗子を心配する思いから、ついつい責めるような言い方になってしまった。

その質問を聞いて、美紗子が機嫌悪そうに守と視線をずらし、

「……別に、あんたには関係ないでしょ！」

「関係くない！」

思わず自分の股を叩きながら言うと、美紗子は一瞬驚いたよう体を引く。だが、2、3秒後には体を乗り出してきた。

「何だよ？ どうせあんたは奈緒とか芽衣とかの方がいいんでしょ

？」

「そんなこと無い！」

「だったらなんで、学校で奈緒とか芽衣とかに良い顔してるのよ？」

「……は？」

ここ最近の高校でのことを思い出してみるが、特に思い当たる節は無い。まあ、美紗子との会話量が以前に比べて減っているのそのことを言っているのだろうか？

「だってあんた、芽衣に身の回りの世話をされてるとき妙にニヤニヤしてたじゃない」

「どこがだよ！ あれは、単に恥ずかしくて上手く返せなかっただけだ」

守は殆ど間をおかずに答える。

美紗子が言っているのは、言葉の通り芽衣が守の面倒を見ていることを言っているのだろう。守は頼んだ覚えは無いのだが、授業の教科書の準備や弁当の支度、服装のチェックなどを人目を気にせず、学校でやってくるものだから、周りからの視線の恥ずかしさのあまり、行動が挙動不審になっていたやつだ。それでも、この頃は慣れていたが。

「あと、奈緒とさっちゃんにばかり積極的に話しかけてるし」
予想すらしていなかった内容に、守は大きなため息をついてしま

う。
「仕方が無いだろ。さっちゃんはまだ人見知りするし、奈緒は状況が状況で、他とはあまり話させない方がいいわけだし」

話し終えて美紗子を見ると、先ほどまでに比べて表情に多少の余裕が出来たように感じる。

美紗子が、そんな風に捉えているとは知らなかった。まあ、どれも普通に考えれば簡単に答えが出そうなものに感じるが。

守が安心して少し肩の力を抜いていると、美紗子がもう一度真剣な表情になって口を開いた。

「じゃあ、何であたしには話しかけてこなかったのよ？」

「いや、それは単にお前のせいだろ」

この質問は、美紗子も自分が悪いのを自覚していたようで、言い返してこなかった。

ここ最近、美紗子との会話時間が減っていた主な原因は、美紗子が守を避けていた（んだと思う）からだ。今考えると、先ほど美紗子がぶつけてきたような不安、というか不満があったからこそ変な溝が出来てしまったことが原因なんだろうけど。

「ってか、お前、そんなことで悩んでたのか」

何となくいつものやりやすい雰囲気になってきたので、ついつい口からこぼれてしまった。

「別に、ただ単に奈緒とかにあんたの隣を取られるのが気に入らなかっただけよ」

美紗子は顔を背けながら否定するつもりで言ったのだろうが、言っていることは実質変わっていないかった。というか……さらに恥ずかしい内容になってる気がする。これも幼馴染同士だから言えることなんだろうな。

「そっか。俺と同じだったんだな」

「へ？」

安心したというか、気持ちが楽になってきて、思ったことをそのまま口にとすると、美紗子が間の抜けた顔になる。

「今日、学校でなんか調子がおかしくて、いないのにお前に呼びかけてたり、落ち着かないことが多かったんだよ。それで、看病するのも兼ねて歓迎会を早退して帰ってきた」

さっきは話すことを躊躇ためらった内容なのに、不思議と今は自然に話せた。美紗子は、まだ無言で聞いている。

「お前が学校休んだの久しぶりだったしな」

多少、恥ずかしくなり照れ隠しにそう付け加えると、美紗子の口から軽く笑い声がこぼれた。

「ま、お互いいつも一緒にいたからな」

いつも、といっても四六時中という訳ではもちろん無い。でも、

お互いが元気なのをそれぞれ確認できて、何かがあったら助け合えて、必要なときには話し合える。それが自分たちの関係だったはずだ。

たとえば、物理的には近くにいらなくても、お互いが通じ合っているというか、信頼しあっているというか、そんな感じがして、ベタな言葉だけど心が『いつも隣にいる』とでも言うのだろうか。まあ、そんな感じだ。

でも、今回はお互いがお互いを信頼できず、疑い、相手のせいにしてきた。そのせいで、近くにいっても遠くにいると言うのか。言葉は交わしているのに、心が行き違ってた。そんな状況になって、お互いが孤独になって、落ち着かなくなった。そんなところだろう。

そんな風に思えるのは、美紗子だけだと思う。ただ単に一緒にいる時間だけなら、美香がいるし、信頼していると言う意味なら、奈緒や涼子などの幼馴染はもちろんのこと、浩太や大樹のことだって信頼している。

でも、何故か美紗子だけが特別だった。何故かは分からない。あえて付け加えるとしたら、1番気が合うからだろうか。とにかく、理屈抜きにこんな関係になったのは美紗子だけだ。もしかしたら、これから先も美紗子1人しかいないかもしれない。

別に、美紗子に好意を抱いているとか、そういうことではない。美紗子は可愛いと思うし、この頃は大人の女性に近づいてきてるのを実感させられてドキドキしているし、気が利くし魅力的な女性だとは思ふ。でも、異性に対する好意では決してない。そして、これからの抱くことは無いと思う。

しかし、これからも友達として、幼馴染として、人生の大切なパートナーとして（他意はない）今のままの距離感を保って行けたら、幸せだと思うし、自分としてもそうしていきたい。

それを確かめるように美紗子の顔を見ると、笑顔になって頷いた。

「ふふっ」

「ははっ」

しばらく、無言で向かい合っていると、自然とお互いの口から笑い声が漏れた。

そのまま、暫く笑いあっていると、今度は美紗子が大きな欠伸あくびをする。

「――そろそろ、寝るわね」

「おう」

美紗子はそれだけ告げると、布団に横になる。

その様子を見守っていると――不意に右手に温もりを感じた。

不思議に思っ、自分の手を見ると、ベッドから出ている美紗子の手が自分の手をつかんでいた。

「あたしが寝るまで、そのままにしてなさい」

「ああ」

言い方は相変わらずだった。

口でも言ったが、了解の意味を込めて手を強めに握る。

すると、美紗子もしっかりと握り返してきた。

「美紗子、おやすみ」

「……」

返答が無いので美紗子の様子を確認すると、既に眠りに落ちていた。

その顔は、寝ているにもかかわらず、とても落ち着いていて、幸せそうで、見ている守も段々と心が安らいでくる。

そんな幼馴染を眺めながら、

（今日くらいはそのまま暫くここにいろか）

そんな風に、自然と気持ちいが傾いた。

「美香様、そろそろ皆様を呼びに行つて来ますね」

夕食をさらに盛り付け終えたので、夕食にしようと芽衣がそう提案する。

「あ、私も行っていい？」

美香がそう聞くと、最初は主人の手を煩わせる訳にはいかない、と断られたが、2回目を聞くと、意味を理解したのか、快く許可してくれた。

仕事熱心過ぎるところが玉にキズだが、しっかりとこっちの意図を理解してくれるからありがたい。

「美香様、夕食の準備を手伝わせてしまっただけ申し訳ありません」

「いいよ、今日はお兄ちゃんが手伝えないみたいだし」

階段を上りながら、夕食の支度についての礼を言われたが、美香は軽く愛想笑いで返す。

普段は守と芽衣の2人で支度をしているし、守がいなくてきづかい自分が手伝うべきだ、ということぐらい美香も理解している。

芽衣から今日の放課後に会ったらしい歓迎会の様子を聞きながら階段を上っていくと、1番最初にある、美紗子の部屋にたどり着いた。

一応、芽衣に視線で確認を取ってから、ドアをノックする。

暫く応答を待ったが帰ってこなかったので、出来るだけ音を立てないようにドアノブに手を置いてドアを開けると――

「あらあら、2人とも寝ちゃってますね」

「ほんとだ」

部屋の中では、ベッドで熟睡している美紗子と、椅子に座ったまま前のめりに眠っている守がいた。

起こさないように気をつけながら、何も掛けずに眠っている守に布団をかけにいく芽衣についていくと、守と美紗子がお互いの手を握り合っていた。その姿に、つつい嫉妬の気持ちが生まれてしまう。

「何で、こんなに仲がいいんだろうね、この2人って」

「理由は分かりませんが、相変わらずですね」

芽衣は布団をかけ終えると、少し離れたところで守たちを笑顔で見ていた。

「いいの？ このままだとお兄ちゃんを取られちゃうよ？」

「そうかもしれませんね」

メイドと言う立場でありながら、守に好意を抱いている芽衣にそう聞くと、よほど余裕があるのか落ち着いた返事が返ってくる。

「美香様こそ、あまり守様との仲がよろしくないようですが、大丈夫なのですか？」

「大丈夫よ、何とかするから」

その答えに、あまり自信が無いのを隠すように言い捨ててから、守のほうを見る。

そこには、やはり幸せそうに眠っている兄がいて、自分に対する自身が段々と薄れてくる。

どうして守は、兄のことが好きな妹がいるのに気付かないのだろうか。まあ、いつもの態度で気付け、という方が無理かもしれないが。

一応、妹として兄のことが好きなのは普通ではない、という自覚くらいある。でも、好きなのには変わりないし、血はつながっていないので、特に問題は無いはずだ。

どちらにしても、今のままの関係では進展しそうに無いので、早々に良い関係に戻さないといけないが。いつまでも、反抗期のことの引きずっているわけにはいかない。

そう、心に決心すると、

「そろそろ、他の人を呼びに行こ。夕飯冷めちゃうよ」

「はい。そうですね」

芽衣の手を引っ張って、出口へと向かう。

いくら夕食のためとはいえ、こんなに幸せそうに寝ている人を起こすのは無粋だと思うし、何となく兄の幸せな寝顔を崩したくなかった。

「おやすみ、お兄ちゃん」

美香はドアを閉めながらそう呼びかけると、芽衣と共に隣の部屋へと向かった。

8章　それは、幼馴染で、家族で、大切な人だからだ！

とおしま
遠島幼稚園のとある教室。昼休みということもあり外に遊びに行く子たちもいる中、守は机に座って塗り絵をしていた。

「美紗子ちゃん、一緒に遊ぼうよ」

「いやだ」

聞こえてきた声にふと顔を上げると、美紗子が男の子に声をかけられていた。

美紗子はクラスのアイドルだ。見た目だって可愛いし、周りに気が利くし、元気も良い。それ故、美紗子に好意を示している者も多かった。今、言い寄っている男の子（何故か名前が浮かんでこない）もその1人だ。

無論、守もその中の1人である。しかし体は大きい方ではなく、度胸もあるわけではないので、いつも今日と同様に遠くから見守っているだけだ。

しばらくそのやり取りを見ていた後、守は中断していた塗り絵を再開した。

それから何分かが経った。

「何で俺とは一緒に遊べないんだよ、ブス！」

「ブスじゃないもん！」

行われていたやり取りが急に激しくなったので再び視線を向けると、美紗子の目には涙が浮かんでいた。

周りを見ても先生はいない。

教室の中には他に何人か人がいるが、みんな男の子が怖くて手を出せずにいた。

美紗子に声をかけている男の子は幼稚園児にしては体つきがよく、クラスの男子を纏め上げている子――要はガキ大将だからだ。

守にも助けに入ろうという気持ちが生まれたが、やはり男の子が怖くて実行には移せなかった。

「お前はブスだから、どうせすること無いんだろ？」

「あるもん。みんなとおままごとするの！」

もちろんやり取りが止まるはずもなく、さらに激しさを増してくる。

「俺の言うことが聞けないならこうするまでだ！」

「えっ……」

とうとう怒りをこらえきれなくなった男の子が、美紗子を殴ろうと拳を構える。

その様子を見たとき——自然と守のからだが動き出した。

「やめろ！」

叫び終えて気付いてみると、男の子と美紗子との間に自分の体を入れ、両手をいっぱい広げて美紗子を守る体制を取っていた。

「お前、何でそんなことするんだよ？」

突然のことに驚いた男の子は拳を一旦下ろし、怒りを隠しきれない声で訊ねてきた。

「それは……僕が、守だからだ！」

足の震えが声に出ないように、力いっぱい答えた。

『守。あなたの名前は、だれか大切な人を助けるっていう意味なのよ』

これは母が毎晩、自分に語って聞かせてくれる言葉だ。

その言葉が自然と頭に浮かんできて、それを口に出した。今、こうやって助けに出られたのも、母親のこの言葉が力を貸してくれたからだと思う。

「それじゃあ、こうしてやるよ！」

男の子が再び拳を構える。

そして、それを守の頬に打ち込んだ。

守はそれを頑張って耐えようとした。守るべき人を守れるように。でも——

「……ええん。痛いよ」

痛くて、痛くて、耐えられずに涙が頬を伝った。

「これで終わりだと思ってないよな」

守の涙でゆがんだ視界には、だんだんと大きくなる男の子が写った。

ゆっくりと守の前まで歩くと、再び拳を構える。

「さあ、これで終わ——」

「もう止めて！」

男の子の構えに覚悟を決めたとき、自分の前に大きな影が立ちふさがった。

「何であたしのことなのに、守君のことをいじめるの？」

「それは……」

美紗子の思ってもいなかった行動に、男の子の反応が遅れる。

守が自分が庇われたと分かったのは、男の子のそんな様子を見てからだった。

「もうやめて。私のことは何回も殴っていいから、守君に痛いことしないで」

涙を流しながら説得する美紗子の様子を見て、美紗子の優しさを再確認すると同時に、何故か胸に痛みを感じた。

「……っちえ」

どぎまぎした様子だった男の子は、舌打ちをして教室の外へと去っていった。

「大丈夫？」

「うん」

差し出された美紗子の手をつかんで、もう片方の手で涙を拭きながら立ち上がった。

「ゴメンね。あたしのことなのに、守君に痛い思いさせちゃって」

美紗子は本当に申し訳なさそうな顔で頭を下げた。

「こちらこそゴメンね。本当は僕が守ってあげなきゃいけないのに」
守が顔を上げてそういうと、美紗子が不思議そうな顔をしていた。

「違うよ。お母さんが自分より背の小さい子は守ってあげなきゃだめだって言ってたもん！」

相変わらず頭を下げている美紗子の背丈を見ると、たしかに自分よりも数センチ高かった。

「でも、僕の名前は大切な人を助けるって言う意味だってお母さんに言われたよ！」

お互い主張を終えると視線が合い、自然と笑いがこぼれた。

「それじゃあ、今はあたしが守ってあげられるように強くなる。だから、守君の方が大きくなって強くなったら、今度は守君があたしを守って！」

ひとしきり笑い終え、すがすがしい顔でなされた美紗子の提案は、自然と自分が納得するのを感じた。

「分かった。約束だよ！」

「うん、約束！」

今度は守から小指を出すと、美紗子も小指を出してきて『指きりげんまん』をする。

それを終えてしばらく無言で見つめあっていると、美紗子の口から小さな言葉が漏れた。

「あの……。さっきは嬉しかった」

「え？」

しかし守は内容が聞き取れ無かったので聞き返した。

「今日は庇ってくれて嬉しかった。ありがとう」

今度の美紗子の言葉は、ハッキリと笑顔で言っていた。

「僕も嬉しかった。ありがとう」

守も素直に自分の気持ちを伝える。

今なら言えるのではないか。

ふとそこで、守は自分にそんな気持ちかわいてくるのを感じた。

「あのさ……」

「何？」

恐る恐る切り出すと、美紗子は無邪気に首をかしげる。

「……よかったら、お友達になりたい!」

一気に最後まで伝えると、美紗子の顔はパツと明るくなった。

「もちろん! 喜んで!」

その後、2人は始めての握手を交わした。

☆

「……様。守様。起きてください」

「……ん?」

肩をゆすられて、目を覚ますと隣にはメイドである芽衣が立っていた。

「守様。ご夕食の支度が出来ましたので、そろそろ食事にしようかと……」

芽衣の言葉を聞き携帯の時計を見ると、時刻は5時30分。最後に時間を確認したのが3時30分だから、2時間ほど眠ってしまったらしい。

「わかった。後で行くから、先に下に行っててくれ」

「分かりました」

芽衣は何の文句もなしに頷くと、守の部屋から出て行った。

守の頭には珍しく見た夢の内容が残っていた。いつも夜に見るのとは違う内容の夢だ。その内容は……

「なんで美紗子との出会いなんだ?」

守が美紗子と仲良くなった出来事。

あの日以来、2人は行動を共にするようになった。

それにあの出来事は、自分にもう1つの変化を与えた。それは、約束のことだ。

あの日交わした約束から、美紗子を守れる立派な男になるように頑張ってみたりした。

今となっては『守る』ということは、からだを張って庇う以外にも沢山あることを知っている。どちらかといえば、守はそちらの方

が得意だ。精神的に、環境的に。この前は失敗してしまったが、何だかんだで約束どおり上手くやれていると思う。

本当なら体を張って庇ってあげられるなら、その方が理想だ。しかし、そういうのは向いていないらしく、いくら頑張っても体は強くならなかった。だからこそこの今の方法だ。

しかし、今の萩本家には男手は自分しかない。芽衣がいるとはいえ、いざとなったら大切な人を庇えるようではいけないな、と思う。そのために今まで頑張ってきたのだから。

「……そろそろ行くか」

突然鳴り出した腹の音に多少顔を赤くして、そうつぶやいた後、守は階段へと向かった。

その日の夕食はカルボナーラだった。その味は相変わらず一流レストランを凌ぐほどの味だ。それを口に入れただけで、幸せな気分になった。

周りを見るといつもの面子がおいしそうにスパゲッティをそそっている。この同居生活に、守もそろそろ慣れつつあった。

美紗子は今日は風邪のこともあるので自宅で過ごしているが、今晚からは萩本家に戻ってくるらしい。美紗子の帰りを密かに楽しみにしている自分がいるのを守は珍しく気付いていた。

夕食自体はいつもと違う点などあるはずもなく、いつも通り楽しい会話がなされていた。

《ピンポン》

そんな中、突然鳴り響いたドアチャイムに、1番出口に近い位置に座っていた美香が玄関へと向かう。芽衣が出ようとしていたが、キッチンに1番近い席、つまり出口から1番遠い位置になってしまったので、美香が芽衣を制した。

美香が雑用を受け持つのはこのごろでは珍しくないことだ。同居人数が増えていくにしたがって、例の社交的な性格が強くなり、自

分以外の頼みなら基本的に引き受けるし、自主的に色々行うようになっていた。

美紗子が帰ってきたのかな、などと思っていると、

「宅配便でーす！」

美香が玄関に着いたのか、リビングでもハッキリと聞き取れるほど大きな声が聞こえてきた。

おそらく印鑑が必要になるので、探すために席を立ったところ、

「お兄ちゃん、どうしよう……」

突然、顔を真っ青にした美香がリビングに駆け込んできた。

それとほぼ同時に、奈緒の携帯の着信音が鳴り響く。

「美香、どうした？」

「げ……玄関に、配達員の格好をしたヤクザみたいな人たちがいる……」

「ヤクザみたいな配達員じゃなくて？」

「そんなわけ無いでしょ」

美香の様子があまりにもひどかったため、冗談交じりに言ってみた。普通に考えてそんな人がいるとも考えにくいし。それに、うちがヤクザに狙われる理由も無いと思う。

考えてみると、久しぶりに美香と普通に話したな。この状態の相手を前にこんなことを考えるのは、不謹慎かもしれないけど……。

いくらこんな返しをしても、美香の様子が戻らないので、少し疑問を覚えてきたところ、

「守、ふざけてる場合ではないですわよ」

電話を終えた奈緒が、携帯を折りたたみながら席を立った。

「それって……」

「この家を見張らせている者から連絡がありました、この家の周辺を黒服の一団に囲まれているようでしてよ」

「は!？」

あまりにも常識はずれな状況に、守がついていけずにいるうちにも、奈緒が周りに目を配る。

「その輩の原因は……聞くまでもなさそうですね」

「……へ？」

奈緒の視線の先を見ると、涼子に抱きついて今にも泣き崩れそうな杏子と、珍しく真っ青になり余裕の無い様子の涼子がいた。

様子からすると……あれだな。あの火事のあとに2人の両親から借金の返却を求めるために、ホテルに押し寄せたっていう。他に考えられないし。

やっと守の脳が状況についていけるようになった所で、

「……って、囲まれてるって、どうすんだよ？」

美香、芽衣と話し合っていた奈緒の顔がこちらに向けられた。

「そうですわね。守、あたくしの近衛部隊を呼んでも到着までに時間がかかりますし、それまで芽衣と2人で涼子さんと杏子を守りきるのは無理に等しいですわ。ですから、2人を連れて芽衣と共にこの家からお逃げなさい」

さすが一条院家、まさか奈緒が自分の近衛部隊まで持ってたなんて。

「……って、何で俺!？」

「あなた男でしょう。芽衣もつけますから大丈夫ですわ」

「奈緒様。ですからこの程度の人数なら、わたくし1人で――」

「芽衣が1人で勝つことなら可能でしょうけど、この人数を守りきることが可能でして？」

「それは……」

このリーダーシップ。さすがは奈緒だな、などと思っていると、
「すいません、まだでしょうか？」

玄関の方から、ドアをたたく音と共に、丁寧な口調とは明らかに釣り合わない怒鳴りつけるような声が聞こえてきた。

今すぐにでも殴り込んできそうな状況に、守は拳を強めに握って、

「分かった。涼ねえ、杏子ちゃん。逃げよう。芽衣、護衛頼む」

「……分かったわ」

「お任せください」

決意を決めて周りを見ると、かろうじて意識を持っている、といえる状況の涼子が頷いてた。芽衣からも了承の声が聞こえる。

「気をつけてね」

「必ず無事で帰ること、いいですわね？」

「2人も来るよな？」

ついつい全員で逃げるつもりでいたのだが、2人の言葉から察するにそうではなさそうなので、聞き返すと、

「誰かが逃げるまでの時間を稼がないといけないでしょ」

「だったら、それは俺が――」

「守、おそらく敵は涼子さんと杏子を狙って動くはずですよ。ですから、あなたは逃げる側にいるべきですよ」

――引き受ける、と続けようとした守だったが、奈緒の力説に最後まで言うことが出来なかった。確かに奈緒の言っていることは正しいと思う。しかし、時間を稼ぐ側にも危険が及ぶのも確かで……

「守様、申し訳ありませんが、わたくしは美香様の安全のために残――」

「残る、とか言い出すではありませんわよね？」

「でない、美香様の身が……」

勢い良く言い出した芽衣だったが、奈緒の様子に押し切ることは難しそうだった。

守も芽衣に残るように伝えようと思ったが、言える様子ではなかった。ので内心に留めておく。

「芽衣、あなた無しでは守たちが逃げ切るのは絶望的です。それに――」

奈緒の様子が今までとは一転して、穏やかな笑顔を見せる。

「一条院の名にかけて、美香1人ぐらい守りきって見せますわ」

あまりにも落ち着いた奈緒の様子に、守も芽衣もそれ以上は何も言えなかった。

そのやりとりの間にも男の声が大きくなり、ドアも壊れそうならいに叩かれている。

「上手くやってよね」

それだけ言い残し、美香が玄関の方に走り去ってしまふ。

「守様、早くこちらへ」

既に裏口に向かつていた奈緒から、自分呼んでいる声が聞こえてくる。

「奈緒、美香を頼んだぞ」

「ええ。部隊が到着し次第、急いで合流いたしますわ」

それだけの短いやりとりを交わし、裏口へと向かった。

「さっちゃん!？」

逃げる途中で食卓に座ったままの早知を見かけたが、芽衣に手を引かれたため、そのまま逃げるしかなかった。

「遅くなってすみません」

美香は今にも逃げ出したい気持ちを必死に押さえながら、叩かれて悲鳴をあげているドアに手をかけた。

「あの……印鑑が見つからなかったので、サインでもいいですか？」
足はガクガクに震えていたが、その震えが声にでないように気を付けながら、出来るだけ平然と振る舞う。

「それでは、こちらにサインをお願いします」

さっきまでの怒声は何だったのか、と突っ込みたくなるほどの恐ろしいまでに優しい声と、サングラスの上からでもわかるほどの引きつった笑顔で返事が返ってきた。

「ありがとうございます」

美香は恐らく中には何も入っていないだろう軽い段ボールを受け取り、サインを始める。

内心の恐怖が腕に伝わって、蛇が踊っているような字になってしまったが、時間を稼ぐためにも出来るだけゆっくりと名前を書いていく。

すると、半分くらいを書き終えたところで、

「あの、お隣に住んでいた、琴瀬涼子さんと杏子さんが、今何処にいるかご存知ありませんか？」

「へ!？」

あまりにもピンポイントな質問に変な声を上げてしまったが、咳払いをして気持ちを落ち着かせてから答えを述べる。

「火事の後には1度も会っていませんけど……」

美香としては上手く返せた方だと思うが、相手がイライラしたように声を苛立てて口を開く。

「この家に入っていくのを見た、って言っている人がいたんですが……」

「気のせいじゃないですか？」

さすがに怖くなって、自然と視線を逸らしてしまう。

声も裏返ってしまったかも、と心配していると、目の前の男とは別の方向から声が響いた。

「目標が逃げ出したぞ。追いかける」

「今、裏口から逃げたって連絡が入ったけど、まだ知らないって言うのかな? お嬢ちゃん」

「私には何のことだがさっぱり――」

何で早々に見つかるような逃げ方してるのよ、などと思いながら目の前を見ると、ものすごい形相でポキッポキッと指を鳴らしている男と目が合った。

「まだ、しらばっくれるのか? あ!？」

兄たちを追っていく他の男たちを背景に、目の前の男が自分を殴るべく拳を持ち上げた。

「嘘つきにはお仕置が必要だよな?」

「誰か助け――へ?」

いつまでも経っても衝撃が来なかったので不思議に思い、自然に瞑ってしまったらしい目を開く。

「……奈緒さん?」

すると、地面に倒れてのびている男と、空中に髪が舞っている

少女が目に入った。

少女は男の顔を踏みつけた後、手をはたいてからこちらを向いた。
「遅くなって申し訳ありませんわ」

奈緒は自分に謝罪の言葉を述べてから、どこから取り出したロープで男を縛り上げていた。

「ありがとうございます」

「当然のことですわ……守との約束ですもの……」

恥ずかしがって顔を背けるあたり、年上の同性でありながらも、
つつい可愛いな、と思ってしまう。

「早く戻りますわよ」

いつの間にか男を縛り終えていた奈緒に、手を捕まれる。

「はい」

その手に引かれるがままに、リビングの方へと歩いていった。

「皆様、次は右へ」

「わかった」

守は1番後ろを走りながら、先導する芽衣の指示に返事をした。

裏道のせいかな、人影は一切見えない。

しかし、そんなことを気にしている場合ではないので、芽衣の指示に従い曲がり角を曲がる。

曲がった後で杏子の足元がふらつきだした。正直、無理もないと思う。不謹慎だとは思いますが、人間ってこんなに走れるんだな、と守が感動してしまったほどのペースでここまできているのだ。

涼子のほうを見ると、杏子ほどではないながらも足元が不安定になりかけていた。

これがマラソンか何かなら休憩することを提案するのだが、すぐ後ろに黒服の集団が迫っているのです、とてもそんなことをしている余裕は無かった。

今にも力尽きそうな杏子を視界に置きながら、芽衣の指示に従っ

て次の曲がり角を曲がる。

ついにそこで、曲がるときに足を縛もつれさせた杏子が転んでしまった。

「杏子ちゃん！」

守は、すぐさま杏子の元へ駆け寄る。

守から見ると、上手く転んだようなので怪我をしている様子は無かった。しかし体力的にこれ以上走るのは厳しそうなので、守か芽衣が背負っていくしかなさそうだ。

「ごめんね、おにーちゃん……」

息を切らせながらも、両手について杏子が立ち上がる。

杏子を背負うために腰を落とそうとしたところで、前方から通った声が聞こえた。

「守様、後ろ！」

「へ？」

芽衣の声に従い後ろを見ると、追いついてきた黒服の大男が自分に飛び掛ってくるのが見えて――視界から吹っ飛んだ。

トン、という着地音が隣でしたのでそちらを見ると、攻撃態勢に入っている芽衣がいた。

「芽衣、すまない」

守が礼を述べると、芽衣は笑顔でうなずいた後、真剣な顔になって口を開いた。

「守様、ここはわたくしが引き受けます。わたくしが足止めする間に、杏子様を背負って涼子様と共に出来るだけ遠くへ逃げてくださ
い」

「お前は？」

芽衣の視線があまりにも真剣だったため、芽衣を止める言葉を口から出すことが出来なかった。

「わたくしなら大丈夫です。そのために4年間血反吐を吐くほどの鍛錬を積んできたのですから」

「芽衣……」

男としては情けないが、自分が残っても何もできないので杏子を背負い芽衣に背を向けた。

「守様、早く！」

「頼んだぞ！」

決意の込められた芽衣の声を聞いて、守はそれだけ言うのと涼子の方へ走っていった。

「止まりなさい！」

芽衣が黒服に向かって叫ぶと、相手は一斉に動きを止めた。

「これ以上先には行かせません」

腹のそこから声を出して、相手にそして自分に言い聞かせた。

守の前だからああ言ったが、正直この人数を相手にするのは少し厳しい。

もし相手が自分だけを狙ってくるのなら、この程度の相手ぐらい特に問題なく倒せるだろう。

しかし今回は状況が違う。相手は涼子と杏子を狙っているのであって、自分という防壁を超えて守たちを追いに向かうはずだ。すると相手が自分のいるラインを超えないように気をつけて戦う必要がある。

この際、腕の1本や2本くれてやる気で戦わないとな、と覚悟を決め改めて相手のほうを見る。

「相手はただのメイド1人だ。とつと倒して獲物をとりに行くぞ！」

『おおっ！！』

しばらく女子1人が残ったという状況にあ然としていた相手が、リーダー格だろう人間の声で一斉に動き出した。

「そのメイド1人がどれだけ恐ろしいか見せて差し上げましょう」

芽衣はその言葉を言うと、迫ってくる黒服達の方へ向かって駆け出した。

「それにしても、奈緒さん強いですね」

「あれくらいの護身術、一条院家の娘として身につけていて当然ですわ」

自分に向かってきた黒服を奈緒が倒した後、2人は家の周りに怪しい人がいないのを確認してからリビングへと引き返す。

奈緒の護身術のおかげで自分は助かったが、大の大人が1発でどのほどのキックをいつも浴びさせられている兄が少し可哀想になってくる。

「うちは全然そういうのはやりませんけどね」

しかし蹴られる側の兄も蹴られて当然のことをしているのはたしかなので、軽く笑いながら返しておく。

今も逃げ続けているだろう守達の無事を祈りながら歩いていると、奈緒が機械室の前で突然、歩みを止めた。

「どうしたんですか？」

不思議に思って聞いてみたが、奈緒はその質問に答えることなく機械室のドアノブに手をかけ——そのまま開いた。

すると、そこには——

「早知さん!？」

美香は、リビングにいた早知の姿を見て二重の意味で驚いた。

1つ目は、てっきり守達と逃げたと思っていた早知が家にいたことに対する驚き。

2つ目は、早知がパソコンのキーボードたたいているスピードに對する驚きだ。

「大人しくしていたようすわね」

家の管理用の大型パソコンを操作している早知へと、奈緒が呟く。そのまま奈緒は早知の方へ向かっていく。

「もう、何をしてま……」

奈緒がパソコンの画面を見たたん、面食らったような顔をした。

「どうしたんですか？」

美香も早知の後ろに立ち、画面をのぞき込む。するとそこには、よくわからない文字列が入力されていた。

奈緒が驚いているから凄いんだろうが、正直適当に文字を打ち込んでいるようにしか見えない。

しばらくパソコンが壊れそうな勢いで文字が打ち込まれ続け、早知がエンターキーを小指でたたいた後、無言で画面をこちらに向けた。

『これは……』

画面上に移っているものの意外さに、しばらく奈緒と顔を見合わせた。

すると、早知が胸を張って、

「ボクがあの人たちの情報をハッキングしたんだよ」

「さっちゃん、でかしましたわ」

奈緒は早知に1言告げたあと、通信機のような物を取り出して叫んだ。

「今から目標の通信データを送ります。それに従って、各隊要人の保護に向かってください。あたくし達も直ぐに合流しますわ」

守は杏子を背負いながら、涼子と共に走っていた。

「守君、こっちに」

「わかった」

先ほどまで、芽衣がやっていたように、出来るだけ裏路地に入りながら2人の黒服から逃げていく。こうすると、相手を撒きやすくなるらしい。

どうやら芽衣が上手くやってくれているようで、黒服が増える様子はない。守達が今逃げている黒服は、別の場所で待ち伏せをしていたやつらだった。

「次は左に」

「了解」

涼子の指示に従って再び角を曲がったところで、守は足を止めた。
「行き止まり……」

前にはコンクリートの壁がそびえ立っており、横はブロック塀に
囲まれていた。

守は直ぐに状況を把握した。来た道に戻ろうと後ろを向いたところ
で、黒服の2人組が現れた。

「とうとう追いつめたぞ」

「とっとと降参しやがれ」

2人は直ぐに襲ってこようとはせず、拳をならしながら、ゆっく
りはこちらに迫ってくる。

「涼ねえ、杏子ちゃんをお願い」

「守君!？」

守は杏子を良子の近くに降ろしたあと、ゆっくりと黒服の方を向
いて立ち上がった。

「ほう、やる気か」

「今のうちに大人しく嬢ちゃん達を渡せば、お前だけは助けてやろ
う」

相手はニヤニヤしながらこちらに問いかけてくる。

「そんなことするか!」

守は自分を勇気づけるように、大きな声で言い返した。

「大丈夫なのか、怯えて足が震えてるぞ?」

「どうせ、怪我をするだけだぞ?」

「うるさい!」

恐怖ではなく走って疲れたせいだ、と自分に言い聞かせる。

正直勝てる見込みは無いに等しい。喧嘩は慣れていないし、家か
らずっと走ってきたせいで体力的にも立っているだけで精一杯だ。

だからといって諦めるわけにはいかない。今、涼子と杏子を守れ
るのは自分しかないのだ。

守は改めて、黒服の方を睨みつける。

「いくぞ！」

その言葉と共に、守は走り出した。

「行かせません！」

走り抜けようとした男の足を引っ掛けた後に、透かさずその男にかかと落としを入れる。

そして男が気絶したのを確かめる前に、次の相手の鳩尾みぞおちに拳をたたき込む。

今ので20人目くらいだろうか。それ程の相手を倒したのに、相手の勢いが収まる様子がない。

そうしているうちにも、迫ってきた2人の男を回し蹴りで同時に風払う。

「さすがに、きついですね」

あまり戦闘中に弱音を吐きたくはないが、吐かずにはやってられない。

戦況は奇跡的と言えるほど上手くいっていた。外傷も、骨折などはなく、擦り傷だけですんでいる。

「お前ら、何でメイド1人相手にてこずってんだ！」

リーダー格の男に怒鳴りつけられ、何人かが一斉に襲いかかってきたのを回し蹴りで一掃する。

この男もこちらが優勢になっている理由の1つにもなっている。何も考えず怒鳴りつけるので、そのたびに相手の士気が落ちていくのだ。

しかし、一向に敵の数が減る様子もない。

暫く殴り合いが続いた後、ある物音を境に硬直状態だった戦況が一変した。

「さすがにこれは……」

黒服勢の後ろにタイヤが地面とこすれる音がして黒いワゴン車が停まり、中から何人かの黒服が降りてくる。

さすがの芽衣もこれには苦笑を隠しきれない。

「でも、やることは変わりません」

所詮この程度の相手など、数が増えても変わりはないのだ。

そう自分に言い聞かせ、迫ってくるて気を薙ぎ倒す。

2、3人倒したところで、違和感を覚えた。

相手の勢いが明らかに減っていたのだ。気づけば、地面に転がっている人の数も増えている気がする。

ドンッ！ という車のドアの開く音が聞こえたので後ろを向くと――それとは反対側から殺気を感じて再び向き直る。すると、ナイフを持って飛びかかってくる大柄の男がいた。

自分の対応が遅れたのを悟ると、右手を前に持ってきて反射的に目をつぶる。

それと同時に、何者かが自分の横を走り抜けた。

「おだ、まり、なさい！」

3度の鈍い音と共に聞き慣れた声を聞き、瞑っていた目を開く。

「……奈緒様？」

すると予想通り、目の前には男ではなく、見慣れた少女が立っていた。

疲れと安心のあまりその場から動けずにいると、さらに後ろからも足音とともに聞き慣れた声が聞こえてくる。

「芽衣、大丈夫？」

「美香様。早知様まで……………」

自分を抱き締めてくれる主人の温かさにつられ、目からは自然と涙が零れてしまう。

そうしているうちにも奈緒の指示により、黒服たちが黒服たちを縛り上げ、戦場は一気に沈静化した。

芽衣は温かい主人の腕の中で、一頻り^{ひとしき}今までの辛さを体の外に出した後、もう1人の大切な人の顔を思い出し、奈緒の元へと駆け寄る。

「奈緒様、守様はご無事なんでしょうか？」

「芽衣、助けてもらっておいで、ありがとう、の1つも仰いませんの？」

奈緒に睨まれて、自分の無礼を反省し、頭を下げる。

「ありがとうございます。しかし……」

「分かってますわ」

奈緒はそんなに気分を悪くはしていなかったようで、部下らしき人からノートパソコンを受け取る。

「守は一応、無事ですけど……」

「これは……」

奈緒がパソコンの画面をこちらに向ける。その画面を見た瞬間、奈緒が言葉を濁した理由が分かった。

画面にはボロボロの守と震え上がる杏子、それをなだめている涼子、それに2人の黒服の男が立っていた。

「最悪の状況ですけど、相手に戦う気が無いのが唯一の救いですわね」

奈緒が説明している間にも、黒服に殴りかかった守が逆に蹴り飛ばされる。

たしかに、黒服に戦意は無かった。もし、戦意があれば守は既に立っていないだろう。

しかし、助けに入れる状況でも無かった。下手に舞台を突入させれば、相手の戦意を煽って取り返しのつかないことになりかねない。銃を使えば簡単だったが、いくら一条院の戦闘部隊とはいえ、日本で発砲したらどうなるかは分からない。

となると上から奇襲をかけるしかない。行き止まりの入り口には、あつらえたかのようにビルが両脇に建っている。奇襲にはもってこないだ。

ただし問題は、ビルがどちらも五階建てということ。下手すれば地面に身を打ち付けて死にかねない高さだ。訓練を受けているとしても、一般人の戦闘員にできるはずがない。今の満身創痍の体で成功させられる可能性は低かったが、芽衣は反対されるのを覚悟で守

達を助ける最善の方法を切り出した。

「奈緒様、わたくしが――」

「分かっておりますわ。あまり気乗りしませんけど、他に方法がありませんし。行きますわよ！」

パチンという、奈緒が指を鳴らす音を合図に、頭上からヘリが舞い降りた。

「はあああ――――ぐふっ」

黒服に殴りかかった守は、またも殴る前に蹴り飛ばされた。

これで、何回目だろうか。いや、何十回目だったかもしれない。

今や、体のいたるところが痛み、傷や痣^{あざ}が体を覆っていた。にもかかわらず、1発も相手に拳を当てていない。

「いい加減にあきらめたらどうだ？」

これも、何回目か分からない。しかし、黒服の2人組は未だに攻撃の意志を見せていなかった。

「だまれ！」

もう1発、相手に打ち込もうと地面に手を着いて立ち上がろうとするが――さすがに限界のようで、腕に力が入らなかった。

「守君！」

「おにーちゃん！」

「来ちゃだめだ！」

守が止めたにも関わらず、涼子と杏子は自分の所に寄ってきて手を差し伸べて立たせてくれた。

「お譲ちゃん達、おとなしくこっちに来ればすぐ終わるんだよ」

黒服の1人が、いかにもこちらを茶化すように呼びかける。

「うるさ――ッッ」

守は黒服の口を黙らせようと再び殴りかかったが、数歩歩いたところで力なく倒れてしまった。

「守君、もういいよ」

「涼ねえ!？」

「おねーちゃん!？」

守がもう1度立とうと頑張っていたところ、突然涼子が黒服の方へと歩き出した。

「私がついていきますから、杏子と守君には絶対に手を出さないでください」

「だめだ涼ねえ! 戻って来い!」

守が必死に呼びかけるが、涼子は振り向きもせず、ゆっくりと黒服の方へと歩いていく。

「お嬢ちゃん、いい心だけだね。君の志に免じてそっちの2人は許してやろう」

黒服がニヤニヤと下卑た笑い顔を浮かべながら答えた。

守が呼びかけ続たが、涼子は歩みを止まることはなく、ついに黒服の前にたどり着いた。

「それじゃあ、行こうか」

黒服が、ゆっくりと涼子に向かって手を伸ばしたとき——守は両腕に決死の力を込めて立ち上がり、そのまま駆け出した。

「涼ねえ!」

「守君!？」

守は黒服の手を払いのけ、涼子と黒服の間に入り込む。

「てめえ、いてえじゃねえか」

「ツツ……くっ」

そのまま殴りこんできた黒服の手を、手の前で手をクロスさせて防いだ。

「……………今度は……倒れなかったぞ」

「こいつ……!」

黒服がもの凄い形相でこちらを睨んできたが、守は怯まなかった。後ろで見ていたもう1人の男が、怒りをあらわにしている男を抑え、口を開いた。

「何で、そこまでそいつらを庇^{かば}う？」

「それは……」

その答えは迷うまでもなく、自然と頭に浮かんできた。

「それは、幼馴染で、家族で、大切な人だからだ！」

すると質問をしてきた男も拳を鳴らし始めた。

「てめえ、本気で言ってるのか？」

「ああ」

その質問に対しても、守は迷いなく答えた。

「それなら、幼馴染同士、仲良くあの世に送ってやろう！」

ついに戦闘の意志を見せた男がゆっくりと近づいてきた。

「それは、俺がさせない！」

正直、自分でも立っていられるのが不思議なくらい体が悲鳴を上げているのが分かったが、なぜか立っていられた。

今まで——つい2週間ほど前の自分だったら、今頃とつくに気を失っていただろう。しかし今は違う。美紗子や奈緒に殴られ続けたことで、幸か不幸か身体が痛みに強くなっていったのだ。

今しかない。美紗子と約束したことを果たせるのは。

後ろには自分の大切な人——涼子と杏子がいる。それに協力してくれた奈緒や芽衣、美香などの努力も、今あきらめたら全て水の泡になる。もちろん美紗子だっていい顔をしないだろう。

きっと今なら出来るはずだ。そのために色々努力はしてきたし、今の自分にはみんながついてくれている。

今ここでやらなかったら、いつやるというのだろうか。

幼馴染として、萩本守として、涼子と杏子は絶対に守り抜く。

守は最後の力を込めて拳を握り黒服に向かって走り出す。

「はああああ——ああ？」

黒服に拳があたるところで、突然拳が空を切ったために声が裏返ってしまった。

不思議に思い目の前を見ると、地面に崩れ落ちる2人の黒服と見覚えのある少女の姿があった。

「あ……ず、さ………？」

守は空から降ってきた8人目の幼馴染の名前を呼んだ後……目の
前が真っ白になった。

エピソード〜ここでまさかの9人目ですか!?

騒動が鎮静化してからしばらくたった後。

守は自宅のリビングで美紗子による手当てを受けていた。周りでは、いつものメンバーが各々自由に疲れを癒している。その中に、見慣れない姿も1つあったが。

「……いたっ。おい美紗子、強すぎるだろ」

「別に普通にやってるわよっ」

「っ——」

守は現在、殴られて痣あざになってしまった箇所箇所に包帯で氷を固定してもらっている。美紗子が強めに締め付けるので、それを咎めたところ、声が出せなくなるほど強く締められた。

こいつは、こっちが怪我人だということを分かってるのだろうか？ いや、あの顔は分かかっていてやってるな。

「大体、こういう喧嘩したらこんな傷を負うのよ」

「それは……」

結論を先に言うと、今回の借金取りの件は表ざたには出さない、ということとで幕を閉じた。

黒服の一団は、守達と対峙していた2人が最後だったらしく、奈緒の近衛部隊が全員を取り押さえることに成功した。事件が収集した後、守は警察に連絡を入れようと提案した。しかし状況が状況で、この事件が表に出ると世界のどこかを逃げている涼子たち両親が犯罪者扱いになってしまい、その子供である2人にも世間体などへの飛び火を免れないので、一条院家の方で全てを始末してもらうことに決定した。

奈緒の話によると、もともと情報管理も甘い組織のようで、アジトの場所もすぐに出るだろうし、残党が捕まるのも時間の問題だろう、とのことだった。

で、家に帰ってみると美紗子が帰宅していた、という訳だ。

そのような理由があり、美紗子には真実を話すことが出来ないの
で、守は愛想笑いで返す。

「それに――」

美紗子は守の反応を見届けると、煮え切らない顔をしたまま守と
は別の方向を見た。

守がその視線を追うと、高層ビルの屋上からの奇襲という人間離
れした技によって自分たちの命を救いだした本人であり、おそらく
同居することになるであろう8人目の幼馴染、伊達梓だて あずさが座っている
のが目に入った。

「また厄介なのをつれてきてるし」

「ははは……」

もちろん梓との再会の件についても真実は話せないため、道端で
偶然再会した、ということにしている。

「で、梓もこの家におくわけ？」

「それしかないだろう」

正直、真っ向から美紗子と言いつ合っている気力もなかったので、
出来るだけ美紗子の気に触らないように返しておく。

梓がこの家で暮らすことを認めた理由は2つある。

1つ目は、今回のようにいつ借金取りが来るか分からないので、
出来るだけ戦力になる人間は確保しておきたいと言う理由だ。

2つ目は、梓の家庭事情にある。梓が守達と別れたのは小学3年
生の時。当時紛争が頻発していた中東地域に家族で旅行に行き、そ
の途中で紛争に巻き込まれて行方不明になった。表向きには、遺体
は見つからなかったが現地で死亡した、ということになっていたの
だ。

それが実は現地のあるグループに捕まっていて、そこで武術修行
を行い逃げ出していたらしい。その時に親は、残念ながら……とい
うことだった。

「梓、どうする、うちに住むのか？」

「ああ」

そう返事をしてくる梓は、日本についたばかりということで、髪を雑に1つ結びに結ってあって、着ている服もボロボロだ。背は割りと小柄な方で顔も充分可愛い方だと思うが、女子としては少々男っぽい話し方としぐさが目立つ。

今まで暮らしていた環境のせいもあるのだろうか、昔の梓の様子を知っている自分としては信じられない思いと、残念な思いでいっぱいだった。昔の梓は、静かでおしとやかな雰囲気で、まさに大和撫子そのもの、といった感じの女子だったのに。

「親戚じゃなくて、うちでいいのか？」

本人からは萩本家に住みたいということしか聞いていないので、確認の意味も込めてもう1度梓に問いかける。

「当たり前だろう」

その確認は必要ないものだったようで、返事はすぐに、しかし迷いのない声で帰ってきた。

そのあまりにも堂々とした様子に誰も突っ込めないでいると、再び梓は口を開いた。

「だって、愛を誓い合った夫婦が同じ屋根の下で暮らすのは普通のことだろう」

「は？」

いきなりの爆弾発言に守は理解が追いつかなかったが、数秒して内容がとんでもない物だと分かったときには、既に3ヶ所からもの凄い怒りが守へと向けられていた。

「へえ、許婚って梓のことだったんだ……」

「あたくしの結婚の誘いを断っておいて、まさか梓と結婚する予定だったとは……」

「……」

「お、俺はそんな約束……」

してないぞ、と続けようとしたところで、あまりの圧力到最后まで言い切れなかった。

梓にそんな約束した覚えは………あったかもしれない。あ

れは小学校低学年のある年のこと。何かの遊びの罰ゲームとして、誰かに結婚の申し込みをしてくる、というものだったはずだ。必死に抵抗したが、エイプリルフルだから大丈夫、と浩太に押し切られたんだと思う。それで、1番慣れている美紗子にしようかと思っただが、後々からかわれても厄介なので、と当時は静かだった梓を相手に選んだんだと思った。梓を選んだ理由がもう1つあるのだが、そのことは恥ずかしいため守はあえて目を逸らした。

事実だと弁明の仕様が無いので他に何かないかと悩んでいたところ、守はその後しっかりと事後処理をしていたことを思い出した。

「あの後、しっかりエイプリルフルの嘘だ、って伝えたよな？」

「ああ」

そして、その旨を伝えると、梓も覚えていたように素直に頷いた。その反応に守は安堵の表情を浮かべたが、それを気にせず梓は続けて話し出した。

「あの、エイプリルフルの嘘だ、というのがエイプリルフルの嘘だったのだろう？」

「そんなわけあるかっ！」

勢いよく突っ込んでみたのはよかったが、周りの怒りも収まるはずも無く、唯一の逃げ道あえなく撃沈。

どうやってこの場から立ち去ろうかと考えていたところ、天使の歌声か、悪魔の囁きか、それは突然聞こえてきた。

《ピンポーン》

鳴り響いたドアチャイムの音に、守はこの場から逃げるために自ら率先して玄関の方へ向かった。

先ほどまでの無駄な緊張をほぐすために深呼吸をして、ドアの向こうの相手に声をかけた。

「はい」

割と落ち着いた声でそう言ってから、ゆっくりとドアを開ける。

「おい、お前……」

するとそこには予想もしていなかった人の姿があり、守は面食ら

った。

それは約2週間前の下校途中にあったもので、あの時と同じく顔を布で隠している。

「何で、お前がここにいるんだよっ？」

「知りたい？」

その声は、相変わらず自分がどこかで会ったことある誰かもので、しかも挑戦的な口調だったため、聞いているだけでだんだんと怒りが沸いてきた。

「ああ、言ってみろよ」

当初の想像よりも小さめの相手の向かって、その怒りをぶつけるように答えを返す。

「本当に分からない？」

「は？」

しかし、その返答は先ほどのまでの挑戦的な口調とは打って変わって、中の良い友達、それも……そう、幼馴染に話しかけるような優しい口調だったため守は拍子抜けした。

そんな守の様子も気にせず、占い師は顔を覆う布を手につつと――それを一気に取り払った。

その下にあった顔を見たたん、守の頭の中に、何故かいつも内容を覚えていない夢の内容がフラッシュバックされる。

その素顔は丁度その夢の中で会っていた少女そのもので、

「菜子^{なこ}!？」

「来ちゃった」

守が驚きの声で名前を呼ぶと、目の前の相手は夢の中と同じ声で楽しげに答えてきた。

まあ、たずねてきたのが慣れ親しんでる顔で良かった――――
――って、ここでまさかの9人目ですか!？

エピソード〜ここでまさかの9人目ですか!?(後書き)

どうも、MIDONAです。後書き（前書き含め）ではご無沙汰ですね。

とうとうジミ、S×8も、第一部完結まで書くことが出来ました。ここまでこれたのも、応援してくださった皆さんのおかげです。

以下、いくつか重要なお知らせがありますので、可能でしたらお読みいただけると嬉しいです。

まず、この後のジミ、Sですが……実は、第一部としてこの後に後日談があります。まあ、本来ならそちらがエピソードに当たるのですが……理由は後で書きます。

で、その後ですが……短編集形式で進めていきたいと思っています。

とは言ったものの、MIDONA自身が高校3年生で受験生であるため、後日談をあげた後は、2012年の3月頃まで長期休載とさせていただきたいと思います。受験勉強の合間に書けたらあげますが、おそらく2ヶ月以上更新のない事も普通にあると思うので（下手をすると1度も更新できないかも）、お待たせする事になりますが、連載をやめたのと勘違いしてお気に入りを解除しないようにお願いします（笑）

それだけで、MIDONAのテンションがガタ落ちするので……。

あと、ここで一応、第一部完結なので、誤字脱字や初期の設定ミスなど多い作品ですが、もしよろしければ読んだ感想を聞かせていただけると共に、評価をいただけると嬉しいです。感想や好きなキャラクターなど皆さんの素直な声を聞かせていただけたら光栄です。

また、生意気にも、この作品は受験が終わってからライトノベル系の小説大賞に出そうかと考えていたりするので、少しきつめのア

ドバイスなどもいただけたら嬉しいです。

レビューも、もし書いてくださる方がいたら大歓迎です。

でも、根拠のない誹謗中傷はやめてください。

今後は先ほど書いたとおり長期休載に入りますが、活動報告はちよくちよく更新していくので、執筆の途中経過やその他色々が気になる方がいましたら、そちらも覗いてみてください。

一応、ここでお知らせは終了となります。

以下は雑記となりますので……お付き合いいただける方は、そのままどうぞ。

改めて、何とか第一部を完結させられました。実は、初の完結作品です。（といっても、まだ続きますが……笑）

あ……ここからは、大分碎けて書くので、もし読んでいて気分を害する方がいたらすみません。即、後書きを飛ばしていただいて構いませんので……。

ユーザー情報を見ていただければ分かるのですが、これの他に2つの作品を連載しています。（といっても、片方は放棄……）

で、そちらの方が先に始まったのに、何故、先にジミ、Sを完結させたか、なんですが……単に、モチベーションの違いです。

残りの2作品はおそらく、このサイトでは通常レベルのアクセス数なのですが、この作品のみ8月15日現在（今年の4月に連載スタート）で、累計でPV28000強、ユニーク3500強。各日だけでも最高で、PV3000弱、ユニーク2000人強、という感じでした。また、沢山の方がお気に入り登録してくださっているのと、沢山の方が読んでいただけてるのを知れて、モチベーションが上がったからです。

こんな話に、ここまで付き合ってくださいった方、改めてありがと

うございます。

して、今後ですが、簡単には上記の通りです。

で、まず後日談について。本来、長編として書いていくなら第2部のプロローグにあたる部分ですが、短編にして構成したときに次の短編の冒頭で入れるわけにもいかず、だからといって第1部のエピローグだと締りが悪いので、このような形を取らせていただくことにしました。

続いて、短編についてです。そうする理由は……単に、長編が思いつかないわけじゃないんだからねっ！

というのも、あながち嘘ではないのですが、長編にすると作者の技量的に空気になりかねないキャラ（アンコとか、梓とか……）が出きかねないので、短編で各キャラを掘り下げていきたい所存です。まあ、やりたくなったら、また長編でプロット組んでもいいかな、と思ってたりもします。

で、今後は短編といっても、1つ2〜3万字ぐらいの予定なので、ライトノベル系の雑誌に連載されている読みきり1話ぐらいの長さになると思います。イメージ的には、お嬢様とメイドに囲まれた（守のことではないです）某ラブコメライトノベルや、お嬢様の驚きの趣味をってしまう某ライトノベルみたいな感じになると思います。

今後も、もしよければお付き合いください。

後は、ジミ、Sについて少し語ります。

ジミ、Sはもともと友達と2人で、後輩に明らかに話に出来ないプロットを押し付けようと考えたものです。それは後輩には、右から左へ受け流されたのですが……。

だって、幼馴染が8人も出てくる話って……。今までのラノベでも、5人越えた例はない気がしますし。（もし、それ以上を知って

いる方がいたら知りたいです。」しかも、同居ですよ（笑）

そんなプロットだったのですが、それが僕の頭の中で形になってしましまして……（苦笑）あふれてくるそれに堪えきれずに文章にしたのが序章ですね。

ヒロインのモデルは、数人は現実にいる方なのですが……。

ちなみにMIDONAの好みは美紗子です。といっても、美紗子のモデルになった子が好き、とかそういうことはありませんから（笑）本当に、そんな事はないです。

まあ、幼馴染っていいですよ。最近流行のセリフを借りるなら、「まったく、幼馴染は最高だぜ！！」って感じです。このごろは蚊帳の外で、サブヒロインしか張れない幼馴染ですが、個人的には、やっぱりメインに置くべきだと思います。

そんなんで書き始めたジミ' Sですが、もともとハーレム系のラブコメ（エロコメ!?）が好きなのもあって、割とゆるいプロットの行き当たりバッタリな話ですが、何とかなってる気がします。

閑話休題。

ひとつ、何故今までの話に後書きがなかったのか、疑問に思っている人がいると思います。（……って、いるのか?）

単に、MIDONAが他作品を読んだときに読みづらいからです。

そんな理由で、各部が完結したときしか後書きはしない予定です。だから、こんなに長くなるんでしょうけど……

あまり長くなるのもあれなので（既に長いですけど……）、そろそろ終わりたいと思います。って、この後書き、本編よりも長い気も……（笑）

ここまで、読んでくれた方はありがとうございました。来週には、後日談をあげられるように頑張ります。

そして、これからもジミ' S×8を宜しく願います。

それでは。

追伸..よかったら感想&評価をお願いします(笑)

「お邪魔しまーす」

「……はあ」

守がリビングのドアを開けると、菜子が守の横を通り抜けた。当たり前のように中に入っていく菜子の様子に、疲れのせいもあってか守の口から自然と溜め息が漏れた。

中をみると、美紗子、芽衣、梓の姿が無くなっていたが、奈緒たちはそのままりビングに残っていた。

「ただいま」

「守、お疲れ様ですわ」

守が先ほど座っていた位置に腰を落とすと、テンションの低くなっている守の様子を見て、奈緒が代表して守に^{ねぎら}労いの言葉をかけた。その間にも、菜子が梓がいたのと同じところに腰を落としていた。

菜子の見た目の年齢は守達と変わらないぐらいだろう。顔はやや童顔気味、髪は2つに分けたものを前に垂らしそれをそれぞれ包帯のようなもので包んでおり、長さは胸くらいまでである。また、体の回りが不思議な色の幕で覆われていて……いや、きっと気のせいだろう。

全員が口を閉ざして菜子を見つめる中、守は代表して質問を投げかける。

「……で、お前は本当に菜子なのか？」

「そうだよっ」

菜子から相変わらずの無邪気な返事が返ってきた。

一応の確認の結果、目の前の少女は毎晩夢の中で会話していた相手である菜子——伏祇^{ふしぎ}菜子^{なし}で間違いないようだ。身元以外は不明な点ばかりだが……。

「ねえ、おにーちゃん」

「——ん？ どした？」

杏子に呼ばれたので、守はいったん思考を中断して、杏子の方へ向く。

「それで、このおねーちゃんは誰なの？」

「ああ——」

確かに今の会話だと周りが状況についていけないだろう。

とりあえず菜子の紹介を済ませようと、手で菜子を示して、

「えっと、こいつは——」

「いいよ、守。自分でするから」

守が何から話せばいいか迷っていると、菜子が守を制して立ち上がった。それと同時にその場にいる全員の視線が菜子へと集まる。

「はじめまして。伏祇菜子です。守とは毎晩、夜を共にしている仲です。よろしく願います」

菜子が話し終わると、横から突然重圧を感じた。

恐る恐る顔を横に向けると、今にも噴火しそうな様子の奈緒が目に入る。

直後、奈緒は机を叩きながら勢いよく立ち上がった。

「守、これはいったい——」

「ちよっと、それってどういうことよっ!？」

ドタドタ、という慌ただしい足音と共に、リビングに駆け込んで来る人影。それを見た奈緒が、言い掛けていた言葉を打ち切った。

対する人影——美紗子は息を乱していて、如何に勢いよく飛び込んで来たかを伺わせる。その表情は、怒りによるものではなく、ただ純粹に放っておけない言葉が聞こえたので駆け込んだ感じだ。

美紗子があまりにも慌てた様子なので、守はいったん席を立ち上がり美紗子の方へ向かう。

「美紗子、落ちつ——」

「守」

美紗子を落ち着かせようと声をかけたが、突然迫ってきた美紗子に肩をつかまれた。

普通に逃れようとすれば逃れられただろう。しかし、目に涙がう

っすらと浮かんでいる美紗子を見て、守が動けずにいた。

「今の嘘よねっ!? 嘘って言って、守!」

そのまま美紗子に、強く肩を揺すられる。段々と美紗子の親指が守の喉まで行き、力を込めているためか強く締め付けられる形となる。

「――ねえ、早く返事しなさいよっ!」

「……っく、おい……美、紗……子………」

このままでは身が持たないので返事をしようと努力をしてみるものの、のどが締め付けられているためか上手く声が出せない。

ついには意識が朦朧としてきて、だんだんと目の焦点が合わなくなってきた。

「止めなさい、美紗子!」

「このままだとお兄ちゃんが死んじゃいますっ!」

どこから聞こえてきた声とともに、肩から手が放れ、守は床に倒れ込む。

すると、テーブルの方から何人かが駆け寄ってきた。

「おにーちゃん!」

「しっかりして!」

「まーくん!」

駆け寄ってきた3人が自分に声をかけてくれて――意識を保てずに、守は安らかな眠りに落ちた。

「このままだとお兄ちゃんが死んじゃいますっ!」

刻一刻と青白くなっていく守の顔を見て、美香は本気で危険を感じ、奈緒と共に美紗子を守から引き剥がした。

「おにーちゃん!」

「しっかりして!」

「まーくん!」

ほぼ同時に杏子、涼子、早知が守に駆け寄った。

守が声に反応して上半身を起こそうとしたが、再び力なく床に倒れる。それを見て我に返ったのか、美紗子の押し返そうとする力が無くなったので、美紗子の身体を開放した。脈を取っていた涼子が安堵の表情を浮かべたのを見て、一気に空気が和らぐ。

「もう、美紗子ちゃんは守君のことになると我を見失いすぎよ」

「べっ、別に守の事だからってわけじゃ……」

涼子は軽い愚痴のつもりで言ったのだろうが、対する美紗子はモゾモゾと答えにくそうに返事をする。

その様子を見て、美香はふと美紗子をいじりたい気持ちになった。「ふふっ……まあ、初めてをあげた相手が、実は経験済みだったら大変ですもんね」

「……全然そんなこと考えてないわよっ」

美紗子は顔を真っ赤にして、あわてた様子で否定する。

「美紗子、守と済ませた事は否定しないんですわね……」

「そんなわけではないじゃないっ」

今度は奈緒が、美紗子にジト目で問いかける。

その様子はどこからどう見ても、守を好いている人間の反応で、いかげん認めればいいのにな、とつくづく思う。本人が気付いたら気付いたでライバルが多くなるだけなので、今のままの状態が好ましいのも確かなのだが。

あまりにも予想通りの美紗子の反応に、次はどんな言葉をかけようか、と心を弾ませていると、

「あ、おにーちゃんが目を覚ましたよ!」

そんな杏子の言葉に、美紗子たちと共に、一斉に守の方へと駆け寄った。

何やら騒いでいる声に気づき目を開けると、遠くにいた3人が一斉に走り寄ってきた。

「まーくん!」

「大丈夫ですよ？」

「変なところはない？」

それとほぼ同時に多方向から、様々な労わりの声が飛んでくる。そんな気遣いは嬉しいが、全員が声を出していないにしても、さすがに6人もいると多すぎる。

守はうるさくなって収拾つかなくなる前に、出来るだけ通る声を意識して返答した。

「ありがとう、大丈夫だから」

守が口を開いている間は一瞬声がやんだのだが、すぐに労わりの声が再開し始め――その直後に、3回の手拍子が響き渡った。

「うるさいから、とりあえず席について！」

全体が静まり返ったのを確認して、涼子が少し怒り気味に言葉を放った。守を囲んでいた幼馴染たちは散り散りに席に戻っていく。

「守君、立てる？」

「うん、大丈夫」

涼子自身も、そんな短いやり取りの後、安堵した顔で席に戻っていった。

「ふう……」

軽くため息をついてから、守も立ち上がり席へと向かう。

「その……」

「ん？」

途中、美紗子の声が聞こえたのでそちらを向くと、うつむいたまま歩いている美紗子が、口をわずかに動かしていた。

美紗子も守が振り向いたのに気付いたらしく目が合うと、美紗子は口を開いた。

「……さっきの、ゴメン」

「ああ、気にするなって」

実際、特に気にしてもいないのでそう答えた。

確かに死にかけた記憶はあるが、その行動は美紗子が守の事を心配してくれたからこそ起こったことだ。いつものように自覚を持つ

て殴られるよりは全然マシだ。

この心配の理由が、好意を持ってくれていてショックだった、とかなら嬉しいんだが……。可能性のない事を考えてもしようがない。美紗子が風邪を引いたときに交わした会話もあるわけだし。

「で……」

席に着くなり、今度はいつもの調子に戻った美紗子が口を開く。

「この子誰なのよ？」

この子、というのはもちろん菜子のことだ。

色々あってあやふやになっていたが、結果的には未だに名前しか紹介を済ませていない。美紗子に至っては、それすらまだだ。

とりあえず、美紗子に名前の紹介だけでも済ませようと、菜子を示しながら、

「伏祇菜子。あのときの占い師だ」

簡単な情報しか与えなかったが、美紗子は『あのとき』で理解してくれたようで、すばやく菜子のほうに向き直り、

「ねえ、あなたってあのときの占い師なの？」

「そうだよ」

美紗子の質問に、菜子が間を空けることなく答える。

「それじゃあさ、あのときのあたしの願い事、かなってないんだけどどうなってるの？」

美紗子が多少重圧的に菜子に問いかける。

正直、内容が内容であるためその事には触れて欲しくなかったんだが……。

「さあ。どうなの、守？」

「まあ、その、あった……かな？」

この大人数の女子と同居、という時点で既に不幸の最中にあるのだが、今現在うちに仕方がなく身を置いている人もいるので、素直に返すわけにはいかない。

それ故、適当にはぐらかそうとしたが、美紗子に睨み付けられたので、早々に口を開いた。

「そう！　そういえば、あの後もう一度見に行ったときにはいなかったけど、何でだ？」

「あ、そうよ！　何でいなかったのよ？」

美紗子も多少違和感を持ったようだったが、それ以上に内容が気になるためか、相槌を打って菜子のほうへ目を向けた。

「えっとね……」

菜子が珍しく言いよどむと、数秒間の思考に入る。

「願いをかなえるには、宇宙からのエネルギーが必要になるんだ」

菜子は何か語りだしたが、一々突っ込むのも面倒なので適当に相槌を打っておく。

「でも、そのエネルギーを受け取れる量は不安定で毎日違うの。それで、エネルギーが足りなくて願いをかなえられないときは、お休みにしてるってわけ。ドゥー・ユー・アンダースタン？」

何故か最後だけ英語だった。しかも発音が日本流。

「まあ……大体は」

あまりのぶっ飛んだ内容に一瞬答えを迷ったが、ここで分かっていると言ったところで、追加で面倒くさい説明をされるだけなのでとりあえず理解の意を示す。

まあ、1つだけわかった事は……

「なあ、菜子？」

「何？」

多少皮肉っぽく菜子に呼びかけたつもりだったが、菜子は相変わらず純粹な瞳でこちらを見返してきた。

その瞳を見ると、これから言おうとする事に多少の罪悪感を覚えたが、それを振り払って、

「お前ってさ……」

特に何の意味も込めず、ただ思った事だけを吐き出した。

「電波系……ってやつ？」

守るが口を閉じる前に、菜子が机をたたいて抗議の意を示しながら立ち上がった。

「守、ひどいよ！」

菜子はこれまでとは違ってかなり必死に抵抗している。

これまでの態度から、皮肉の意味を込めていなくもなかったのだが……おそらくトラウマになっているか何かだろう。この発言からして、今まで回りにいじめられたりしてきたのかもしれない。今さらながら罪悪感が増してきて、誤った方がいいかどうかを本気で考え始めた矢先、菜子が続きを口に出す。

「電波系って言うのは、出来もしないのに超能力を持ってる、とかって言い張る人を指すのであって、私は本当に超能力が使えるんだから電波系じゃないの！ あんな人達と一緒にされるなんて心外にもほどがあるよっ」

「その発言こそ電波系なんじゃ……」

必死に弁解（？）している菜子に、美香の突っ込みは聞こえなかったようだ。みんな顔には出さないが、全員美香の突っ込みに同意しているだろう。その弁解の内容自体、電波系以外のなんでもない。しかし、実際８人の幼馴染がうちに集まっているところを見ると、あながち菜子の発言も出鱈目ではないのかもしれない。

どちらにしても、謝ろうなんて考えた自分が馬鹿だった。

菜子の弁解がこれ以上続くのか、と覚悟を決めたとき――突然、リビングのドアが開く音がした。

驚いてそちらを見ると、芽衣が姿勢よく立っていた。気付けば菜子の弁解も止まっている。

よく見ると、ドアの裏に人が隠れているような気がしなくてもないが……。

「芽衣、降りてきたってことは出来たってこと？」

「はい」

美紗子の期待を込めるような質問に、芽衣がいつもの笑顔で答える。

出来たって何の事だろうか。

「ほら、恥ずかしがってないで出てきたらどうですか？」

「そ、それは……」

守の疑問は解決しないまま、芽衣が隠れている人陰の腕を引っ張り始めた。

声と状況からして、人影は梓のようだ。

「もう、行きますよ。そーれ!」

「うわっ!?! ……その、どうだ?」

勢いよく引っ張られ、人影がついに姿を現す。

その人物は予想通り梓だったのだが……見たとたんに言葉を失った。

先ほどまでの雑な格好とは違い、髪もしっかりと整えられていて、服も女子高生らしいものに代えられている。

腕に傷がついたりしているが、その様子は大和人形のように、昔の梓をそのまま大きくしたような、先ほどまでのガサツな様子は一切無く、『大和撫子』、それを絵に描いたような印象だ。服も女子高生らしい、と言っても無駄な飾りが無く、梓らしさを引き立てていて、照れているために赤くなっている顔もまた可愛らしい。

今まで芽衣が席をはずしていたのはこのためだろう。服は美紗子のもののようだし、それで美紗子も席をはずしていたようだ。

あまりの美しさに、体が動かずにいると、

「ほら、守様。感想を言ってあげたらどうですか?」

「そ、その……」

そんな芽衣の言葉に背中を押され、何とか口を開く。

「可愛いと思うぞ。すごく可愛い」

「……そ、そうか。礼を言う」

守が感想を言い終えると、梓は今まで以上に顔を赤くして、恥ずかしそうにお礼を言ってきた。

話し方は違えど、この自己謙遜するところや、人の言葉を素直に受け入れて礼を言えるところなんかは、昔の梓と変わっていないらしい。

そんな様子に守が胸を下ろしていると、左右からもの凄い圧力を

感じた。

「そ、そう。それでなんで守君は菜子ちゃんのことを知ってたの？」

「そ、それは――」

それを見かねた涼子が出してくれた助け舟に、ありがたく乗っかる……つもりだったが、説明のしかたが出てこなかった。軽く愛想笑いで時間を稼ぎながら考えるが、特にいい案も浮かばなかったの
で、ありのままを述べる事にした。

「何故かいつも夢の中に菜子が出てきてて、それでその少女がこうやって現実に見れたって訳だ」

上手く説明できたか分からないが、とりあえず説明を終え安堵している
と、再び左右から怒気を感じた。

「守、まさかそこまで頭がいていたとは知りませんでしたわ」

「ねえ、その頭ってシヨック療法とかで治ったりする？」

「いや……」

ひたすら嫌な予感しかせず左右を見ると、既に立ち上がっていた美紗子と奈緒が、怒りをあらわに守を睨みつけていた。

「とりあえず黙りなさい、このド変態！！」

「げぼふっ！」

美紗子の叫びと同時に、守の頭はストレートと回し蹴りによって強打された。

守があまりの痛みに机に伏せている間にも、菜子が補足説明を加える。

「えーっと、私が宇宙からのエネルギーを使って、守が生まれた時から守の夢の中に入り込んでたんだ。私が守の記憶をそのたびに消したから本人に自覚は無かったんだけどね。だから私も守と幼馴染ってわけ。ちなみに、そんな訳だから守は中学二年生じゃないよ。

ドゥー・ユー・アンダースタン？」

「分かってるわよ、そんなの」

「当たり前ですわ」

菜子が訳のわからない説明と共に、守の無罪を証明(?)してく

れていた。それに2人は頷いたが……本当に分かっているのだろうか。……いや、あの目は分かっているのかもしれない。だったら何故あの2人は怒りだしたのだろうか。菜子の不思議な口癖と共に謎である。

「で、お前もこの家に住むのか？」

そろそろ痛みも引いてきたので、守は顔を上げて1番気になっていた内容を菜子に尋ねる。

菜子とは今日が初対面には違いないが、一応幼馴染なようなので可能性が無くもない。これだけ人数がいるわけだし、今さら1人や2人増えたところで変わりはない。なので、守が半ばあきらめの気持ちで返答を待っていると、

「楽しそうだけど、守の願いを壊す事になっちゃうから私はいいや」「え？」

予想とは違った菜子の返答に、守は内容を理解するのに数秒かかった。

「ねえ、おにーちゃん」

「何？」

理解した直後、杏子に呼ばれたので顔を向ける。

「おにーちゃんは何をお願いしたの？」

「それだけは聞かないでください」

これだけは誠心誠意頭を下げた。だって女子の前で、8人の異性の幼馴染と同居することが願いです、何て言えるわけが無い、不本意だったとはいえ。それもその対象を相手にならなおさらだ。

「私、そろそろ帰るね」

そんな菜子の声に顔をあげると、既に菜子がドアのところまで移動していた。

「それじゃあ、またね」

それだけ言い残すと、誰も何も言わない中、菜子はスキップしながら玄関へと歩いていった。

——こうして、
守と8人の幼馴染による同居生活が始まったので
ある。

after story 電波系って言うのは、出来もしないのに超能力を持つ

どうも、MIDONAです。

ついにジミ'sの第一部を完結することが出来ました。今まで応援してくださった方、本当にありがとうございます。

今回の後日談なのですが……もの凄くエピソードチックになりましたね……。いや、エピソードなのですが。

今回の出来には色々ありますが、もし思った事がございましたら感想欄にお願いします。

で、ここで本当に一度完結になるので、感想、評価、レビューなど、よろしければ読者様の意見を聞かせていただけると嬉しい限りです。

宜しくお願いします。

ここで1つお知らせです。前話でも書きましたが、MIDONAは受験生です。それ故、第一部完結というタイミングのいいところで、本格的に休載に入らせていただこうと思います。（こうしないと、上手く離れられそうにないので……）

それゆえ、他の連載作品も基本的に休載に入ります。

そのうち内容紹介にもその旨の文章を付け加えさせていただきますと思います。

そんな感じなので、前話で言ったようにお気に入り登録はそのままお願いします（↑）。絶対3月には帰ってきますので。

今後も活動報告は週一とかで更新したいと思っておりますので、もしよろしければ事細かに覗いていただけたら嬉しいです。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1992s/>

ジミ's×8

2011年9月30日03時17分発行